
魔法少女リリカルなのは～奏でる世界～

天童翼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは〜奏でる世界〜

【Nコード】

N8846M

【作者名】

天童翼

【あらすじ】

ある日、ネコを助けたことによって、主人公は魔法少女リリカルなのはの世界に転生することになる。彼に待つ運命は！？

本編に入る前に

初めまして、てんどうつばね天童翼です。

投稿するのは初めてです。

魔法少女リリカルなのはにオリジナル主人公、オリジナルキャラ及び、他作品のキャラを交えた、物語になります。

基本、主人公がチートになっていきます。

他にも、原作キャラの、正確が私の脳内妄想によって変換されていきますので、原作と性格が違つかもしれませんが。

それでも、『いいよ』と思う、魔法少女リリカルなのはが好きな方のみの観覧でお願いします。

ちなみに、私はアニメでは、なのはシリーズが一番好きです

初投稿のため、駄文になってしまったり、読みにくい点、誤字脱字などがあるかもしれませんが、よろしくお願いします。

プロローグ（前書き）

すいません（泣）

改行などに失敗して、なかなか、ちゃんと投稿できませんでした。

これからは気をつけます（泣）

ブローグ

目の前に、今にも、車にひかれそうな、ネコがいた。

気づいた時には、もう駆け出していた。

周りの人から、悲鳴が聞こえる。

トラックのタイヤが急停車した時に聞こえる、キィィィっていう音が聞こえる。

ネコを抱いた感触の後に、激痛が襲ってくる。

良かった、なんとか、間に合った。

胸に抱いたネコが「にゃあ。」「って心配そうに、俺を見てくる。

大丈夫だよ。

そう言ってあげたかった。

でも、口が開かない。

残念だな。

もう、これで俺の人生は終わりみたいだ。

でも、ネコ救えたからいいかな。

周りで、いろんな人の叫び声が聞こえる。

そこで、意識がなくなる。

「起きて、起きて、起きて。」

ん？誰だ？

「あなたは、こんなところで死んじゃダメ。起きて。」

「ん、ん〜。」

「良かった。気がついたのね。」

そこには、黒髪で赤い瞳の綺麗な女の人がいた。

「君は？」

「私は、あなたに助けてもらった、ネコよ。」

「????？」

「初めから、説明するわね。私はあなた達の言葉をかりて、言うなら『神』よ。久しぶりに、現世に様子を見に行くことになったから、ネコの姿をして、人間の様子を見ていたの。それでね。あまりの人間の愚かさ、あきれていたところに、あのトラックが私をひきそまうところだった。でも、あなたのおかげで、私は死なずに済んだ。ありがとう。」

「え、えっと、話があまりにも、大きすぎて、よく分からないけど、とりあえず、どういたしまして。」

「ふふ。あなたって本当に良い人ね。．．．もし、私がいなければ、もっと多くの人を救っていたと思うわ。」

「そ、それは、ありがとうございます。」

「よしと、それでね。他の神様にも相談したんだけど、あなたには、転生してもらおうわ。」

「て、転生ですか。」

「そうよ。そして、その転生先は！！魔法少女リリカルなのは！！」

「．．．それって何ですか？」

「なのは知らないの!?!」

「．．．はい。」

「うっっん。仕方ない。見ましょう。」

↳ 6時間後↳

「シクシクシク」

「いい話でした。」

「そうですね。フェイトが友達になるシーンとか最高でしょ!!」

「はい!!」

「よし、次はA'sをみましょう!!」

「はい!!」

↳ さらに6時間後↳

「リンフォース!!!!!!」

「私も、初めて見た時は、叫んだわよ。今は、好きなだけ叫びなさい。」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!!!」

「続けてSSも行くわよ!!」

「はい!!!!!!」

↳さらに12時間後

「……泣きすぎて疲れました。」

「そっよ、なのは最高よー!」

「はい!」

「転生する?」

「もちろん!」

「それでね。Fateってゲームは知ってる?」

「はい。友達に借りて、やりました。」

「よろしい。それで、君に、ユニゾンデバイスとして、セイバーをあげるわ。」

「ええ!? いいんですか?」

「ええ、もちろんよ!」

「ありがとうございます。」

「さらに！！あなたには、エクスカリバー精製能力をあげる。これで、あなたとセイバーが離れて戦う時にも二人ともエクスカリバーで戦えるわ。」

「……ほんとに、いいんですか？」

「もちろんよ！！なにより、あなたが、介入した、なのはの世界が見てみたい！！」

「それが本音ですか！？」

「ええ！！最後にマスター・オブ・プログラムっていう能力もあげる。これは、あらゆるコンピュータを支配下における能力よ。」

「……そうですか。」

「ええ、だから、好きなだけ、暴れてきなさい。」

「分かりました。」

「ちなみに、転生後のあなたには知識として、あなたの生きた記憶を残すわ。」

「分かりました。」

「ちなみに、孤児として、高町家に拾ってもらえるようにするわ。」

「ええ!？」

「大丈夫、親に捨てられるんじゃないわ。私たちが生み出して、高町家に引き取られるようにするだけだから。」

「……そうですか。分かりました。」

「いってらっしゃい……!」

「いってきます!……!」

そして、少年は旅立って行った。

第一話〜契約とケーキなの〜（前書き）

今度は、きちんと投稿できたと思います（笑）

誤字・脱字はあるかもしれませんが（<|>）

プロローグの方も、きちんと改行できたものを投稿できたと思います（笑）

できれば、そちらから読み直して、もらえれば嬉しいです。

第一話　契約とケーキなの

僕は、神様の宣言の通り、高町家に引き取られていた。

「かなで奏、あ〜ん。」

そして、その僕の横で、僕に向かって、「ご飯を食べさせてくれよう
としているのは、高町なのはだった。

「お姉ちゃん。いいよ。僕、一人で大丈夫。」

「っ！？奏はお姉ちゃんに『あ〜ん』されるのが、嫌なの！？」

途端に、お父さんとお兄ちゃんの殺気が飛んでくる。

「っ、怖いよ。」

「分かったよ。あ〜ん」

「えへへ／＼／＼」

お姉ちゃんが嬉しそうな顔で、僕を見る。

僕には、神様のおかげで、前世の記憶が知識としてある。

だから、お父さんが怪我している間、お姉ちゃんに寂しい思いをさせないために、毎日、我がまま言ってたら、お姉ちゃんは、いつのまにか僕の世話をやくのが趣味になってしまった。

それにしても、いつになったら、セイバーくるのかな？

「それでね。奏。」

「何？お母さん。」

「今日、あなたの誕生日でしょ？」

一瞬、お姉ちゃんが『ピク』って動いたような。

「それで、誕生日プレゼント何がいい？」

「うーんとね。」

僕は考える。

新しいゲームでもいいし、あ、漫画でもいいな。

そうだー！

「お母さんのケーキがいいー！」

『ピク』

今度は間違いなく、お姉ちゃんが動いた。

「ダメかな？」

「え、ええ、分かったわ。でも、本当に私のケーキでもいいの？もつと他にゲームとかはいいの？」

「うんうん、僕は、ゲームより、みんなで食べるお母さんのケーキの方が好きだから。」

『ピクピク』

されにお姉ちゃんが動く。

今日はどうしたんだろう。

「奏は無欲だな。」

恭也お兄ちゃんがそう言うってくれる。

「そうかな？」

「そういうところかな。」

「ハハハハハハハハ」

そこで、お姉ちゃん以外のみんなが笑う。

なのはお姉ちゃん今日はどうしたんだろう？

「それじゃあ、僕、お外に遊びに行ってくるよ。」

「「「「行つてらっしゃい。「「「「

あれ？おかしいな、この時いつもなら、なのはお姉ちゃんが無理にでも着いて来るって言うのに。

まあ、いつか。

「行つてきましゅー!」

あ、噛んじゃったった。

『ポン』

なのはお姉ちゃんがなんか真っ赤だ、具合悪いのかな？

とりあえず、今日も公園に遊びに行こうって。

そして、家を出て、すぐに頭の中に声が響く。

聞こえていますか？

「はい。聞こえていますよ。」

それは、よかった、久しぶり、神よ。

「久しぶりです。」

今、セイバーをそっちに送るから、人気のないところに行ったら、教えて。

「はい。どうやって知らせたらいいですか？」

頭の中で呼んで。

「分かりました。」

人気のないところか・・・裏山かな。

あれ、周りを見たら、何人かのお姉さんが心配そうにこっち見てる、
どうしてかな？

とりあえず、行こつと。

僕が、『テコテコ』と走って行くのを見て、お姉さんたちが、可愛
い！っと思っていたのはまた別の話し。

く裏山く

神様、人気のない場所に来ました。

はいはい、じゃあ、そっちに転送するから。

はい。

そこで、奏の前に魔法陣が描かれていく。

それを、見て奏では、『相変わらず、魔法陣って面白い形してるよね』って思っていたのは内緒である。

「ユニゾンデバイス、セイバー、召喚に応じ参上した。問おう、貴方が私のマスターか？」

「うん、そうだよ、よろひ……く。噛んじゃった、痛い。」

「ん／＼／」

この時セイバーは『この可愛い生物は本当に私のマスターなのか？』と疑問に思ったのは奏に内緒である。

「僕の名前は高町奏。」

「私はセイバーです。あなたのことは神から聞いています。あなたに協力すれば、聖杯よりも確かに願いが叶えられると聞きました。これから、よろしく願います。」

もしかして、今、目の前にいるセイバーは原作始まる前のセイバー

なのかな？

そっちの方が楽しいでしょ？

「・・・」

「どうしました？」

なんか、神様ってホント楽しかったらなんでもやる人だね。

「それで、セイバーの生活場所なんだけど・・・どうしよう。」

もちろん、僕はまだ、僕は小学校にすら通っていない子供だ、お金なんて持ってない。マスター・オブ・プログラムを使えば、お金なんてどうにでもなるけど、なんか、それやるの嫌だな・・・。

「大丈夫です。普段は人形サイズで生活しますし、食事の方は神のところ、マスターが成人するまでは、食べに行っていていいと言われています。」

「そっか。」

良かった、これで、セイバーのご飯の心配はなくなった。

「マスターは今、何歳なんですか？」

「ん？セイバー知らないの？」

「はい。」

「僕は今日で6歳になったんだ。だから、一週間後に小学校に入学するよ。」

「そうなんですか。分かりました。」

「じゃあ、いったん家に戻るよ。今日は誕生日会を家でやってもらえるんだ。」

「わかりました。」

そう言って、セイバーは本当に、人形サイズになって僕の肩に乗る。

「認識阻害魔法を使っているので、一般人には見つかりませんから、安心してください。」

「OK。」

「じゃあ、帰ろう。」

「はい、マスター。」

「ん、そうそう、僕のこととは奏って呼んでね。セイバーの方が歳上だし。」

「そうですね、分かりました。奏と呼ばせていただきます。」

「うん、お願い。」

「っ／＼／＼」

セイバーがまた、『この可愛い生物は本当になんなんだ』と思ったのは、また内緒である。

（翠屋）

「奏、お誕生日おめでとくなの〜」。

お姉ちゃんが笑顔で僕を迎えてくれる。

「うん、ありがとうお姉ちゃん。」

「ど、どういたしましてなの〜」。

『マスター、あなたの笑顔は凶器です。』
『つとセイバーが思ったのも、また内緒である。』

「さあ、奏、席について。」

「はい、お母さん。」

ちなみに、裏山までは結構距離があるので、今の時間は午前11時である。

「」「」「奏、誕生日、おめでとう」「」「」

お父さん、お母さん、恭也お兄ちゃん、美由希お姉ちゃんもおめでとうって言うてくれる。

「えへへ、ありがとう／＼／」

「それでね、奏、お母さん、今日ケーキ失敗しちゃったのよ。」

「え!?!?」

「だからね、代わりになのはがケーキ作ってくれたのよ。」

「そうなの!?!?なのはお姉ちゃん!?!?」

「う、うんそうなの／＼／」

「ありがとうー!ー!」

「じよ、上手にできたか分からないけど・・・」

「うんうん、僕は」

「「なのはが作ったなら、絶対旨い!ー!」

「「「「「」

僕が言い終わる前に、お父さんと土郎お兄ちゃんが、・・・あ、お母さんがお父さんとお兄ちゃんをどこかに引きずって行く。

どこに行くんだろう?」

「さあ、奏、なのはの作ったケーキ食べようか。」

「うん、美由希お姉ちゃん。」

そう言って、なのはお姉ちゃんの作ってくれたケーキを切り分けて

くれる。

「いただきます。．．．なのはお姉ちゃん、あんまり見られると。」

「あ、ごめんなの。」

「まあまあ、奏、なのはも心配なんだよ。」

「じゃあ、今度こそ、いただきます。」

『パク』

「．．．どじなの？」

「．．．おいしい。おいしいよ！．．．なのはお姉ちゃん！．．．」

「ほんとー！？」

「しん、ほんとー！．．．」

「良かったね、なのは。」

「うん、ありがとうなの!!」

それから、お母さんが帰って来て、本格的に僕の誕生日会が始まった。

ちなみに、お父さんと恭也お兄ちゃんは今日、帰ってこなかった。

それと・・・セイバーにあのケーキが食べたかったと泣かれたのは、また別の話し。

第二話〜修業+なのは＝お話なの〜(前書き)

第二話です。

ただ読ませていただくのと、自分で書くのの違いに戸惑いまくってます(笑)

第二話〜修業+なのは「お話なの」

僕の誕生日から数日たった、ある日。

「セイバー、僕に剣術を教えて。」

「え？なぜ、私のですか？奏のお父上と兄上は相当な使い手だと思います、私が教えるよりも……。」

「それがね、一回だけ、頼んだことがあるんだけど、かすり傷ができたんだ。」

「はい。」

「その時ね。なのはお姉ちゃんが……。」

「分かりました。私が教えましょう。」

「ありがとう。じゃあ、木刀を持って裏山に行こう。」

「了解しました。」

く裏山く

「実は奏、私は神から伝言を頼まれています。」

「なに？」

「あなたには、あらゆる魔法、魔術を使いこなす才能があるそうなのですが、今の魔力では、満足に使いこなせません。」

「どづいこと？」

「すみません、分かりにくく言いました。奏の魔力は、歳を重ねるごとに増していくそうなのです。」

「そうなんだ。」

「はい、なんでも、二十歳でSSSオーバーランクになるそうです。」

「SSS!？」

「はい。なんでも、ちょっとチート使用にした方が面白いらしいです。」

「・・・そうなんだ。」

「はい。心中お察しします。しかし、今はなんでも、Dランクくらいだそうです。」

いきなり、大きな力を与えて、力におぼれるのを防ぎたかったんだろっな。

「それで、現状は、私が結界などを張ってサポートします。」

「え？セイバー魔法使えるの？」

「はい。神によって主に補助系の魔法を使えるようにしてもらって

います。」

「でも、その魔力って結局、僕からの・・・」

「いえ、私は私で別の魔力が与えられているので、その辺りは問題ありません。」

「そうなんだ。」

「では、さっそく、修行を始めましょう、まずは、エクスカリバーを出してください。」

「うん。・・・って、びびって出すの？」

「知りませんか？」

「うん。」

「私はてっきり、神から聞いているものかと。」

・・・神様ってどこか抜けてるような。

誰が、天然よ!!!

「ひゃー!!」

まったく、人がせつかく、説明しに念話送ってあげようとしたのに。

「そ、そうなんだ。」

そつよー!!

「それで、どうするの?」

それはね、まず、エクスカリバーをイメージする。

「うん。」

そして、体に流れる、魔力を手に集めて、伸ばして、イメージのエクスカリバーに近づける。

「そんな、奏はまだ、魔力の操作の鍛錬もしていません、いきなりできるわけが」

「うん。」

「え!？」

最後に『エクスカリバーを我が手に』って叫んで。

「エクスカリバーを我が手に。」

「な!？」

やはり、私が見込んだ通り、魔法の才能があったわね。

「しかし、神よ、これはさすがに、以上じゃないですか!？」

大丈夫よ、セイバー、本物の天才はこれくらい普通だから。

「……そうなのですか。」

「そんなことより、セイバー、神様、本物のエクスカリバーだよ。」

本当にエクスカリバーを創れるなんて!?

「はい確かにそれは本物のエクスカリバーですが・・・大きさが。」

確かに今、僕が創ったエクスカリバーはアニメで見たエクスカリバーの半分くらいの長さしかない。

仕方ないわよ、天才でも、まだ、未熟なのよ。

「さっきと言っていることが、矛盾してますよ、神。」

あなたもよ

「・・・くえない人だ。」

それじゃあ、後はセイバー、よろしく

「・・・はい。」

奏も頑張っ
てね。

「はい！！」

「では、奏、始めましょう。」

「うん、でも何をしたらいいの？」

「はい、まずは、エクスカリバーをできるだけ多く出してください。」

「

うん。」

それから、セイバーに言われた通りいエクスカリバーを出したけど、5本までが限界だった。

それも、五本目にいたっては果物ナイフくらいの大きさしかなかった。

「はあはあはあ。」

「大丈夫ですか？」

「うん、なんとか。」

「そうですか、エクスカリバーの本数は、現状、あなたの力を現すようなものですから、剣術と並行して、訓練していきましょう。」

「うん。」

ちなみに、風王結界はまったく発動しなかった。

「それでは、剣術の修行に入りましょう。」

そう言って、セイバーが木刀を構える。

「・・・あの、僕、握り方知らないんだけど。」

「な！？そこまで、素人なんですか？」

「……うん。」

この時、セイバーが『なんか、守りたくなる小動物だ。』っと思っ
たのは奏には内緒だ。

それから、晩御飯近くまで、セイバーに稽古をつけてもらった。

「今日はここまでにしましょう。」

「ありがとうございました。」

「それでは、先に帰ってください。」

「ん？どうしたの？」

「はい。神のところにご飯を食べに行つてきます。」

「あ、そっか、分かった。あんまり遅くなっちゃ駄目だからね。」

「はい。」

それで、いったんセイバーと別れて、家路についた。

ちなみに、傷だらけの僕を見て、なのはお姉ちゃんが、『ちよつと、奏を怪我をさせた人とお話してくるの』って、言っつて、家を飛び出したのはまた別の話し。

第三話〜喧嘩は男の子が損をするなの〜(前書き)

ギリギリ今日、二度目の投稿です。

頑張りました(笑)

第三話〜喧嘩は男の子が損をするなの〜

僕の誕生日から数日後、セイバー毎日稽古をつけてもらっているため、多少は上達したかな？

・・・ただ、なのはお姉ちゃんが毎日、『お話』するの！〜って言うてきかないけど、なんとか我慢してもらってる。

あの状態のなのはお姉ちゃんを見て、セイバーが『あれは、私でも相手はしたくないです。』って言うてたよ。

それで、今僕となのはお姉ちゃんと一緒に学校に向かっています。

なのはお姉ちゃんは実は同じ年だったりします。

「奏くん、ちゃんと聞いてなの。」

ちなみになのはお姉ちゃんは外では僕のことを奏くんって呼んでます。

なんでも、恥ずかしいらしいです。

「うん、聞いてるよ。」

「そうなの？」

「うん、今日は早く帰ってお母さんのお手伝いをするんだよね。」

「ちがうの！！奏くんに怪我をさせている子に会わせて欲しいの！

！」

肩の上に乗っている、セイバーがガクガク震えてるよ。

セイバーは認識阻害魔法を使ってるため、なのはお姉ちゃんには見えない。

「だから、僕がお願いして稽古つけてもらってるから、いじめられてるんじゃないよ。」

セイバーが首を『コクコクコク』って音がするほど、縦に振ってる。

「む〜。それでもなの。」

「その人に何かしたら、お姉ちゃんでも、怒るからね。」

「む〜〜〜。」

まだ、納得してくれていないみたいだけど、大丈夫かな？

〜放課後〜

「セイバー、今日もお願い。」

「はい、奏。そういえば、なのはちゃんは？」

「あれ、そういえばいないね。ちょっと探してみようか。」

「はい。」

僕とセイバーは色々なところを見て回るけど、いないな。

『パシン』

「奏、向こうの方から、ビンタの音が。」

「うん、セイバー見に行ってみよう。」

「はい。」

「痛い？でも、大切なモノをとられちゃった人はもっと痛いんだよ
！！」

そんな、なのはお姉ちゃんの叫び声が聞こえてくる。

「……奏。」

「……言わないで。」

「……しかし。」

「……言わないで。」

「……はい。」

なのはお姉ちゃん、それは小学校一年生に言って分かる言葉じゃな

いよ。

僕は前世の記憶が知識としてあるから分かるけど、アリサちゃんに分かるとは思わないよ。

「うわああああああ。」

ほら、アリサちゃんが泣き出して、なのはお姉ちゃんを殴ったし。

・・・あ、なのはお姉ちゃんもやり返した。

「奏、止めましょう。」

「・・・うん、でも。」

この後、すずかちゃんが止めて三人の仲がよくなるはずだけど、どうしよう。

「神にも原作介入をしろと言われているでしょう？それにここで何もしないなら、私との鍛錬は何のためにしているのですか？」

「・・・そうだね、ちょっと行ってくるよ。」

「お気をつけて。」

「うん。」

走って、三人の所に行く。

「やめて！...！」

「「「え!?!」」」

三人から同時に驚きの声が聞こえた。

「な、なんなのよ!?!あんた!?!」

「喧嘩はダメだよ!?!」

「か、かなでくん。」

「うるさいな!?!」

アリスちゃんが僕を叩く。

「い、痛い。う、う。」

「か、奏!?!」

なのはお姉ちゃんから悲鳴に近い叫びが聞こえる。

「よ、よくも、奏を!?!」

あれ?なんかさつきより喧嘩酷くなったような・・・。

「やめて!?!?!?!」すずかちゃんが大きな声を出した。

知ってても、ビックリだ。

そこから、三人共泣き出しちゃって、僕たちの親が呼ばれる事態に

までなつた。

ちなみに僕が泣かしたと思われて、すごく怒られたのは、また別の話だ。

「奏、不憫です。」

ははは、あの子、ホントに面白いわ!!

つと奏の騎士が奏を不憫に思つて、どっかのバカ神が笑っていたのは、これもまた別の話。

第三話〜喧嘩は男の子が損をするなの〜（後書き）

次の投稿は明日の正午の予定です。

できる限り、頑張ります。

第四話〜時間が経つのは早い〜（前書き）

宣言の通り、正午に投稿できました!?

今回は、いきなり、小学生三年生まで、時間が経ってしまいます。

もう少し、小学一年生を書きたかったんですが、ネタが思いつかず
。。。

そんな訳で、無印編スタートです!!

第四話　時間が経つのは早いのに

なのはお姉ちゃん、アリサちゃん、すずかちゃんの喧嘩から、早二年。

僕たちは小学三年生になりました。

あれから、なのはお姉ちゃんとアリサちゃん、すずかちゃんは原作通り、親友になりました。

でも、原作と違うのは僕もその親友の中に含まれてしまったところです。

セイバーとの修行も毎日続けたおかげで、かなり強くなれた。

セイバーが言うには、Strikersの時のフェイト位だったって言うた。

ん？それって、もうチートじゃない？

まあ、いつか

「じゃ、高町君、余所見しないの。」

「ごめんなさい。」

先生に怒られちゃったよ。

今は授業中だ。

でも、僕が開いている、教科書は高校生の物だったりする。

だって、授業聞くより、こっちやってる方が、面白いよ。

だって、考えたら、僕って普通に生きてたら、大学卒業してるもん

『キーンカーン』

あ、チャイムだ。

「じゃあ、これで、今日の算数の時間は終わります。」

「きりつ、れい。」

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

礼が終わると、アリスちゃんが寄って来た。

「や〜い、怒られてやんの。」

「む、ちょっと考え事してただけだよ。」

「それでも、先生に怒られたことにはかわりないでしょ。」

「アリスちゃん、そんなに言ったら、奏くんがかわいそうだよ。」

「む、すずか、あんた、奏の味方するの。」

「え？そんなつもりはないけど。」

「まあ、いいわ。それより、奏、あんた、また、わけの分からない本を呼んで。」

「ん？違つよ、これは数学の本だよ。」

「あんた、これ、私でも見たことないわよ。」

「だって、これ高校の教科書だもん。」

「「高校!?!」」

なんか変なこと言つたかな？

「奏くん、分かるの?」

「簡単だよ。」

「はあ、なんか、あんた見てるとホントの天才には勝てないって思い知らされるわよ。」

「ん？僕は天才じゃないよ。」

ただ、長く生きてるだけ

「みんな、なんの話してるの?」

トイレに行つていた、なのはお姉ちゃんが帰つて来た。

「ああ、なのは、今、奏の持つてる本の話してたのよ。」

「ほえ？奏くんの本？」

「うん、なのはちゃん、奏くん、高校生の数学の本持ってるんだよ。」

「え！？私、そんなの知らないよ！？」

「え？そうだったけ？」

「そうなの！！いつ買ったの？」

「・・・あ、なのはお姉ちゃんが塾に行ってる間だ。」

「ずるいの、私も欲しいの。」

「はあ、なのは、あんた、見ても分からないでしょ。」

「そんなことないの！！」

「それにしても、奏、あんた、ホントに塾行かないの？」

「無視しないでなの！！」

「だって、今のところ、勉強は分かるし。」

「・・・そういうことじゃなくて、一緒に私たちと行かないかって聞いているの／＼／」

「ん〜。鍛錬もあるし。」

「・・・そ、そうなんだ／＼」

『キ〜コン〜カ〜コン』

「さあ、みんな、席について。」

先生が入ってきた。

↳放課後の裏山↳

「 エクス（約束された）

カリバー（勝利の剣） 「

『バコーン』

・・・裏山の形が変わりました。

「セイバー、やりすぎたかな？」

「やりすぎです！！直す、私の身になってください！！」

「・・・ごめんなさい。うう〜。」

この時セイバーは『やはり、この子は将来、女泣かせになる』と

確信したが、奏には内緒だった。

「そ、そういえば、今日、なにか、念話のようなものが発信されていましたか、介入しなくていいんですか？」

「だって、今、介入したら、なのはお姉ちゃんが成長できないですよ。」

「・・・そこまで考えていたのですか？」

「うん。ただ、一応、セイバーには監視だけして欲しいな。」

「分かりました。奏。」

「お願いね。」

くその日の夜

なのはお姉ちゃんが魔法に目覚めて、さらにジュエルシードを二つ手に入れた。

ちなみに、今、僕は何をしているかと言うと、

「土郎お兄ちゃん！！なのはお姉ちゃんが家にいないよ！！」

なのはお姉ちゃんのことを恭也お兄ちゃんに伝えていた。

いくら、セイバーに監視してもらっているとはいえ、変な人に誘拐されない保障なんてないんだから、この際、ちよっと怒られてもらおう。

「落ち着け、奏、大丈夫だ。なのはは、美由希と一緒にコンビニに行っただ。」

「そ、そうなの？」

「ああ、だから、心配せずに、寝ている。」

「うん。分かった。」

僕に心配させないために嘘をついたみたい。

やっぱり、こういう時は頼もしいんだよね、お兄ちゃんは。

さてと、僕はもう寝よう。

「あら？奏、何やってるの？」

廊下から、美由希お姉ちゃんがリビングに入って来た。

「っ！？美由希、コンビニから、帰って来たか。ほら、奏、早く部屋に戻りなさい。」

僕の背中を押す、お兄ちゃん。

焦りすぎだってお兄ちゃん。

その後、渋々、部屋に戻る、演技をした。

「奏、今、戻りました。」

「ありがとう、セイバー。それで、どうだった？」

「私の目を通して、見ていたではありませんか。」

僕とセイバーの目は繋げることができる。

「あくまで、間接的に見ただけだから、直接見た、セイバーの意見が聞きたい。」

「分かりました。やはり、なのはちゃんの才能は素晴らしいですね。奏には及びませんが、あれは間違いなく後世に名前を残せるほどの才能です。」

「・・・そっか。今日はもう寝よう。」

「はい。明日も早いですし。」

ちなみに、なのはお姉ちゃんが半泣きになりながら、お母さんに怒られたのはまた別の話し。

もちろん、お父さんと恭也お兄ちゃんはお母さんのお説教を止めようとして、反省室に連行された。

ちなみに、なんとか、ユーノも飼ってもらえるようになったらしい。

第四話〜時間が経つのは早い〜（後書き）

次の投稿は今日の午後6時の予定なのですが・・・都合により前後するかもです。

一日に、二回投稿できるのは、たぶん、後、数日が限界です（笑）

第五話　犬が変身なの

「なのは、奏、昨夜の話し聞いた？」

教室に着いた僕となのはお姉ちゃんに、アリスちゃんとすずかちゃん
んが寄ってくる。

「昨日、行った病院で車の事故か何かあったらしくて、壁が壊れち
やってみたいな。」

すずかちゃんが昨日のことについて話してくれる。

「あ、そのことなただけだね。たまたま、美由希お姉ちゃんとコン
ビニに行った帰りにね、道で見つけたの。」

なのはお姉ちゃんがおずおず答える。

「そうなんだ、すごい偶然ね。」

「良かった〜。」

アリスちゃん、すずかちゃんも二人共安堵した様子だ。

「それで、そのフェレットはうちで飼うことになったんだ。」

「そうなんだ。」

「それで、もう名前は考えたの？」

「うん、ユーノくん。」

「え？そうなの、なのはお姉ちゃん、もう決めたの？」

知っているけど、ここでは知らないふりをする。

「う、うんそうなの。決めちゃったんだ。」

『キ〜コ〜カ〜コ〜ン』

そこで、チャイムが鳴って、いったん僕たちは自分の席に戻る。

その後、授業中、なのはお姉ちゃんとユーノと念話を使ってお話しただけど、秘匿にしないと、・・・周りにまる聞こえだよ。

話を聞いたところ、原作とまったく同じだった。

ってことは、このまま原作の通りに進むのかな？

〈放課後〉

やっぱり、原作の通り、犬がジュエルシートをとり込んで、化け物に変身した。

って生で見るとこんなに怖い生物だったの!?

なのはお姉ちゃんは、よく平気で戦えるよね!?

「奏、どうします? 介入しますか?」

セイバーが聞いてくれる。

「うん、しようかな。」

「それは、なぜ? 私はてつきり、次元震がおこるあたりからの介入だと思ったのですが。」

「それも、考えたんだけどね。それだと、お姉ちゃんに負担がかなりかかるでしょ? 魔法になれるまでは、休みながら、ジュエルシードを集めて欲しいんだ。」

これは本心だ。

なのはお姉ちゃんが管理局に入った後の事故もできたら、回避させてあげたい。

「分かりました。では、これを。」

セイバーは目だけ隠れる、仮面? をくれた。

「これは?」

「神からの贈り物です。原作介入するのに、まずは顔を隠した方がやりやすいでしょうって言っていました。」

「うん、そうだね、今度、会ったら、お礼を言わないと。」

「・・・はい。」

セイバーはこの時、『今、見たアニメで仮面をつけたカッコイイ人いたから、原作介入する時は、これをつけて、介入してみて!!』とキラキラした目で神に言われたことは黙っていることにした。

「後は、これにユニゾンして、髪の色変えれば完璧だね。」

「はい。」

ちなみに、僕とセイバーがユニゾンすると、髪は金髪、瞳は翠色になる。

そうこうしていると、なのはお姉ちゃんとユーノがやって来た。

「セイバー!!」

「はい。」

「「ユニゾン・イン」」

っと、これで、少しだけ様子を見よう。

「なのは、レイジングハートの起動を。」

もちろん、僕は浮遊魔法で、空を飛んでいるため、見つからない。

セイバーがちゃんと認識阻害魔法も使ってくれてる。

「起動つてなんだっけ？」

「昨日唱えたやつ。」

「あんな、長いの覚えてないよ。」

・・・なのはお姉ちゃん、それは覚えておこつよ。

「もっかい言うから、後に続いて言つて!!！」

「え〜〜。」

その時、もう、犬の化け物がなのはお姉ちゃんに迫る。

「危ない!!！」

もう咄嗟になのはお姉ちゃんの前に飛び出していた。

持っているのは、もちろん、エクスカリバー、もちろん風王結界も完全に発動した完全版。

「「え!?!」」

なのはお姉ちゃんとユーノの驚きの声が同時に聞こえる。

でも、今は、無視!!！」

「はあああああ!!！」

僕は、犬の化け物の突進をエクスカリバーで受け止める。

セイバーの一撃に比べたら、犬の突進はかなり軽かった。

犬の化け物も僕の持つ、エクスカリバーから、何か感じ取ったようで、いったん距離をとってなかなか、突進してこない。

「よし。」

距離がある程度離れたなら、好都合、練習した『あれ』を使おう。

「はあああああ！！」

僕は何も無いところを斬る。

本来、これで、犬の化け物が傷つきはずがない。

しかし、

「ぐわああああああ。」

犬の化け物は悲鳴をあげて、倒れこむ。

何をしたかって？

簡単だよ、エクスカリバーに纏わせている、風王結界の応用で、風を斬撃にのせて飛ばしたんだ。

実は威力の面で問題があったんだけど……心配無用でした。

セイバー、封印を。

了解です。

ユニゾンしている、セイバーに頼んで封印してもらおう。

今の僕はセイバーはいても、デバイスがないため、補助系の魔法が使えない。

だから、僕の中にいる、セイバーに頼む。

犬から出てきたのは、青い綺麗な宝石だった。

「綺麗。」

僕は、一瞬我を忘れて、ジュエルシードを見てしまった。

そっだ、これを、なのはお姉ちゃんにあげないと。

僕はジュエルシードを手にとって、なのはお姉ちゃんの所に向かう。

「はい。これ、大事な物なんですよ？」

「・・・は、はい。」

なのはお姉ちゃんは、僕だとは気づいてないみたい。

とりあえず、良かった。

「それじゃあ、僕はこれで。」

そう言つて、僕は神社から、離れて行つた。

もちろん、なのはお姉ちゃんが追跡できないように、飛行魔法で。

「待つてなの！！」とか「待つてください！！」って聞こえているけど、無視して帰ろつと。

ちなみに、家に帰つて来たなのはお姉ちゃんが不機嫌だったのは、また別のお話。

第五話〜犬が変身なの〜（後書き）

次の投稿は

明日の正午の予定です。

よろしくお願ひします。

（＾Ｏ＾）／

第六話　初めての失敗なの

僕が仮面の金髪の男に変身してなのはお姉ちゃんに接触した日から数日。

なのはお姉ちゃんは順調にジュエルシードを集めている。

僕が手伝わないといけない状況には、まだなっていない。

さて、今日はお父さんが監督を務める翠屋JFCのサッカーの試合だったりします。

ちなみに、僕は無理矢理、選手として、参加させられています。

僕としてはお母さんにクッキーの焼き方を習ってる方が好きなんだけど・・・お父さんが、『男の子は外で遊ぶものだ!!』って言うてそのせいで・・・。

僕はセイバーとの修行があるあから、外では十分、遊んでる？んだけど。

まあ、サッカーって、やってみると意外と面白くて、結構好きになっちゃただけど、まあ、それはお父さんには黙ってます。

僕のポジションはフォワード、なんか、軽く、やってただけなのに、セイバーとの修行のせいかな、常にハットトリック決めちゃうんだよね

なんか、一回、雑誌の取材受けたし。

普通なら、皆に、除けものにされそうんだけど、僕が、的確に皆にアドバイスしてるせいかな、常に皆の中心にいたりします。

まあ、始めは除けものにされたけど・・・またそれは別の話し。

「奏！！負けたら、許さないんだからね！！」

そして、今日はアリサちゃん、すずかちゃん、なのはお姉ちゃんが応援に来てくれています。

「頑張つてね、奏くん。」

「ありがとう、アリサちゃん、すずかちゃん。」

「「えへへ／＼／＼」」

「なのはお姉ちゃん、大丈夫？」

いつもなら、一番に声をかけてくれる、なのはお姉ちゃん。

今日はジュエルシード集めで疲れてしまっているためか、元気がありません。

「え、え、大丈夫だよ！？」

「なのは、あんた、今日どこか具合が悪いんじゃないの？」

「具合が悪いなら、帰った方がいいよ。」

アリサちゃん、すずかちゃんも同じ意見だったようで、なのはお姉ちゃんを心配そうに見る。

「だ、大丈夫だよ。ほ、ほら、奏くん、早く行かないと試合始まっちゃうよ。」

確かにもう試合は、もう始まりそうだった。

僕は、アリサちゃん、すずかちゃんに目配せして、なのはお姉ちゃんのことを、お願いしてから、グラウンドへと向かった。

「さて、今日も、頑張って、勝つぞー!!」

「「「「はい!!」「「「「「

お父さんの言葉に全員で頷いて、試合が始まる。

僕は、コートで中央で試合の様子見をする。

え？

フォワードだから、攻めろよ？

大丈夫。試合前半はたいてい、僕はミッドチルダー的な役割だから。

そうじゃないと、試合になんないよ

「くら！！奏！！何ボサつとしてるのよ！！攻めなさいよ！！」

あ、アリサちゃんがご立腹だ。

はあ、皆の練習のこともあるんだけどな。

仕方ない、僕は、敵のパスボールをカットして、もう一人のゴール前に上がっているフォワードにパスを出す。

ミドルシュートでも良かったけど、それじゃあ、僕の一人よがりだ。

『プーーーーー』。

ゴールにボールが入る。

「奏、ナイスアシスト。」

もう一人のフォワードの子が僕に声をかてくれる。

「ああ、次も行くよ。」

「おう。」

これで、アリサちゃんのご立腹の少しは・・・直ってない、僕が決めなかったから？

『プーーーーー。』

そこで前半が終わる。

さて、後半から、行きますか。

「はい、お疲れさま、奏くん」

マネージャーの子が僕にタオルを渡してくれる。

いつもは、なのはお姉ちゃんが飛んで？来て渡してくれるんだけど、今日は来てくれない。

ホントに体調悪いみたいだ。

「ありがとう。」

でも、とりあえず、せっかくタオルを持って来てくれたので受け取っておく。

「どういたしまして／＼／」

その頃、

「あの子、何、奏にタオル渡してるのよ!」

「……なのはちゃん、あれ誰？奏君に近づいてるけど……やるうか？」

「そうだね。奏に近づく悪い虫は殺さないかね。」

「・・・あなた、たち、黒いわよ。」

つという会話がされていたのを僕は知らない。

試合は後半戦に入る、ただし後半戦はワンサイドゲームになってしまった。

僕が積極的に動き出したからね。

結果は・・・6-0。

もちろん、翠屋JFCの勝利、僕はまたハットトリック決めたよ

「よし、皆、良い出来だったぞ、勝ったお祝いに飯でも食うか！」

「「「「「やった!!」「」「」」」」

・・・お父さん、そんな安請け合いして、またお母さんにお仕置き部屋に連行されるよ。

皆の前では口が裂けてもいえない、奏だったが、士郎が桃子にお仕

置き部屋に連行されたのは、また別の話し。

「「「「「ごちそうさまでした。「「「「「

その後、何事もなく、食事が終わる。

ただ、なのはお姉ちゃん、アリサちゃん、すずかちゃんが、こつちに来なさいよつと睨んでいたが、僕はキーパーの子とマネージャーの子とフォワードの子と食事をしていた。

ん？

なのはお姉ちゃんがキーパーの子がジュエルシード持ってるのを、なのはお姉ちゃんが薄々気づいてたみたいだけど、なのはお姉ちゃんは特に何もしなかった。

奏、なのはに知らせなくていいのですか？このままでは町に被害が。

ちよつと、今回はまだ、様子見。いざとなつたら、手伝うけど。

それでは、無関係の人に迷惑がかかる恐れが、それでも騎士です

か？奏。

大丈夫、セイバーが直してくれるでしょ？

・・・確かにそうですが、だんだん奏は私の扱いが雑になってきていませんか？

今度、ケーキあげるから、お願い。

・・・仕方ありません、いいでしょう／＼

商談成立つと。

ちなみに、その後は原作の通り？

ただ、原作と少し違うのが、マネジャーの子がちょっと嫌がってるような・・・気のせいかな？

あ、ジュエルシードが発動した。

なんつう、でかい木なんだ。

これで、よくニュースにならないよね。

あ、なのはお姉ちゃんがサーチャー出して核を探してる。

なのはお姉ちゃんが遠距離魔法発動した。

まじかで見るとホントにすごいよね。

まだ、魔法を覚えて一カ月たってないのに、遠距離魔法なんて。

あ、今度は、なのはお姉ちゃんが、落ち込みました。

「仕方ないな。行こうか。」

なのはお姉ちゃんの所に向かう。

「やあ、少女、また会ったね。」

もちろん、変身済みっと。

「え？」

なのはお姉ちゃんは今にも泣きだしそうだった。

「仕方ない、今回は俺がこの町を直してあげよう。しかし、次はな
いよ。」

気づかれないと思うけど、一応、一人称を僕から、俺に変える。

「え？」

「大丈夫だ、気にするな。」

セイバー、頼む。

分かりました、奏。

ユニゾンした状態なので、僕が直したように見える。

「・・・すごい。」

ユーノから、感嘆の声があがる。

まあ、無視するけど。

「あ、あの、ありがとうございます。」

「礼は無用だ、おまえを良く知る者から頼まれたただけだ。」

嘘だけど、全部嘘じゃない。

直したのセイバーだし、頼んだの僕だし。

「さて、では俺は帰らせてもらおう。」

「待つてなの！！」とか「待つてください！！」って聞こえているけど、また無視して帰ろうっと

「セイバー、ユニゾン解除。」

「はい。」

「これ、持って先に帰ってて。」

僕は仮面を渡す。

「奏はどうするのですか？」

「なのはお姉ちゃんを慰めてから帰る。」

「分かりました。」

さあ、なのはお姉ちゃんの所に向かおう。

「あ、奏。」

程なくして、なのはお姉ちゃんは見つかった。

やっぱり、町が直っても、落ち込んでる。

「どづしたの？」

「なんでもないの。」

「そう。」

僕は、なのはお姉ちゃんを抱きしめる。

道を通っている人が変な目で見てくるけど、無視。

「ふええ／＼／」

「泣いていいよ。」

「え？」

「泣きたい時は泣いていいんだよ。」

「うわあああああああ。」

その後、なのはお姉ちゃんは三十分くらい、泣いていた。

その後、お父さんと恭也お兄ちゃんに、『なのはを泣かせたなんて怒られたのは、また別の話し。』

第六話　初めての失敗なの（後書き）

次の投稿は、本日の午後6時の予定です。

第七話　金色の髪の少女なの

なのはお姉ちゃんの手泣の後、原作の通り、すずかちゃんの家でなのはお姉ちゃんはフェイトと初めて会ったみたいだ。

また、少し落ち込んでしまっているけど、今回は少し様子を見る。

そして、今、僕の目の前には、なんと、ジュエルシードがある

「・・・セイバー、なんで？」

「私に聞かれても・・・。」

「・・・そだよね。」

「・・・どうしましょう？」

「・・・僕が聞きたいよ。」

「・・・はい、では、とりあえず、封印だけして持っていてはどうですか？」

「うん、お願いしますよ。」

「はい。」

忘れてるかもしれないけど、一応、セイバーはサポートに適した魔力を神様から、もらっているため、封印なども、僕より数段上の実力を持っている。

え？

マスターより、デバイスの方が遥かに強いって？

・・・そんな気にしてること言わないで。

そして、町を少し歩き、サッカーの試合をした、あの河原にやってくる、急に空から、女の子が降りてきた。

・・・僕の頭がおかしくなったんじゃないよ！！

「・・・あなたの持っているジュエルシードを渡してください。」

空から降りて来た少女は、金髪のツインテール、間違いない。

フェイトだ。

まさか、こんなに早くから、僕のホントの姿で会うとは、さすがに予想外だよ。

僕は、回れ右をして、走り出す。

「なんで逃げるんですか!?!」

「だって、普通の人には空を飛ばないよ!?!」

「あ、しまった、管理外世界の人には魔法見せてはいけないんだっ
た。」

・・・フェイトって案外ドジっ子?

「とりあえず、何もしないから、止まってください。」

そういえば、なんで逃げるかって?

面白そうだから

「嫌だ、そんなの信じられない!!それが本当なら武装を解除して
よ!!--」

「あ、そっか。」

そう言って、フェイトは武装を解く。

「これで、話し聞いてくれる?」

「・・・分かったよ。」

「それで、お願いなんだけど、あなたの持っている、ジュエルシー
ドを私に出来ない?」

あ、そうそう、僕の魔力はセイバーに頼んで、抑えてもらってるから、フェイトやなのはお姉ちゃんには、ばれないよ。

「ジュエルシード？」

「あ、そっか、分からないんだ。・・・ジュエルシードっていうのは、青い宝石なんだ。」

「・・・青い宝石？」

僕は演技をしながら、ジュエルシードを出す。

「そう、それ、私に出来ない？」

「なんで？」

「・・・それは、私の母さんにはどうしても必要なものの。」

「そうなんだ。」

実は知ってるけどね。

いじわるをする気もないし、まあ、一個くらいは、いつか。

「いいよ、あげる。」

「ありがとう。」

「でも、君のお母さんにあげるんじゃないくて、君が可愛いから、君にプレゼントってことで。」

だって、プレシアさんってあんまり好きじゃないし。

「え・・・可愛い／＼／」

「ん？どうしたの？」

「うんうん、なんでもない／＼／」

「僕の名前は、高町奏、君は？」

「あ、私はフェイト、フェイト・テッサロッサ。」

「またね、フェイト。」

「うん、またね。」

その後、フェイトがプレシアさんに奏からもらったジュエルシードだけは渡さなかったのは、また別の話し。

第七話〜金色の髪の少女なの〜（後書き）

今回は少し番外編みたいな感じのお話でした。

一応、今後のお話にも、少しだけ関係してきます。

・・・少しだけじゃないかもです。

それから、後書きで、次の更新時間を、知らせるのって、今更ながらいいんでしょうか？

もし、知ってる方がいましたら、感想の方に書いて教えてください、お願いします。

あ、普通の感想も、お待ちしてます！！

最後の更新予告になるかもですが、次の更新は深夜0時あたりの更新になると思います。

第八話　温泉・お布団危険がいっぱいなのに

さて、予期せぬフェイトとの出会いから数日、全国では、ゴールデンウィークになりました。

そして、今、高町家一同とアリサちゃん、すずかちゃん、忍さん、ノエルさん、ファリンさんと一緒に海鳴温泉に向かっています。

世間で言う、家族旅行です。

なのはお姉ちゃんとユーノはこの温泉旅行の間はジュエルシールド集めをお休みするみたいだ。

ちなみにセイバーは神様の所にちょっと用事で行っている。

さてさて、僕はというと、今、久しぶりのピンチに直面しています。

「え〜、奏、一緒に温泉入ろうよ。」

なのはお姉ちゃんがダダをこねています。

「で、でも、アリサちゃんとすずかちゃん、それに忍さんとかもいるし。」

「え？私はいいわよ。」

え、忍さん、いいんですか!?

「私も、奏くんと温泉入りたいな」

すずかちゃん!?

「わ、私も、あんと温泉入ってあげてもいいわよ。」

ア、アリサちゃん!?

「い、いや、僕は、男だし。」

「ほら、皆もこう言ってることだし、お姉ちゃんと一緒にお風呂を
入ろうよ。」

なのはお姉ちゃん、お願いだから、上目づかいはやめて!!

「それなら、コイツを僕の代わりに連れってって。」

コーノをなのはお姉ちゃんに渡して、僕は、男湯に走り込む。

「キユウ!?!」

コーノすまない。

君の犠牲は無駄にはしないよ。

〔旅館の廊下〕

ふう、いい湯だった。

僕は温泉に入った後、旅館の廊下を歩いていた。

ちなみに、僕はお風呂が大好きなので、温泉に入っている時間は、女の子よりも長い。

少し進むと、なのはお姉ちゃんがオレンジ色の髪をした、女の人に絡まれていた。

アルフかな？

「ちよつと！？」

アリサちゃんが怒ってる。

まあ、助けてあげようかな。

「お姉さん、そんな小さい子に絡んでたら、綺麗なのに、程度が知れるよ。」

僕はなのはお姉ちゃんたちに、いつもは見せない、妖艶な顔をしてみる。

「あんだ、誰だい？」

「僕は、あなたが絡んでる、女の子の弟だよ、綺麗なお姉さん」

「あら、あんだ、分かってるじゃないか、私が綺麗だって。」

「そんだよ、綺麗なお姉さん、けど、あんまり、お姉ちゃんをいじめると、怒るよ？」

「はは、面白い子だね、怒ると、どうなるんだい？」

「綺麗なお姉さんが泣いてしまうよ。」

そう言って、殺気を飛ばす。

セイバー直伝だから、相当きついよ。

「っ！？」

お、そうとう驚いてる。

まあ、こんな子供が歴戦の戦士みたいな殺気を飛ばせるんだ。

驚くのも無理はない。

「・・・あんだ、何者だい？」

「ただの小学三年生だよ」

「ふん、まあ、いいや、あんたとはまたどこかで会いそうだよ。」

「僕もそう思いますよ。」

そう言っただけでアルフがどこかに去って行く。

「もう！…なんなのよ！！」

「まあまあ、アリスちゃん、あの人もお酒で酔っただけかもしれないし。」

なのはお姉ちゃんとユーノには何か念話で話してたみたいだけど、アリスちゃんとすずかちゃんには、何も言っただけだったみたいだ。

「それにしても、奏くん、カッコよかったな。」

「ん？そうかな？すずかちゃん？」

「うん。…ただ、あの人を綺麗だっただけだよ。」

「…うん。確かに言っただけ。」

「私たちには、言ってくれたことないのに、知らない女の人には綺麗だっただけで、知らない金髪の女の子には可愛いって奏くん言うんだ。」

っ！？

なんで、すずかちゃんがフェイトと会ったことを！？

「え、ほんとなの!? 奏!?!」

アリサちゃんまで、その話題に乗ってくる。

「その上、私たちには、ちゃんを付けるけど、その女の子には付けないで呼び捨てにしたんだよね」

なんか、かなり危ない気配が。

「ど、ど、ど、どうなのよ!?!」

「……おっしゃる通りです。」

「うん、私たちも、呼び捨てにするよね」

すずかさん、顔は笑ってるのに目が笑ってません。

「そ、そうよ、不公平じゃない。」

アリサちゃんの方がただ怒っているだけだから、あまり怖くない。

「す・る・よ・ね・」

「……はい。」

「じゃあ、言ってみて。」

「……すずか……アリサ。」

「／／／」

あれ？

なんで二人共、顔が真っ赤なんだ？

「そ、それより、早く卓球しに行きましょう／＼／」

「そ、そうだね、アリサちゃん／＼／」

そして、二人して『スタスタ』と歩いて行ってしまう。

この時、なのはお姉ちゃんが、さっきのやり取りで、アルフのことをどう考えたかまで、僕には考える余裕はなかった。

～夜～

「それで、なんで、僕はこっちの部屋にいるの？」

「なんでって、こっちで寝るからに決まってるじゃない。」

時刻は午後10時、確かに、小学三年生はもう、寝る時間だ。

そして、僕が今いる場所は父さんや土郎お兄ちゃんと一緒の男子部

屋ではなく、みんながいる、女の子の部屋だった。

「そうだよ、奏くん、私たちまだ、奏くんが他の女の子にちゃっか
い出したの許してないんだかね。」

いや、許すも何も、すずかたちには関係

「関係あるよ。」

エスパー！？

「さてさて、じゃあ、奏くんと一緒に誰が寝るかのじゃんけん大会
！！司会は月村家メイドのファリンが務めさせていただきます。」

「僕に拒否権なし！？」

「……………当たり前！！……………」

「それでは、行きましょう！！」

「どっこい！？」

「……………ジャンケン・ホイ……………」

アリサ　　グー。

すずか　　グー。

なのはお姉ちゃん　　グー。

え！？三人共仲いいね。

忍さん パー。

お母さん パー。

「よって、この勝負！！桃子さんと忍お嬢様の勝利！！」

「「「なんで！？」「」」

「・・・・・・・・」

なんでだよ？

「まだまだ、若い子に私の可愛い奏を渡すわけにはいかないわ」

「お母さん冗談だよね！？」

「ほ・ん・き・」

「・・・・・・・・」

「お姉ちゃん！？冗談だよね。」

「さすが、奏くんってとっても可愛いよね。」

「ええ！？恭也さんは。」

「捨てるわ」

「・・・・・・・・」

こうして、僕はお母さんと忍さんに抱きつかれて寝た。

なのお姉ちゃんがフェイトと戦うの見に行くつもりだったのに・・。

ちなみに、僕たちを起こしに来た、お父さん、恭也お兄ちゃんが、僕の状態を見て激怒したけど、お母さんと忍さんに『お置き部屋 in 旅館』に連行されたのは、また別の話し。

せっかくの休暇なのに、学校より疲れた温泉旅行でした。

「「ぎゃあああああああ」

お父さん、恭也お兄ちゃん、生きて帰ってきてね。

第八話〜温泉・お布団危険がいっぱいな〜（後書き）

投稿に失敗して、データが消えたかと思った時の焦りは、半端なかつたです（笑）。

なんとか、今回も更新できました。

次の更新は、今日の正午か18時になると思います。

忙しさの度合いで変わります。

すみません。

第九話　分かり合えない気持ちなの

温泉から、帰って来て早数日、なのはお姉ちゃんは、フエイトのこと、さらに落ち込んでしまっている。

うんうん、正確には、悩んでいて、全てが上の空って感じだ。

お父さん、お母さん、恭也お兄ちゃん、美由希お姉ちゃんもかなり心配していて、僕にそれとなく理由を聞いてくれて、お願いされた。

もちろん、僕は、なのはお姉ちゃんが何を悩んでいるかも知ってるし、なんとか、力になってあげることができる。

でも、僕の勝手な見解としては、なのはお姉ちゃんから、事実を打ち明けてくれるまで、待つことにした。

確かに、僕が答えを教えてあげたり、手伝ってあげるとは簡単だ。

なんたって原作の知識があるんだから。

でも、それだと、なのはお姉ちゃんの成長する機会を奪ってしまう

ことになる。

人間は悩んで成長するものだ、僕は思うから。

実を言えば、セイバーとも喧嘩しました。

「なぜ、奏は、なのはちゃんを助けないのでですか!？」

「セイバー、人は悩むから、強くなれると思うんだ。だから、ギリギリまではなのはお姉ちゃん自身に考えてもらおう。」

「なぜです?確かに成長は大切です。しかし、まだ彼女は九歳なんです。私のように王ではないし、何も、そこまで辛い道を行かせることもないでしょう。」

「それは、誰にも相談せずに王になった、体験談から?」

「っ!?!奏、何故それを?」

「知っているから、知っているんだ。この際だから言わせてもらおうけど、僕はセイバーが過去をやり直すのも間違っていると思っよ。」

「・・・例え、マスターでも、怒りますよ。」

奏ではなくて、マスター。

「なぜ、そこで怒るんだい?」

「私には私の信じた道があります。それを否定されるのことは私への侮辱です。」

「セイバーには、覚悟があるんだね。」

「はい、もちろんです。私は過去をやり直す覚悟があります。」

「うんうん、僕が言っている覚悟はその覚悟じゃない。自分を信頼してくれる家臣や民を裏切る覚悟がね。」

「……どういう意味ですか？」

「簡単だよ、セイバー、いや、アーサー王、あなたを信用してくれる家臣や民が一人もいなかったの？」

「……いました。」

「確かに国は最後には滅んだ。でも、家臣や民はアーサー王、君を信頼して、あなたの作る道を共に歩いたんだ。過去をやり直すということは、その信頼をもなかったことにしてしまう。つまり、信じてくれていた家臣や民を裏切ることになるんだ。……分かってたよね？」

「しかし、もしかしたら、私よりも優秀な王が」

「でも、あなたよりも劣っている王がなるかもしれない。」

「……」

「アーサー王、僕は間違ったことを言っているかい？」

「……………」

やはり、そこまで考えていなかったんだろう。

「あ……な……に……何……が分か……んだ。」

ん？

「あなたに何が分かるんだ！！あなたは王になったこともない。王がどれほど辛いものかも知らないで、知ったような口を聞くな！！」

「それほど、辛い王を他人になすりつけるのかい？」

「っ！？」

「どうなんだい？」

僕はセイバーが好きだ。

好きだから、今は心を鬼にして、言う。

いつかは言わなければいけないことだ。

「……………さ……………うるさい……！」

そう言い残して、セイバーはどこかに飛んで行ってしまった。

（学校）

「いいかげんにしなさいよ!」

アリサがなのはお姉ちゃんを怒鳴った。

「さつきから、何話しても上の空で、ボーとして、そんなに私たちと話すのが嫌なの!？」

「・・・ごめんね、アリサちゃん。」

「ごめんじゃない、そんなに一人で悩みたいなら、悩めばいいじゃない。行くよ、すずか。」

「ア、アリサちゃん、なのはちゃん、アリサちゃんと話してくるね。」

すずかが走ってアリサを追いかける。

アリサ・・・一応、僕も。

「ごめん、ちょっと、アリサ、追いかけてくるよ。」

「あ、ああ。高町もたいへんだな。」

「それほどでもないよ。」

友達にアリサを追いかけることだけ伝えて、二人を追いかける。

「アリサちゃん、アリサちゃん、アリサちゃん、何で怒ってるか何となく分かるけど、そんなに怒っちゃんだメだよ。」

「分かってるわよ！！でも、悩んでるの見え見えなのに、私たちに何も相談しないで、力になれなくても、一緒に悩んであげられるのに。」

「……ありがとう、アリサ。」

「「っ!?!」」

僕は、アリサと、すずかの会話に無理矢理入る。

「ふん、あんたがなんで、私にお礼を言うのよ。」

アリサはジト目で睨んでくる。

「いや、だって、なのはお姉ちゃんの……うんうん、なのはのこをそこまで、思ってくれてるから。」

「そんなの、当たり前じゃない！！なのはは私の親友よ、大事な人のことなら、いつまでも、悩んで怒ってやるんだから、あんたは違うのー!!」

大事な人のことなら・・・か。

アリサらしい。

僕にとって、セイバーは・・・。

そっか、そうだ。

いくらでも、ぶつかればいいんだ。

大切なら。

「ありがとう！！アリサ！！僕、もう一度、話してみるよ。彼女と。」

僕がアリサを説得するつもりが、逆に説得されちゃった。

そう言って、僕は、セイバーの元に走り出す。

「ちょっと、あんた、彼女ってなののこと！？」

「ん？違うよ、僕のパートナー。」

「「な！？」」

二人揃えて、驚きの声をあげる。

なんか変なこと言ったかな？

そんなことよりも、今はセイバーのことだ。

「それって、か、かの。」

「後の授業は休むって、先生に言っておいて!!」

そして、僕は走り出す。

待ってて、セイバー、もう一度、ちゃんと話をしよう。

第九話 分かり合えない気持ちなの (後書き)

今回、奏は、イジメっ子でした。

人気が、落ちるのも、辞さない覚悟で書きました。

少し、考えが大人のような気もしますが・・・前世の記憶があるの
で、その辺は、許してください。

次回の更新は、本日18時の予定です。

第十話〜ぶつかり合う心なの〜（前書き）

すみません。

ちよつとした手違いで、一時間ほど更新が遅れてしまいました。

第十話〜ぶつかり合う心なの〜

【INセイバー】

「うっ……おっ……。。。。うんたっ！……」

そう言って、奏に背を向けて飛んで行く。

分かっているんだ、分かっているんだ、心のどこかで、もう、私は
分かっていたんだ。

奏との二年間の生活の中で。

私の願いが間違っただものだということも。

でも、改めて言われると、かなり、苛立ちが起こる。

どうしようもなかった。

これまでの英霊としての生活を全て、否定されているようで。

奏に酷いことを言ってしまった。

でも、奏もあんな言い方はなかったと思う、もっと他に言い方が・
・やめよう、もう、全てが終わってしまったことだ。

いつも、私は起きた後に後悔する。

私は何も変わっていない。

あの時と。

王の選定の時と。

国が滅びようとした時。

いつのまにか、砂浜まで、来てしまっていた。

もう、何もかもが嫌だ。

嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ、嫌だ。

その時、青い光に包まれたような気がした。

でも、もうどうでもいい。

【END】

【IN奏】

「はあはあはあ。」

僕は、あれから、ずっと走り続けていた。

セイバー、セイバー、セイバー、セイバー。

今すぐ、謝りたい。

自分が間違っただけを言ったから、謝るんじゃない。

言ったことを否定するつもりもない。

でも、謝りたい。

会って話がしたい。

だから、今、全力で走る。

魔力をたどれば、簡単に見つかる。

でも、それじゃあ、意味がない。

だから、走る。

大人に呼び止められても走る。

ただ、走る。

すると、突然、

『トゴーン』

今までに、感じたことのないほどの魔力が放たれる。

海の方からだ。

それも、これはセイバーの魔力、しかも、いつものセイバーの魔力と違って、なんて、悲しい感じのする魔力なんだ。

僕は、全力で、魔力のした方に走る。

く砂浜く

「はあはあはあ。」

全力で走ったために、五分くらいで、砂浜に着いた。

そこに待っていたのは、

「セイバー？」

いつもの青い鎧を着たセイバーではなかった。

鎧は黒く染まっでいて。

顔には血管が浮き出ている。

すると、僕の呼びかけに答えるように、

「消える。」

殺気が飛んできた。

どうしたんだ、セイバー！？

僕が、セイバーを怒らせたから！？

奏、奏、聞いて！！

突然、頭に声が響く。

この声は、神様！？

うん、そうよ。それよりも、前のセイバーの額、両腕、剣を見て。

・・・ジュエルシード！？

そうよ、セイバーの負の心に導かれて、ジュエルシードが集まっ
てしまったの。本来の人なら、あれくらいでは、集まらないんだけ
ど、セイバーには、とんでもない魔力があったから・・・。

集まってしまったんですね。

うん、そうよ。

セイバーを元に戻すにはどうすればいいんですか？

・・・魔力ダメージによる、ノックダウン。

そうですか、分かりました。

待って、普通の状態でも、あなたはセイバーの勝てないのに、今のセイバーには、ジュエルシードが四つある、無理よ。

無理じゃないんです。やるんです。ただ、周りに被害がでないように、結界だけお願いします。結界にまわせる魔力はさすがになさそうだから。

分かったわ。外には一切被害がないような強力な結界を張っておくわ。ついでに外からも干渉できないようにしてあげる。神の名にかけて。

ありがとうございます。

「セイバー、今、元に戻してあげるから。」

そう言っつて、エクスカリバーを一本創りだす。

「……私は全ての破壊者だ。消えろ。」

「……行くよ、はあああ!!」

思い切って正面から斬り掛かる。

確かに普段のセイバーなら、こんなことをしても、軽くないなされる。

でも、今の正常な状態ではないセイバーなら……。

「甘いな。」

「バキン」

セイバーにエクスカリバーが当たる前にセイバーの持っていた、剣でエクスカリバーが折られた。

「な!?!」

「死ね。」

淡々と僕に向かって剣を振るう。

「っ!?!」

僕はぎりぎりです。セイバーの斬撃をかわした。

・・・つもりだった。

僕の頬に切れ目が入る。

そこから、少しだけど、血が流れる。

「嘘だろ、仮にも、相当本物に近くなってる聖剣をあっさり折るなんて・・・でも。」

僕は、もう一度、エクスカリバーを創りだす。

剣技で敵わないなら僕が、やれることは、真名解放。

正直言つてかなり、成長したつもりだけど、一日五回が限度。

五回目を使いきった後はエクスカリバーを創りだすこともできなくなる。

風王結界の風を使った斬撃もできるけど、セイバーをノックダウンさせられるだけの威力はない。

だから、チャンスは五回。

「 真名解放 」

風王結界を解除する。

「 高町奏、行きます！！ 」

「 愚かな人間よ。・・・死ぬ。 」

僕のエクスカリバーとセイバーの剣がまた、ぶつかると。

「 な！？ 」

しかし、今度驚いたのは、セイバーの方だった。

僕の剣は折れるどころか、刃こぼれ一つしていない。

さっきとは比べものにならない魔力を込めたからね。

その、つばぜり合いの状態から、

「 エクス（約束された）

カリバー（勝利の剣）

」

光の奔流がセイバーを包み込んだ。

【END】

第十話〜ぶつかり合う心なの〜（後書き）

次は3話くらい、続けて投稿したいので、更新時間は未定です。

明日中には更新できるとは思いますが……。

第十一話〜思いなの〜(前書き)

今日も、暑かったです。そんな暑さを吹き飛ばすくらいの気持ちで宣言した(笑)

3話連続更新、始まります。

第十一話　思いなの

【INアリサ】

「奏の奴どこに行ったのよ。」

「アリサちゃんは、なのはちゃんと言い争ってから機嫌が悪い。その上、私たちの大事な奏くんに『彼女？』ができたかもしれないんだ。冷静でいられるはずがない、いや、どうして冷静でいられようか。」

「・・・すずか、解説っぽいこと言うのはいいけど、あんた口に出してるわよ。それと、なんか喋り方おかしいわよ。」

「さあ、私たちに内緒で彼女を作った奏くんを調きよ・・・じゃなくて、お話ししないとね。」

「あんた、なんかキャラが・・・。」

「あ　そうだ、私たちの奏くんにちよつかい出した、雌狐は・・・ふふ、ふふふふ。」

「ほんと、やめなさいって、周りの男の子泣いてるわよ!!！」

周りの男子一同、奏に恋人ができたことに対する、嫉妬よりも、同情の気持ちで一杯だったのは言うまでもない。

そして、彼らは、心の中で、合掌していたが、アリサとすずかは知るよしもない。

こんな状況でも、なのはは一人で考え込んでいた。

金色の髪をした少女のことを、普段の彼女なら、こんな話を噂でも聞いたら、授業を休んで、奏に『O H A N A S I』しに行くのだが、今の彼女にそんな余裕はなかった。

奏がこの教室にいないことすら、気づけていない。

そんな時だった。

「ドゴーン」

そんな音が聞こえてきそうな程、大きな魔力を感じた。

ユーノくん、これって!?

家で待機している、ユーノになのはは素早く念話で話しかける。

うん、ジュエルシールドだ。しかも、たぶん、同時にいくつものジュエルシールドが発動したんだと思う。

あの子も来るかな？

これだけ、大きな反応なら、必ず。

うん、ありがとう！！私は直接向かうよ！！

分かった。でも、くれぐれも、無理はしないようにね。

そう念話をユーノに送って、なのはは席を立ちあがる。

そして、勢いよく教室のドアに向かう。

「どこ行くのよ。」

どこかに行こうとしている、なのはは私は話しかけた。

この思いつめた顔は、きつと悩みごとの原因の所に行くにちがいない。

「ア、アリサちゃん、そんなに怒鳴らなくても。」

「すずかは黙ってて、あんた、どこに行くつもりよ。もう、授業始めるわよ。」

「……ちよっと用事で。」

「ふん、で、どうせ、その用事の話してくれないんでしょ？」

「……」

やっぱりか。

「それで、その用事は奏よりも大切なんでしょ？」

「え？」

「気づいてないでしょ、奏、今、学校にいないわよ。」

「え!？」

やっぱり、気づいてなかった。

「朝からいないのよ。まあ、今のあなたは奏のことなんてどうだっていいんでしょうけど。」

「……そんなことないよ。」

「そんなことあるわよ。私たちじゃあ、あなたの支えになってやれない。それはもう分かったわ。でもね、奏は違うでしょ？あなたのいつも隣にいて、あなたを支えてくれたんでしょ？そんな奏にも相談しないなんて、あなた、奏を裏切ったことと同じよ。」

「……」

「いいわ、行くなら、好きにすればいいわ。先生には私たちが言っ
といてあげる。」

「……ありがとう。」

そう言って、なのはは走りだした。

それが、奏の元なのか、悩みの原因の所なのかは分からない。

「アリスちゃん……。」

「すずか、私は、怒り続けるわ。なのはの力になれない私に対してなのはが話してくれるまで。」

「ふふ、アリスちゃん素直じゃない。」

「う、うるさいわね、あんたも、先生にする言い訳考えてよ!!腹痛は奏で使ったしノノノ」

「ふふ、どうしようかな?」

「もづ。」

【END】

【INなのは】

奏が、教室にいない。

アリスちゃんに言われるまで本当に気づかなかった。

今まで、こんなことなかったのに。

私たちがまだ、小さい頃。

お父さんが怪我をして、お母さんが忙しくなって、お姉ちゃんもお母さんの手伝いを始めて、お兄ちゃんは、いつも怖い顔をしていて、近づけなかった時、私の隣にいてくれたのは、いつも、奏だった。

『お姉ちゃん、お外に連れて行って。』

言われた時は、煩わしかった。

私は、一人で遊びたいの。

『お姉ちゃん、お腹すいたね、ご飯一緒に作るうよ。』

わがまま、聞いてあげて、一緒にご飯を作ったら、勝つてに火を使ったことを、お母さんに怒られた。

『お姉ちゃん、お父さんに絵プレゼントしようよ。』

絵を描いている時は楽しかったけど、お父さんに直接渡せずに、悲しかった。

そんなやりとりを、毎日していた、ある日。

ついに、奏の存在が鬱陶しくなった。

そして、私は言うてはならない一言を言ってしまった。

『あんだ、なんか、弟じゃない!!家族じゃないの!!』

子供ながらに、奏が家の前に捨てられていた子だということを知っていたのだ、私は。

奏はとても、悲しそうな顔をして、

『そっか……。』

とだけ言って、その日、一日私の前から消えた。

その日は、私の中で、最悪の一日だった。

別に奏に酷いことを言った罪悪感からではない。

一人がこんなに辛いものだとは思わなかった。

何も、やる気が起きない。

ただ、ただ、泣きそうになるだけ。

そんな顔をお母さんやお姉ちゃんに見せたくなくて、その日は家に遅くまで帰らなかった。

『奏、ごめんね。』

次の日、その一言が言えなかった。

だから、奏は、昨日と一緒に、一緒にいてはくれないと思った。

でも、

『今日は一緒にいてもいいよね？』

笑顔でそう聞いてくれる。

その時、涙が止まらなくなった。

『お姉ちゃん、大丈夫！？どこか痛いのか？』

そう言って、私に寄って来て、手を握ってくれる。

それが、ただ、ただ、嬉しかった。

後日、知ったんだけど、奏には毎日、たくさんの友達が、一緒に遊ばうって家に誘いに来てくれた友達がいたんだって。

だけど、

『なのはお姉ちゃんが一人になっちゃうから、ごめんね。』

そう言って、断っていてくれたらしいのです。

それを聞いた時から、たぶん、彼に恋をしてしまったんだと思います。

姉弟の間の家族愛ではなくて、男と女の恋だと思えます。

まだ、幼い私には、恋が何か理解できない部分がほとんどです。

でも、これが、恋なら、恋ってなんてすばらしいんだろう。

奏といっただけで、幸せな気分になれる。

今まで、ずっと、奏のことを考えなかった日はなかったのに。

・・・私、奏を裏切ってたんだね。

今日、奏と会ったら、全て話そう。

魔法のことも、ユーノくんのこと、悲しそうなお目をしている、金髪の子のことを。

【END】

第十二話　予兆なの？

【IN奏】

「　　エクス（約束された）」

カリバー（勝利の剣）

光の奔流がセイバーを包み込んだ。

勝った！！

かに思えた。

セイバーは光の奔流にのみ込まれても立っていた。

「はあはあはあはあ。」

確かに無傷ではない。

でも、僕にできる、最強の一撃。

もう、これ以上の技はない。

「驚いた。ガキがこれほどの力を持っているとはな。それも、私と同じエクスカリバーを持っているとは。」

ガキ？セイバーには僕との記憶が……。

「なら、私も、本気を出そう。真名解放。」

カリ（勝利すべき）

バーン（黄金の剣）

「

僕の光とは違って、どす黒い、闇が僕に迫る。

「な！？」

セイバーはカリバーンを持っていないはず。

ジュエルシードの力？

後、三回しか使えなくなるけど、でも、迷っている暇はない。

これを受けたら、僕が、魔力ダメージでノックアウト……セイバーはきっと殺傷設定だから、死んじゃう。

「 エクス（約束された）

カリバー（勝利の剣）

「

光と闇、が対峙する。

……力は、互角。

「はあああああああ！！！！」

お互い、さらに魔力を上乗せする。

しかし、

「はあはあはあ。」

お互いの技が、お互いの技を相殺しただけで、終わった。
ただし、砂浜なので、土煙がおこる。

「セイバーは？」

僕は、周りを見渡す。

「うー!？」

正面のセイバーに気づいた時には、もう、左肩から太ももくらいまで、斬られていた。

僕の血が周りに飛び散る。

「あ、あああああああ!?!?!」

痛い、痛い、痛い。

今まで、味わったことがないほど、痛い。

お父さんは、僕たちが小さかった頃、これより、もっと酷い怪我を負った。

それは、どれほど、痛かったのだろうか？

僕は、仰向けに倒れる。

こんなにあっさりと？

確かに、二回の真名解放で、魔力は減っていた。

でも、油断していたのは確かだ。

僕の息が上がっているんだ。

きっとセイバーも、と。

セイバーを僕は助けられないのかな？

その時だった。

「アハハハハハハハハハ。」

セイバーの笑い声が聞こえてくる。

普通のセイバーからは、想像もできないほどに醜い笑い方だった。

「アハハハハハハハハハハ。」

まだ、笑い続けるセイバー、何が、そんなに面白いのかな？

「アハハハハハハハハハハ。人を斬るのって、おもしろい。なん
で、こんなに気持ちいいんだろう？もっと、斬りたい。早く次の
獲物を探しに行かないと。」

！？

僕の中で何かが、切れた。

「……しゃ……るな。」

「ん？まだ、生きていたのか？私に、まだ斬る快感を味わわせてく
れるのか？」

止めどなく、魔力が吹き上げる。

そして、僕は呟く。

それは、まるで、生まれた時、いや違う、もっと前から、もっとずっと前から、知っていたかのように。

「I am the world . . .」私は世界

それは、言葉を覚えたての子供の声のようで、

「The world always make mistake .
(世界はいつも、間違っ)」

それは、歳を老いた、老人の声のように。

「But I always choose .」しかし、私は選ぶ

大人の男性の声で。

「Because I expect . . . (なぜなら、わたしは期待する)」

大人の女性のような声で。

「So I want the world . . . (だから、私は世界を望む)」

全ての声が合わさったような声で。

そこにもはや、僕はいなかった。

「 アヴァロン（全て遠き理想郷） 」

【END】

第十三話　神様の観察なの

【INアテネ】

私はいつもと同じように、奏とセイバーの観さ　　じゃなくて、
心配して様子をうかがっていた。

「はあ、なんか、面白いこと起きないかな〜。奏ったら、原作に
あんまり介入しないんだから〜。もっと滅茶苦茶にしてもいいの
に。」

え？

神様の言うことじゃない？

いいじゃない

神様やってると、娯楽が少ないのよ。

下界のアニメはなかなか面白いけどね

「あら、喧嘩　喧嘩　おもしろ〜い」

「これこれ、そんなに面白がってはいけんよ、アテネよ。」

私の名前を呼ぶ、老人がそこにいた。

「あら、お父様、そう言いますけど、お父様も面白そうだから、来たのではないですか？」

「はは、バレつとたか、なにぶん、このごろ、面白い『人間』はなかなか、いないからの。」

「それにしても、奏はともかく、セイバーがあそこまで、怒るのは予想外でしたね。」

奏は時々、感情的になる時があつたけど、セイバーは今まで、つまり、私たちが呼びだしてからは一度もなかった。

「いくら、伝説のアーサー王とて、所詮は『人間』ということじゃよ。」

「・・・そうですね。」

それから、少しの間、私とお父様は、アニメのはな　世間話を
していました。

するど、

『ドローン』

私たちが見ていたモニターの方から、大きな音がした。

「な、なんじゃ!？」

「お父様、落ち着いて、奏たちに何かあったのかもしれませんが。」

そう言っつて、私とお父様は二人で、モニターを見る。

そこには、なんと、ジュエルシードを額、両腕、持っている剣に一個ずつ、つけているセイバーがいた。

しかし、いつもの、青くて綺麗な騎士甲冑ではなく、まるで、世界の闇を思いださせる程黒い騎士甲冑を身につけ、綺麗だった顔には、血管が浮かび上がっている、セイバーが立っていた。

「こ、これは、セイバーオルタか？」

「・・・一応、そのようです。」

「まさか、ジュエルシードを同時に四つも身にとり込むなど、さすがは、アーサー王といったところか。」

「それよりも、奏が異変に気づいて、やって来たようです。話をしてもいいですか？」

お父様は、たぶんダメとは言わない。

「構わん、教えてやりなさい。」

奏に急いで、言葉を送る。

「奏、奏、聞いて！！」

この声は、神様！？

私と奏の頭を繋げた状態のため、奏は頭で考えるだけで、私と会話できる。

「うん、そうよ。それよりも、前のセイバーの額、両腕、剣を見て。」

・・・ジュエルシード！？

「そうよ、セイバーの負の心に導かれて、ジュエルシードが集まってしまったの。本来の人なら、あれくらいでは、集まらないんだけど、セイバーには、とんでもない魔力があったから・・・。」

まさか、こんな事態になるなんて、私たちも予想外だけど・・・。

集まってしまったんですね。

「うん、そうよ。」

セイバーを元に戻すにはどうすればいいんですか？

「魔力ダメージによる、ノックダウン。」

自分で言うっておきながら、これは無理な方法よね。

今のセイバーの魔力は……。

そうですか、分かりました。

あきらめるだろうと、思っていたら、元気な声で、セイバーを倒す宣言をされてしまった。

「待つて、普通の状態でも、あなたはセイバーの勝てないのに、今のセイバーには、ジュエルシードが四つある、無理よ。」

無理じゃないんです。やるんです。ただ、周りに被害がでないように、結界だけお願いします。結界にまわせる魔力はさすがになさそうだ。

……それくらいなら。

「分かったわ。外には一切被害がないような強力な結界を張っておくわ。ついでに外からも干渉できないようにしてあげる。神の名にかけて。」

ありがとうございます。

そう言うて、奏はセイバーとの戦闘を開始した。

「ほほ、アテネよ、いつから、おまえは『人間』にそこまで、優しくなった？」

お父様は！！

「奏は、私が保護したのです。ある程度のことなら、許していただきたいのですが。」

「な〜に、他の神は『人間』など、気にもしとらんよ。」

「だから、彼が必要なのです。」

分かりきったことを。

私はここまで、お父様に苛立ったのは久しぶりでした。

ほんの四百年くらいぶり

「分かっておるよ。ほ、ほ、ほ。少し娘をおちよくっただけじゃ。」

「もう！！娘をおちよくらないでください。」

この神は！！

「まあ、良いじゃないか？それよりも、奏が斬られて、倒れたぞい。」

「な！？」

そう、お父様が言った時だった。

「えー!?」「なんじゃと!?!」

まさか、そんな、まだ

I a m t h e w o r l d . (私は世界)

「まさか、お父様・・・これは。」

「う、うむ。」

The world always make mistake .
(世界はいつも、間違っ)

まさかのことで、お父様でさえ、混乱している。

B u t I a l w a y s c h o o s e . (しかし、私は選ぶ)

だって、まだ何も・・・。

B e c a u s e I e x p e c t . (なぜなら、わたしは期待する)

リミッターをかけているはずなのに。

S o I w a n t t h e w o r l d . (だから、私は世界を望む)

「お父様、私たちは。」

「ああ、『人間』をなめていたな。」

アヴァロン（全て遠き理想郷）

【END】

第十三話 神様の観察なの（後書き）

いかがだったでしょうか？

面白くなかったらすいません（泣）

ご意見、ご感想お待ちしております。

次の更新は明日、正午くらいの予定です。

第十四話 解放なの（前書き）

さてさて、少し遅くなってしまいました。その分、頑張ったつもりです。

ちなみに、今回は奏のチートフラグが、ついに!?

第十四話 解放なの

【INセイバー ver ジュエルシード】

「 全て遠き理想郷 」

なんだ？

奴は何をした？

我が笑いだすと、突然、ガキが豹変しだした。

目が虚ろになっている。

「まあいい、殺すだけだ。真目解放。

カリ（約束すべき）

バーン（黄金の剣）

私の闇の斬撃がガキを襲う。

ふ、抵抗する素振りもみせんか。

「 G o o t （消えろ）

「なんだと!？」

突然、私の闇の斬檄が消え去った。

イライラする。

なんで、私の斬檄があんな、ガキに消されなければならないのだ。

さっきの光の斬檄との相殺も納得していないというのに。

「死ね!」

今度は、一瞬でガキの傍まで、距離をつめて、斬りかかる。

これで、終幕だ。

今度こそ、死ね。

「 Turn Down) 拒絶する 「

「ガキン」

何も無いところで剣が何かにぶつかって止まった。

「おまえは、いったい、何をしたんだ!？」

これは、楯で防いだのではない。

感覚で分かるこのガキは危険だ。

逃げるか？

いや、この我が逃げるなど、考えられない。

「はあああああああああああ！！！」

我は、目に見えない、いや、この世にあるか分からない、楯に何度も斬りかかる。

しかし、結果は

「ガキン、ガキン、ガキン、ガキン、ガキン、ガキン、ガキン、ガキン」

剣と楯がぶつかり合う音しかしない。

ガキに攻撃が通る、気配はない。

「……イ……ま……るか……。」

「はあああああああ……！」

さらに、斬りつける速度を上げる。

「 Destroy (破壊しろ) 」

「 バキン 」

「 な、なんだと!?! 」

カリバーンが碎け散った。

ま、まさか、私の剣がここまで、あっさり、碎かれるとは。

あのガキはいつたい・・・。

「 Genuine Name releases (真名解
放)

エクスカリバー
Excaltibur

ガキの持っている剣から、とてつもない量の光が溢れだす。

そして、我は、その光の中に包まれていった。

【END】

【インセイバー】

ここは？

私は、確か、奏と喧嘩して・・・いや、私が奏に理不尽に逆切れしただけだ。

あの、青い光に包まれてから、心が軽くなった。

『本当にそうなの？』

振り向いて見ると、そこには、私と同じ金色の髪で、翠色の瞳を持った、十歳くらいの女の子が立っていた。

『あなたは本当に心が軽くなったの？』

なぜだろう？

この子には本当のことを言わなければ、いけない気がする。

『当たり前です。現に私の心は軽くなったんですから。』

『あら？そう、私にはそんな風には見えないけど？』

「この子は何を根拠に言っているのでしょうか？現に今・・・」

『なんで、私がそんなこと分かるかって疑問に思ってるんですけど？』

『・・・』

『簡単よ、あなたが泣いてるから。』

『えっ。』

今まで、気づかなかったけど、確かに涙が流れ出てくる。

『な、なんなのでしょうか？涙が止まりません。』

必死に涙を止めようとしませんが、まったく、止まらない。

それどころか、止めようとする、余計に溢れ出てくる。

『何がそんなに悲しいの？』

私が質問したはずなのに、質問が帰ってくる。

しかし、私は素直に答えてしまっ。

『分かりません、心は軽くなったはずなのに。』

『王としての責務から、解放されたから？心が軽くなったの？』

『
.
.
.
.
.
.
』

『それとも、自分から、解放されたから?』

『
.
.
.
.
.
』

『ホントは分かっているんじゃない?』

『私は、私は、私は、私は、私は、私は、私は!!--』

『王ではなく、一人の女として生きたいと思ってしまったんでしょ？』

『っ！！？』

『だって、私はあなたなんだから、分かるよ。』

『しかし、それはできない。だって、私は』

『なんで、ここに来た時に心が軽くなったと思っっ？』

『・・・・・・・・』

『王の責務から解放されたからだと思う？それは間違いだわ。あなただが、ここに来て、心が軽くなったのは、考えることをやめたからだよ。現にまた考えだしたら、心が辛く重くなったでしょ？』

『・・・・・・・・』

『奏はね、正しいと思っよ。』

『なぜですか？』

『だって、考えなくて、ただ、貴方の心の中にいる子供の貴方は、確かに心が重くもなければ、辛くもない。でもね、心がずっと同じままなの。』

『・・・・・・・・』

『確かに、悩んでいる今の貴方からしたら、私は羨ましいかもしれない。でも、私は貴方が羨ましい。』

『なぜですか？』

『私は成長できないから。考えが常に同じ。でも、あなたは成長して新たな考え方をできるようになる。』

『そういうものなのでしょう？』

『そういうものって、いうより、私は貴方で貴方は私なんだから、もう分かってるんじゃない？』

『・・・・』

『もう、強情ね。子供の私の方が素直よ。』

『か、からかうな!!』

『ほら、あの子が迎えに来てくれたみたいよ。頑張っ
て悔いの残らない結論を出してね。成長した私』

『勝手なことばかり言って!!』

でも、なぜか、そこで、私は彼女に微笑みかけてしまう。

『でも、ありがとう。』

『いっつてこよ、素直じゃない、わ・た・し』

『いんちき。』

そう言って、私は心地良い暖かな光に包まれていった。

「いっつは？」

そう言うてみたが、さっきとまったく違う空間であることは分かっていた。

周りを見渡すと、横には海があった。

ここは砂浜のようだ。

そして、結界が張ってあった。

誰かがここで戦っていた痕跡もある。

「……………良かった。」

微かに奏の声が聞こえたような気がしました。

「奏？いるのですか？」

周りを見渡すと、砂浜で倒れている奏がいました。

「奏！？」

私は奏の元に駆け寄った。

「良かった。元に戻ったんだね。」

そこで、私の頭の中にジュエルシードをとり込んでいた時の私の記憶が入ってきた。

そう、まるで、入って来た。

「っ！？私はなんてことを！！」

「セイバーが謝ることはないよ。あれはきついことを言った僕が悪
いんだ。セイバーをそこまで、追い込んだとは知らずに。」

「そんなことはありません!！」

そう悪いのは私だ。

奏に正論を言われて逆切れして、奏にあたったのは私だ。

「ゲホッ」

奏は血を大量に吐いた。

「奏!？」

治癒魔法が使えない自分が腹立たしい。

自分で斬っておいて、言うのもなんだが、このままでは奏は死んでしまっ。

しかし、奏と私の周りにある結界は一向に消える気配はない。

だから、私は奏をこの世界の病院に連れて行くこともできない。

いったいどうすれば……。

セイバー聞こえますか？

「は、はい。」

この声は、神のものだ。

時間がありません。よく聞いてください。

「はい。」

いつも、私に話しかけてくる時は、軽い口調なのに今回は真面目な

声だ。

実は、その結界は私が張ったものなんですけど、どうも、奏の力によつて、私のコントロール下から、はずれてしまいました。だから、あなたの力で破ってください。

「しかし、仮にも神が張った結界なら、私では……。」

大丈夫よ。今のこの結界は私が張ってもものだけど、今は私とのリンクが切れているから、普通の結界と同じくらいのものよ。

「しかし……。」

今の私には剣がない。

それは致命的なことだった。

大丈夫、貴方に寄生していた、ジュエルシードの内三つは奏によつて破壊されましたが、後、一つだけ残っています。だから、それを使って剣を作って結界を破ってください。

「でも……。」

さっきまで、とり込まれていたのだ。

もう一度とり込まれる可能性が高い。

しかし、とか、でも、ではありません。あんたは、奏を見殺しに

するつもりですか!?

「っ!?!」

確かに外傷は剣で斬られたもののみですが、ジュエルシードを破壊する時に奏は使つてはいけない力を使つてしまいました。だから、このままでは、後、十分も放置すれば、奏は死んでしまいます。

「なんですって!?!」

奏が死ぬ?

私を助けたために?

私が悪いのに・・・奏が死ぬ?

嫌だ、嫌だ奏にここで死んで欲しくない。

だから、私はカリバーンを作っていたジュエルシードを拾い上げた。

求めるのは、私が英霊として、持つ宝具。

奏が創りだすもの。

かつての相棒。

「エクスカリバー!!!」

【END】

第十四話 解放なの（後書き）

英語表現、訳で間違いが、ありましたら、連絡をお願いします。

気をつけているつもりですが・・・。

次の更新は、明日の正午を予定しています。

第十五話 神様と魔法少女の出会いなの

【INアテネ】

「お父様!」

「分かっておる。承認する。あの小僧をここに一度連れて来い。他のバカどもが何か言ってきたも、わしが黙らせる。」

今、私は奏を回収するために、地上に降りるための許可をお父様にとってもらっています。

「ありがとうございます。」

そう言って、私は地上に降り立った。

海鳴市・砂浜

「ふう。」

地上に降り立った私は溜息をついてしまいました。

私の張った結界をセイバーは見事に破壊してくれたんですけど……。

「あなたまで、倒れてしまったんですか？」

そこには奏を抱えたまま気絶しているセイバーがいた。

ちなみに、セイバーが結界を破壊した直後に私は地上に降り立った。

「さてと、転移しますか」

すると、

「待ってー!!」

茶色の髪で髪を二つにくくった少女がやってきました。

あ、なのはちゃんだ

「あなたは何者なんですか!？」

あ、ユーノもいたんだ

「な・い・しよ」

「「え!?!」」

二人共どんな答えが返ってくると思っていたんだろう?

続いて、殺気がとんできた。

「ん?」

殺気の方を向いて見ると、金髪をツインテールにした美少女のフェイトちゃんがいた。

可愛い

あ、横にオレンジ色の髪でネコ耳をつけたアルフちゃんもいた。

うん、ネコ耳は文化ね

え?

ネコ耳じゃなくて、犬耳?

あれは、どう見てもネコ耳でしょ

「……ジュエルシードはどこ?」

あれ？

なんで怒ってるんだろう？

あ、そうか、ジュエルシールドは奏が三つ破壊してセイバーが一つ壊して、反応がなくなったからかな

ん~~~~~。

直してあげてもいいけど、ここはちょっとからかってみよう

え？

奏の傷はって？大丈夫、治癒魔法かけながら、考えてるから

神様をなめちゃ・ダ・メ・ダ・ゾ

「ごめんね 壊しちゃった テへ」

「「「「な!?!」「」「」」

あ、なのはちゃんたちまで驚いている。

「驚かれても、ホントのことだし」

まあ、壊したのは、奏とセイバーだけだね

「嘘だ!!ロストロギアを破壊できるはずがない!!」

アルフちゃんが、いち早く言い返して来る。

「でも、ほら」

ジュエルシードだったものの残骸がある、ところを指差す。

「嘘だろ?」

アルフが落ち込む。

「・・・嘘。」

フェイトちゃんも落ち込んでしまっ。

可愛い

抱きしめていいかな？

「あなたは本当に何者なんですか!？」

ユーノがまた同じ質問をしてくる。

私、淫獣は嫌いなんだけどな。

お風呂になのはちゃんたちと一緒に入るため自分の正体隠すような。

「淫獣じゃない!！」

あれ？

声に出してたんだ

「……ジュエルシードがないなら、私たちは帰るよ、アルフ。」

「う、うん、分かったよ。」

そう言って帰っていつちゃった

抱きしめられなかった

残念

「じゃあ、私も帰るわ」

そう言つて奏とセイバーを抱えて帰ろうとした。

すると、

「か、奏！？待ってください！！」

あっちゃくく、なのはちゃんに気づかれちゃった

「何」

「あ、あの、あなたが今抱えてる男の子・・・私の弟なんですけど。」

「あら、そうなのでも、この子は私が預かるわ」

「いえ、私が引き受けます。」

その瞳には確固たる、意思があつた。

一瞬でも、渡しちゃおっかなつて思つちやつた

可愛いから

「う〜ん。でも、無理」

「それなら、レイジングハート!!」

「All right my master」

レイジングハートちゃんを向けてくる

あら？

凜々しい顔も可愛い

「アクセルシュート!!」

「accelerator shooter」

五個の魔力弾が私に向かってくる。

うーん、どうしよう？

これくらい、当たっても痛くも痒くもないし。

っていうか、私の場合無意識に展開している、障壁に防がれて私まで届かないんだけどね

まあ、普通に、反撃しておこう

負けず嫌いな、なのはちゃんのことだから、きっとさらに努力してくれるでしょ

「アクセルシユート。」

ちなみになのはちゃんの魔法を見おう、見まねで使っ。

ただし、数はなのはちゃんの三倍の十五個

「きゃあ。」「うわあ。」

なのはちゃんとユーノに当たる。

まあ、非殺傷設定だから、大丈夫でしょう。

え？

なのはちゃんのアクセルシユートはって？そんなのハンドガンで戦車と戦うのと同じだよ

当たった瞬間、音もなく、消え去ったよ

「大丈夫だよ、なのはちゃん 別に奏くんにかかすわけじゃないから 傷を直してあげるだけだから 心配しないで」

そう言っつて、転移魔法を完成させた。

あれ？

さっきのって『あの』O H A N A S I フラグだったのかな？

もったいないことしたな

【DZ】

第十五話 神様と魔法少女の出会いなの（後書き）

【INアテネの教えて、神様!!】

アテネ「さあ、始めました、アテネの教えて、神様!!ここでは、質問などに答えて行くコーナーよ 一応、毎回、ゲストを呼んで行く予定だから、よろしく!!さてさて、初めてのゲストは!?魔法少女リリカルなのはの主要メンバーの割に、出番が、まだ、たった二回だけしかなかったという、可哀そうな金髪美少女フェイト・テッサロツサさんです」

フェイト「ふ、ふつつかものですが、よろしくお願いします。」

ア「もう 可愛い このまま、お持ち帰りしていい?」

フェ「え、えええええ!?!」

ア「冗談よ」

フェ「も、もう、からかうのはやめてください。」

ア「それでは、どんどん、行くわよ、はがきを読み上げて、フェイトちゃん」

フェ「分かりました。ペンネーム、タイトルに名前入っているのに、あまり出番がないお姉ちゃん。こんにちは。」

ア&フェ「こんにちは」

フェ「私の出番はいつになったらくるのでしょうか？未だに、セイバーさんの方が出番が多いような気がします。」

ア「正直に言っつて、あまり出番ありません」

フェ「ええええええ！！そうなの？」

ア「冗談よ」

フェ「もう、冗談やめてください……。」

ア「まあ、時間もないことだし、簡潔に言っつと、フェイトちゃんよりはあるわ。」

フェ「つてことは、私かなり少ないんですか？」

ア「ええ、結構少ないわ。」

フェ「ショックです……。」

ア「まあ、たぶん、きっと大丈夫でしょ」

フェ「冗談っつて言わないんだ……。」

ア「それでは、次の質問にいきましょう」

フェ「……これは、皆さんが気になっていると思うのですが、奏の能力はいつたいどんなモノなんですか？だ、そうです。」

ア「皆、それは気になるわね　でも、今は内緒　無印の終盤あたりに分かるから、それまで、我慢してね」

フェ「・・・答えてくれないんですね。」

ア「ネタばれしたら、面白くないでしょ？」

フェ「それはそうですが・・・。」

ア「そういうことで、今日はここまで、ご意見ご感想、お待ちしております　後、次の更新は、明日の正午の予定です」

フェ「お待ちしています。」

第十六話 王の選択なの

【INセイバー】

「う、う~~~~。」

頭が痛い。

なんで頭が痛いんだろう？

確か、私は、神の張った結界をジュエルシードの力を借りて破った後……。

どうしたんだろう？

「やっと目が覚めた？」

私の前にいたのは、神である、アテネだった。

「あなたが助けてくれたのですか？」

「うん、そうだよ かなり、他の神から、苦情がきちゃったけどね

」

そこまでして、私と奏を助けてくれたのか。

こころは素直に

「ありがとうございます。」

そう告げた。

「あら、どういたしまして」

お礼だけ言うと、次に質問に移る。

「私は何日ほど寝ていましたか？」

「え〜と、ここでの時間では一週間ほどかな。でも、現実の時間だと、七時間くらい？」

「ここは、神界でしたか。」

私は実は神界に頻繁に来ている。

奏が私を養えるようになるまで、私の食事はここですることになっているからだ。

ちなみに神界の時間の進み方は色々らしい。

そもそも、神には時間の概念がないため、あまり気にしないのだ。

まあ、不老だから、当然といえば、当然なのだが。

ちなみに、アテネのいる神界は現世の時間とのズレを二十四分の一にしているそうだ。

つまり、現世で一時間進めば、こちらでは、もう一日たっているっということだ。

日本の童謡である浦島太郎の逆である。

もちろん、なぜ、私が浦島太郎を知っているのかという疑問には答えないぞ！！

「うん、それでね」

「待ってください。奏は？」

そう、それが一番の気がかりだった。

奏はその後どうなったんだろう？

「大丈夫よ 奏も、もうすぐ、起きるわ。だから、奏が起きてくるまでにあなたと話さなければいけないの」

「・・・はい。」

内容はだいたい分かっている。

ジュエルシードにとり込まれたことだろう。

「あなたとの契約は、奏のサポートをする、その報酬で願いを叶える、そういう契約だったわね。」

いつもの軽い調子ではなく、表情は真剣そのものだ。

「・・・そうです。」

私は次の聖杯戦争に参加する前に神アテネに呼びだされた。

そして、一人の男の子のサポートをすれば、私の願いを叶えてくれるというのだ、その契約を受けないはずがない。

「鍛錬でポロポロにするのは仕方ないわ。でもね、今回は違う。仮に奏が許しても、私は許さない。」

「・・・当然です。」

当たり前だ。

護衛対象を殺そうとしたようなものなのだ。

「だから、私とあなたの契約は無効。もちろん、願いは叶えないわ。」

「・・・はい。」

「そこで、あなたには二つの選択肢があります。」

「選択肢ですか？」

どんな選択肢なんだろう？

「一つ目は、このまま英霊をやめて、元の自分の世界に戻ることに二つ目は、また、聖杯戦争に戻るか。どちらがいいですか？」

ようは、神に呼ばれる前に戻るといふことだ。

もう、私は自分の願いが間違っていると奏のおかげで分かったから、聖杯戦争に参加する必要はない。

だから、私が選ぶとしたら、一つ目の……あれ？涙が出てくる？

なぜ？

うんうん、分かっている。

理由は……。

「奏ともう一度やり直すことはできませんか？」

そう聞いた。

私は奏とまだ離れたくない。

「なぜ？あなたは奏といたいなの？」

「・・・私は奏に恩返しが・・・いえ、奏と共に残りの人生を過ごしてみたいのです。彼と共に。」

真剣にそう答えた。

「ハハ、アハハハハハハハハハハ」

突然、アテネが笑いだした。

「な、私は真剣です。」

バカにされているようで、イラつきました。

「OK、OK、あなたはシヨタコンなんですよ？」

「な、な、違います／＼」

あまりにも、神が失礼なことを言うので、私は自分でも、分かるくらい頬を赤くしながら、言い返してしまった。

「まあ、いいわ。私の一番望んでいた答えだもの。もし、あなたが、他の選択をしたら、消してたわ。」

笑顔で怖いことを言ってくる。

「・・・ちなみに、それは。」

「マジよ。それで、今後のことだけど、あなたには、このまま、奏のユニゾンデバイスとして頑張ってもらおうわ。ただ、今までは、私たちがしていた契約があったから、現世にいられた。でも、今はその契約が白紙になった、だから、あなたが、奏と現世で一緒にいるためには、もう一回、契約をしないといけないの。今度は奏とね。でも、契約するか、どうかは奏しただけだね。あなたの選択が彼に受け入れられますように。」

そう言って、神はニコニコ笑い続けた。

【END】

第十六話 王の選択なの（後書き）

【INアテネの教えて、神様!!】

アテネ「さあ、二回目も、始めました、アテネの教えて神様!!」

なのは「今回のゲストは、私、高町なのはです。」

ア「なのはちゃん、この間はごめんね」

なのは「いえいえ、悪いのは全部、翼ですから（笑）」

ア「やっぱり さてでは、最初の質問」

な「はい、アテネさん、あなたは、女の子が好きな百合の人ですか？」

ア「違います 私は、可愛い物をこよなく愛すものです。性別は関係ありません。」

な「・・・そうなんですか。」

ア「ええ、そうよ。」

な「次の質問です。奏は、いつになったら、登場しますか？」

ア「次？くらいから、登場すると思うわ」

な「そうなんですか、良かったです。」

ア「じゃあ、今日はこのあたりで、ご意見、感想お待ちしております」

な「お待ちしております。」

第十七話 再契約と名前なの

【IN奏】

目を開けると、知らない部屋の天井だった。

「……どこだ？」

やたらと豪華なベッドでまるで、お姫様が寝るベッドのようだった。

部屋も広く、家具も、高町家とは比べ物にならないくらい豪華だ。

あ、もちろん、高町家は一般的なベッドや家具だから貧しいってわけじゃないよ。

だって、これ、アリスやすずかの家よりも豪華だもん。

それよりも、なんでここにいるんだろう？

確か……セイバーがジュエルシードにとり込まれて、ジュエルシードにとり込まれたセイバーが人を斬ることが楽しいなんて言うもんだから、自分でもびっくりするくらい怒って……その後の記憶はない。

だって、セイバーが人を斬るのが楽しいなんて思うはずがない。

とりあえず、上半身だけでも、起き上がる。

すると、

「かゝな〜で〜〜〜〜!!!!」

誰かが、僕に飛びついて来た。

その飛びついた人を見ると。

え!?

「神様!!!」

「うん おはよう」

僕に抱きついて来たのは人ではなく、神様だった。

「そろそろ、私のことも、名前で呼んでね」

「え!?!神様って名前あるの?てか、なんでそんなに軽いノリ!?!」

今まで、僕に話しかけてくれた、神様はもっと、威厳があった。

「だって、いつまでも、硬かったらしんどいでしょ?」

「確かに・・・それで、神様の名前って何なの?」

そこで、神様は考える素振りを見せた。

なんで、考えているんだろう?

「うん、奏に考えてもらうのもいいけど、やっぱり、本当の名前を呼んで欲しいから。私は、ア・テ・ネ アテネよ」

アテネってあの有名な!?

「そうよ、あの有名な。」

「え!?!心を読んだんですか?」

「うんうん、奏の場合は顔に書いてあったよ まあ、いいから、呼んでみて」

「あ、はい。アテネさん。」

「ア・テ・ネ」

「呼び捨ては……。」

ジト目で僕を見るアテネさん。

仕方ない。

……神様を呼び捨てにするなんて。

「アテネ、あの後どうなったの?」

「うん、ちゃんと呼んでくれたね 話すわ。」

アテネはさっきまでの、おちゃらけな雰囲気から、いっきに真剣な

表情に戻った。

この切り替えの早さはすごいよ。

「あれから、約十日たったわ。」

「え!？」

十日も家を開けたなら、皆、心配しているはずだ。

「大丈夫よ。ここでの一日は現実世界の一時間なの。」

「・・・そうなんですか。」

ホントにこの人は神様なんだなと思った瞬間だった。

「それでね。重要なことから言うと、奏はジュエルシードにとり込まれたセイバーと戦った後、倒れた。それで、奏を助けるために神界へと、あなたを連れて来たの。」

「ここって神界なんですか？」

「ええ、神界よ。私たち神が住む、幻の都。まあ、結論から言うと、ただの人間はここに来れないんだけどね。理論的にも不可能だし。」

ん？

理論的？

「どういう意味ですか？」

「まあ、簡単に言うと、世界の狭間と狭間の世界ってこと。そこに存在するけど、存在しない。掴めるけど、掴めない、そんな世界。まあ、今は分からなくていいわ。そのうち分かるから」

「それで、セイバーはどうなったんですか？」

「ふふ、心配なのね」

「はい。」

彼女には謝らないといけないこともあるし、それよりも、ちゃんと助けられたかどうかも心配だし。

「大丈夫、元気よ。後で、ここに来て大事な話をしてもらうつもりだから、安心して、彼女をあなたは救えたわ。」

「そうですか。」

それだけ聞けたら、ひと安心だ。

「それから、これはとても大事なことなんだけどね。」

「はい。」

なんだろう？

アテネは今度は深刻そうな顔をする。

「セイバーを解放した『あの魔法』は使わないで。まだ、体ができていない状態で、『あの魔法』を使ったら、最悪あなたは死んでしまうわ。」

「……『あの魔法』？」

なんのことだろう？

「覚えてないの？」

「ぜんぜん。」

「それなら……いいかな？」

アテネは何か迷っている様子だったが、少しすると、また明るい顔になった。

「分かった、セイバーを呼んでくるわ。」

そう言って、アテネは部屋を出て行った。

ホントに元気な神様だ。

十分後

ベットの上で待っていると。

おずおずと扉が開きセイバーが入って来た。

申し訳なさそうな表情はしているが、どこか怪我している様子は無い。

それを見て僕は

「良かった。」

っと呟いてしまった。

アテネの言葉を信じなかったわけではないけど、それでも、自分の目で見るとまでは完全に安心できないのが僕だった。

「良かった！！ではありません！！私のために奏は死にそうになっ
ていたんですよ！！」

いきなり、セイバーに怒鳴られた。

さっきまでの申し訳なさそうな表情はどこにいったのやら。

「それで、セイバー、話をする前に、聞いて欲しいことがある。聞
いてくれ。」

それを聞いた時セイバーの顔が歪んだが、言わないつもりはない。

「セイバー。」

「・・・はい。」

「ごめん。」

「へ？」

セイバーが、なぜか呆気にとられていた。

「なぜです？奏、私はあなたに謝られるようなことは何もされてま
せんよ。」

「うんうん、セイバー、僕は君を傷つけた。君が気にしていること

を躊躇なく言ったんだ。僕が悪い。」

すると、セイバーは笑いだした。

「あなたがそんなだから、アハハハハハハハ。」

「何がおかしいんだよ。」

僕は少し腹が立った。

こっちは真剣に言ってるのに。

「す、すいません。あまりにも、クッククククク。」

今度は笑い声をこらえているけど、まったく堪えられてないから!!

「それで、セイバーの方の話って?」

その言葉を聞いた途端にセイバーは真剣な表情になった。

いや、どこか、悲しそうな感じがする。

「奏、私はあなたとの契約を切られました。」

「え？」

契約が切られたって？

「あなたを傷つける、サポート役はいらないそうです。」

「そんな!？」

あれはセイバーのせいじゃないのに。

「気にすることはありません。私も納得しました。」

「そ、それじゃあ、セイバーとは……。」

「ええ、本来なら、お別れです。」

悲しそうな表情でセイバーは言ってきた。

ん？

ちよつと待てよ？

「セイバー、本来ならって？」

「はい、私は奏と一緒にいたいとアテネに言ったところ、アテネは奏が承諾すれば、今度は、あなたの騎士として、あなたの傍にいてことを許してくれました。」

「でも、それって……。」

「はい。もう、私は元の世界に永遠に帰ることはできません。でも、私は戻ることよりも、私の間違いに気づかせてくれた奏と一緒にいたいんです。」

セイバー、そこまでの、決意を持っているのか……。

なら。

「セイバー、もう一で契約してくれ。」

「はい。ですが、今度はセイバーという名前は使えません。神との契約がないわけですから。だから、契約の時にあなたが考えてくださいね。」

「な!？」

それは予想外の事態だった。

僕がセイバーの名前を考える？

難しすぎる。

「契約はあなたの体が完全に直る、明日の予定です。よろしく、お願いしますね、奏。」

そう言って、笑顔でセイバー部屋を出て行った。

はあ、名前どうしよう?..

第十七話 再契約と名前なの（後書き）

【INアテネの教えて、神様!】

アテネ「第三回のゲストは、セイバーよ」

セイバー「は、始めまして、セイバーです。わ、私は、こんな場によ、呼んでもらえてー」

ア「セイバー、緊張しすぎよ、もっと、リラックス」

セ「は、はい。今日の、お便りは、セイバーの名前はアルトリアにするんですか?というものです。」

ア「はい、答えます、翼はまったく、新しい名前にするつもりらしいです。」

セ「そ、そうなのですか!?!」

ア「そうよ、オリジナルの名前にするらしいわ」

セ「そんなことして、他のFateファンに怒られないのでしょうか?」

ア「うん、何でも、続編で、アルトリアだと、不都合が生じるかもしれないから、あえて、変えないといけなかったらしいのよ。」

セ「アテネが、真顔で言うということは、本当なのですね?」

ア「何でも、そうらしいわ それも、この奏る世界よりも、ハイク
オリティーになるらしいわ まだ、プロット段階の物語らしいんだ
けどね」

セ「そうだったのですか、そういうことらしいので、アルトリアで
はなく、オリジナルの名前にしますので、ご了承ください。」

ア「そういうことです、他のFateファンの皆さん、ごめん
なさい。」

セ「それでは、今日の所は、ここまでで。」

ア「では、ご意見ご感想、お待ちしております」

セ「お待ちしております。」

まあ、いつか。

最高神を知らない奏だったが、アテネとゼウスは『この子は私たちの名前を聞いても驚かないんだから、かなりの大物だ。』っと思っていた。

しかし、実際は、その見解が間違いである。

この誤解がとけるのは、また別の話し。

「さてさて、それでは、本題に移ろうかの。」

ゼウス様が少し真剣な表情になって、そう告げる。

「奏、早く、始めましょう。今は、私たちの力でこの世界にセイバ
ーを留めているけど、もう、あまり長くは持たないわ。」

アテネも今回は始めから真面目である。

「どうすればいいんですか？」

率直な疑問だ。

僕は契約をする、方法を知らない。

「ああ、それは、大丈夫よ。こちらで、魔法陣は用意するから。」

「あ、良かった。」

「では、始めるとするかの？」

ゼウス様がそう言ってくれる。

そして、僕、アテネ、ゼウス様が契約のための儀式を始めようとする。

「待ってください。」

セイバーが声をあげた。

「ん？どうしたの？」

「そ、そのですね。」

頬を赤くして、下を向いてモジモジしている。

「あー！分かった、あなた、緊張してるのね。」

アテネがセイバーに問いかける。

ああ、なんか納得がいった。

セイバーでも緊張することあるんだな。

「ち、違います!！」

あれ？

違った。

じゃあ、なんなんだろ？

「ほほ、若い。ホントに自分が奏の傍にいいか、迷っているのじゃな？」

そうゼウス様が言うと、セイバーはコクコクと頷く。

なんか、可愛い。

「え〜、まだ、あなたはそんなことで悩んでるの？」

アテネが、普段の軽いノリに戻ってそう言った。

「そ、そんなことはありません！！私にとっては重要なことなのです！！」

「だって、奏、この分ならず屋、奏の口から言ってもらえないと分からないみたいよ」

アテネが僕の方を向いて、ニコニコしている。

・・・ニヤニヤが正しいのかな？

はあ、そんなことで悩んだのか。

だから、僕は言ってあげる。

満面の笑みと共に。

「僕の傍にずっといてください。」

「あっあっあっ／＼／／」

なのは、アリサ、すずかのハートを一瞬で貫いた、笑顔である。

効果抜群！！

しかし、本人にはその笑みが、女の子のハートを貫いている自覚はなかった。

「ほら、ほら、ちゃんと返事してあげないと。」

アテネもこの時、一瞬、奏に見惚れていたのだが、それは内緒である。

「あ、あによ。」

『噛んだ。』奏、アテネ、ゼウス、三人がまったく同じことを考えていた。

「う~~~~~~~~／／／」

普段の稽古の時は絶対に見せない姿をさらしてしまって、かなり顔が赤いセイバーだった。

「ほら、早く、返事してあげなさいよ。」

「・・・はい。」

そして、一呼吸おいて。

「奏、私は、今回のことで……いえ、もっと前から、あなたの隣にずっといたいと思っていました。よ、よろしくお願いします／＼」

「もちろん。」

「さあ、後は、うふふ、奏、な・ま・え、つけてあげて」

「う、うん。」

今度は僕が赤面する番だった。

セイバーもジッと僕を見つめてるし。

「色々、考えたんだけど……梨桜……ダメかな？」

梨の意味には、白いや美しい、そして、四月のって意味がある。

つまり、美しい桜、セイバーは綺麗だよって意味と、四月、卒業と始まり、別れと出会い、そして、僕達が出会った日がある月。

それを名前にしたかった。

だから、梨桜、綺麗な桜と、別れと出会い。

そんな意味をこめてみた。

もちろん、小学四年生の知識では、こんなこと思いつかないよ。

前世の記憶が、知識として、あったから、つけられた名前。

「ぐすつ。」

突然、セイバーが泣きだした。

「え、え、え！？嫌だった!？」

「い、いえ、ありがとうございます、梨桜とてもいい名前です。」
「はい、しゅ〜りょ〜っ〜」

「「え？」」

アテネが意味不明なことを言い出した。

「だ・か・ら、儀式が終わったの。」

「「はあ？」」

あんなグダグダで？

「そう、あんなグダグダで」

「心を読まないでください！！」

「ほほ、若いのはいことじゃな。アテネ、さっきの映像を着に今日は酒を飲むか。」

「はい、お父様。」

ゼウス様、さっきから、いないと思ったら、隠れてビデオとってたの！？

それも、ビデオカメラのメーカーはS NY！？

「いいですね」

「そ、そんな、もう一度やらせてください！！」

梨桜、涙目だよ。

「いいよ　ただ、形式だけだけど」

「それより、どうやって儀式したんですか？」

「神様、クオリティー」

はい、そう言われると、何も言い返せません。

「じゃあ、形式だけだけど、始めて。」

ゼウス様、めっちゃビデオカメラ構えてますよ!?

「では。」

梨桜!?

それでいいの!?

「呼びかけに応じて参上した、私はあなたの剣として、女として、この身果てるまで、あなたについて参ります。問おう、貴方は私のマスターか？」

真剣にそう聞いてくれる。

「はい。僕はあなたのマスターです。これからよろしく。」

「ぐすっ。」

また、梨桜は涙ぐむ。

今度は僕でも分かる。

これは、嬉し泣きだ。

だって、僕の目からも涙でてるもん。

横で、アテネとゼウスが、『あ〜、なんか若いって恥ずかしいなあ〜』。『って思っていたのは内緒である。』

第十八話 新たな契約＋ビデオカメラ Ⅱ ぐだぐたなの (後書き)

【INアテネの教えて、神様!】

アテネ「今回のゲストは、セイバーから、梨桜に改名した、我らがユニゾンデバイス梨桜です」

梨桜「二回目のなので、少し慣れました。」

ア「それは、良かったわね。」

梨「はい。」

ア「それで、その名前、気に入ってるの?」

梨「は、はい／＼」

ア「まあ、奏の趣味だからね」

梨桜「それで、批判が翼は怖いと言っていたのですが・・・。」

ア「こればかりは、前の回でも、言ったけど、続編のために仕方ないらしいけど・・・皆さんには、それで、納得してもらおうしかありません。」

梨「その続編については、ネタばれになるので、まったく触れられないから、余計つらいですね。」

ア「翼もなかなか、悩んでるらしいわ」

梨「それでは、今回は、この辺りで、「意見」「感想、お待ちして
ます。」

ア「お待ちしています」

第十九話　姉弟の再会なの

【INなのは】

奏が謎の女の人に連れ去られてから、もう七時間たった。

私は、今、自分の部屋のベッドにいます。

学校から帰る時間には、まだ早かったけど、お母さんは、私が帰って来ると、無言で抱きしめて、そのまま、『部屋で寝ていなさい』って言うてくれたのです。

ありがとう、お母さん。

でも、リビングでは、奏が帰って帰って来ないので、皆、探しに行くか話し合っています。

今まで、奏は絶対に一度家に帰って来てから、遊びに行っていたので、こんなことは初めてです。

私は奏が帰ってこないのは知っていたけど、知らない女の人に誘拐されたなんて言えませんでした。

「なのは、君のせいじゃないよ。」

ユ一ノ君が今日、何度目になるか分からない、慰めの言葉を言ってくれます。

本当はジュエルシードを探しに行きたいんだろっけど、私に気がつかってくれて、今日は一緒にいてくれます。

「うんうん、私にもっと奏を守るだけの力があつたら・・・。」

「違うよー!ー!」

「違わないよ!ー!」

思わず、大きな声を出してしまいました。

「聞いて、なのは、あの奏を連れて行った人は、たぶん・・・フェイトよりも遥かに強い。だって、僕でも、あの女の人ほど、魔力を宿した人は見たことないもん!!」

「それでも!!」

私は、そう言って、部屋を飛び出しました。

もう、部屋でジツとなんかしてられない。

無駄だと分かっているけど、奏を探しに行こう!!

そして、靴を履いて、家を飛び出そうとした時。

「ただいま。」

奏が扉を開けて帰って来た。

「奏!!」

私は無意識に、奏に抱きついていました。

「え！？なのはお姉ちゃん!?」

奏は驚いていましたが、私のことを優しく抱きとめてくれました。

「心配かけてごめんね。」

「うん、うん、うん。」

奏が帰って来てくれた。

もう、私はこれだけで、十分だった。

そして、十分間、私たちはそのままだった。

ただ、私と奏が抱き合っているのを見て、お母さんとお姉ちゃんは、『あらあら〜〜』。』って言った、けど・・・お父さんとお兄ちゃんが『奏!!殺すぞ!!』って言ったから、O H A N A S Iしたの!!

それで、奏に聞いたんだけど、あの奏を連れ去った女の人のことは、覚えてないんだって、今度、会った時こそ、O H A N A S Iなの!!

そして、奏は、私の悩んでいることについて、何も聞かずに、

「なのはお姉ちゃんのお悩み、色々思い悩まないといけないこともあるかもしれないけど、頑張って!!」

って言うてくれたの。

私は、お姉ちゃんだから、頑張るの!!

なんか奏に抱きついたら、元気でたの

フェイトちゃんのこと、頑張るの

【END】

【IN奏】

「え？なのはお姉ちゃんの前で、僕を誘拐して来たの！？」

アテネが衝撃の事実を口にした。

「うん、だって、なのはちゃんに説明してる暇なかったし、それに、あれ以上現世に留まってるってると、書類の量が半端なくなるのよ。」

ちなみに、今、アテネとゼウス様の前に三つ程の書類の山ができていた。

なんでも、神様が現世に降りるのは基本的にはタブーらしい。

まあ、一人一人がかなりチートだから、三人程、現世に行ったら、世界が壊れてしまうらしい。

神様の間でも、それはいけないってことで、現世に行く時は、かなりややこしい申請書を出さないといけないらしいんだけど。

それを出していても、この書類の山らしい。

僕たちのためとはいえ、ご愁傷様です。

「あ〜。そんなこと思っくらいなら、手伝って!」

アテネ、涙目になってる。

でも、ごめん、僕は書類仕事とか嫌

「私も嫌いよ!」

「お茶が入りましたよ。」

「ありがとう 梨桜」

「え、ええ／＼」

まだ、梨桜は、梨桜って言われるのに慣れていなくて、そう呼ばれると、すぐに赤くなる。

「そんなことより、僕と梨桜はいつ、戻れるの?」

「あう／＼」

なんか梨桜、キャラが変わってるような・・・。

「もうちょっと、奏と梨桜に関する報告書は終わるから、あと十分だけ待って〜。」

「分かったよ。」

〈高町家〉

「ふう、戻ってこれたね。」

「はい、でも、たいへんなのは、これからです。」

そっだ、なのはお姉ちゃんになんて説明しよう。

。アテネは、覚えてないって言えば、問題ないって言ってたけど・・・

ちなみに、梨桜はまた小人モードになって、僕のポケットに入っている。

そして、扉を開けて家に入ってみると。

「奏！！」

なのはお姉ちゃんに抱きしめられた。

その後、なのはお姉ちゃんと、ちゃんと、お話して、お父さんたちが、O H A N A S I I された。

ちなみに、アテネのことは、覚えてない、で大丈夫だった・・・本当にそれでいいの？

【END】

第二十話　次元震発生なの

お久しぶりです。

初めから、主人公の奏です。

アテネの元から、帰って来て、晩御飯を食べ終わったくらいにジユエルシードが発動して、なのはお姉ちゃんが飛び出して行きました。

そっか、今日は、次元震が起こる日だったのか。

え!?

たいへんだ!!

助けに行かないと、フェイトが、大怪我する!!

急いで、用意したけど、ちょっと、出遅れてしまった。

「間に合え!!」

「すみません、私もすっかり、忘れてました。」

梨桜も謝ってくれる。

でも、

「仕方ないよ、僕も梨桜も一回しか原作見たことないから、あんまり覚えてないのが普通だよ。」

実は確かに僕は前世の記憶が知識としてあるが、普通の記憶と同じで忘れていってしまう。

その上、僕が、『魔法少女リリカルなのは』を見たのは、転生前の一回きり。

梨桜も、『魔法少女リリカルなのは』を見たのは、僕の所に来る少

し前に一度だけと昔、教えてくれた。

「……はい。完全に覚えているのは、たぶん、アテネだけですけど……『面白そうだから、絶対に教えない』って言われてしまいましたし。」

「仕方ないよ。覚えている範囲で頑張ろう。」

「はい。」

その瞬間だった。

「バーーン」

次元震が起きた。

これが、次元震……なんか、梨桜のカービーンの方が凄かったよ
うな気が。

「し、失礼ですよ……！」

梨桜！？

心を読む能力をいつの間にか習得したの！？

セイバーから引き継いだ能力は・・・確か、剣術と魔力耐性くらいだと思っけど!？」

「そんなことを考えている暇があったら、早くフェイトの元に行かないと、フェイトに怪我をさせてしまいますよ。」

そうだった。

今回のことで、フェイトはジュエルシールドを封印するために、怪我をするんだった。

なのはお姉ちゃんが怪我するのも、嫌だけど、フェイトが怪我をするのも嫌だから、急がないと。

ちなみに、僕は、もう梨桜とユニゾンして、仮面をつけています。

〔海鳴市 市街地 結界内部〕

僕が着いた時は、ちょうど、フェイトがジュエルシードを無理矢理、封印しようとしているところだった。

「フェイト!!」

アルフがそう叫ぶ。

良かった、なんとか間に合った。

封印しようとするフェイトに近づく。

「誰だい!?!」

フェイトよりも先にアルフが気づいた。

フェイトはジュエルシードを持って、少し後ろに飛び僕と距離をとった。

そして、ジュエルシードを握りしめながら、僕をを睨んでくる。

女の子に睨まれるのは慣れてないんだけど・・・今は仕方ない。

「そのジュエルシードを渡せ。」高圧的に振る舞う。

普段の僕なら、絶対にこんなこと言わないよ

「・・・いや。」

そりゃそうだ。

だから、僕は拒絶の言葉を聞いた瞬間、フェイトに急接近して、フェイトの手を掴む。

「きゃっ」

ホントは女の子にこんなことするのは嫌なんだけど、こうでもしないと絶対に渡してくれないからね。

え？

黒いつて？

今は、そんなこと気にする余裕はないよ。

「フェイト!!」「フェイトちゃん!!」

アルフ、なのはお姉ちゃんが同時に叫ぶ。

まあ、予想通りかな。

梨桜、封印するよ。力を貸して。

もちろんです。

ユニゾンしている梨桜に頼む。

「「ジュエルシード、シリアル19、封印」「

ふう、ジュエルシードの封印が終わる。

梨桜、ありがとう。

いえ、本当に大変なのは今からですよ。

そうだ。なのはお姉ちゃんもフェイトもユーノもアルフもめっちゃ睨んでるよ。

「大丈夫、俺は、敵じゃない。」

一応、一人称を『俺』にしておく。

まあ、大丈夫とは思っけど。

「うそだ!!」

アルフが僕の言葉を否定する。

まあ、フェイトに乱暴したから、仕方ないけど。

「嘘ではない。もし、あのまま、その女の子に封印させてたら、無傷じゃ済まなかっただろ？」

「うっ。」

「そのジュエルシードをどつする気ですか？」

フェイトが警戒しながらも、口を開く。

「欲しいか？」

まあ、原作でも、確かフェイトが手に入れてたし。

フェイトに渡しても問題ないか。

あんまりジュエルシードの数が少なくて、プレシアさんに怒られるのは、かわいそうだし。

「うん。」

「じゃあ、くれてやる。」

フェイトにジュエルシードを投げる。

「わっ。」

驚いてるけど、なんとかジュエルシードを掴んだ。

「どついつつもりだい？」

アルフがフェイトの傍まで来て、僕を睨む。

なんか今日の僕睨まれっぱなし。

「俺は、このあたりに、そのジュエルシードがあるのが嫌なんだ。家族が傷つくかもしれない。だから、誰がそれを手に入れても、俺は構わない。もちろん、君たちがこの町をジュエルシードの力を使って、破壊するつもりなら、渡しはしないが、違っただろう？」

うん、あたりさわりのない、理由だ。

これなら、疑われないよね。

「……ありがとう。」

「っ！！フェイト、こんな男に礼を言う必要はないよ。」

ああ、アルフに嫌われたみたいだな。

仕方ありませんよ。今の奏は怪しさ抜群ですから。

……否定できない。

そして、フェイトが飛び去って行った。

「あ、待って!!」

なのはお姉ちゃん、驚いている時間長いよ。

しかし、フェイトの方が速さに関しては速いんだ。

追いつけるはずもなく、戻って来た。

「あなたはいったい何者なんですか!？」

うーん、どうやって答えよう？

まあ、適当で大丈夫かな？

「近所の者だ。」

「「え?」「」

こんな答えが返ってくるとは思わなかったのかな？

「そ、そうじゃなくてですね。あなたはいったいなんの目的で
」

「フェレット君、さっきも言ったが、俺はあのジュエルシードがこ

の付近にあるのが嫌なだけだ。だから、誰が持って行ってくれない構わない。」

「うっ。」

ユーノは食い下がるが、なのはお姉ちゃんが

「でも、私たちもあれを集めてたのに。」

う、なのはお姉ちゃんに冷たくするのは嫌なだけだ。

・・・仕方ないか。

「君たちがあの時、欲しいと主張しなかったから、悪い。俺は君たちの事情までは知らない。」

「で、でも、この前は、助けてくれたじゃないですか！！あれで私たちが集めていることは知ってたんじゃないですか？」

「確かにあの時は助けた。あのジュエルシードは君たちが欲しがっていたが、今回のジュエルシードを君たちが欲しかったのかまでは俺には分からない。」

「む。」

ああ、なのはお姉ちゃんに冷たくすると、なんか罪悪感が・・・。

「なら、僕たちは、全てのジュエルシードが欲しいんです。もし、

今度手に入れたら、僕たちにください。」

・・・ユーノ、自分が今、どれだけ厚かましいか分かってないのかな？

まあ、いいけど。

「必ずとは、約束できないが、考えておこう。それでは。」
そう言って、立ち去ろうとする。

「ま、待ってください。」

なのはお姉ちゃんに呼び止められた。

「ん？」

「あの、私は高町なのは、あなたの名前は？」

ああ、そういうことか。

「俺の名前はナイト。偽名だけど、そう呼んでくれ。」
そう言って、この場から立ち去る。

「」「偽名!?!」「」

二人して驚いていた。

いや、ここで名前言ったら、顔隠す意味がないと思うんだけど。。。

そして、その後、急いで、家に帰った、あんまり、遅くなると、お母さんのお仕置き部屋に連行される恐れがあるから。。。

あれは、この世の地獄だよ。。。

第二十一話〜お仕置きなの〜(前書き)

エイミィをエイミィに修正した第二十一話です。

内容は、全く変わっていません。

第二十一話 お仕置きなの

たぶん、今日あたりにフェイトがプレシアさんの所に行つて、フェイトがムチで叩かれる。

ホントなら、助けてあげたいけど、もし、今、原作介入して、フェイトがもっとすごいお仕置きをされたら嫌だから、我慢する。

アテネに聞いてみたら、案の定、その未来もあるらしい。

そして僕は今、梨桜とユニゾンして、海鳴臨界公園に来ています。

時刻はPM六時二十四分、ちょうど、ジュエルシードが発動する時間。

「ブオオオオオ!!」

木にジュエルシードが寄生して、木の化け物になる。

これ、どう見ても、お化け屋敷とかにありそうなんだけど。

そこそこ観察していると、

「封時結界展開!!」

ユーノが結界を展開してくれる。

「ピシューン」

いくつもの魔力弾が木の化け物を襲う。

「ふお、生意気にバリアまで張るのかい。」

「今までの奴より、強くなってる。それにあの子とあの人もいる。」

フェイト、アルフも到着する。

そこに、なのはお姉ちゃんも飛んで来る。

皆揃ったね。

さて、なぜ僕が公園にジュエルシードがあると分かっているのに、わざわざジュエルシードが発動するまで、待っていたかという点。

昨日、突然アテネから念話が来た。

どうしたの、アテネ？

うん 奏に一つお願いがあったね

何？

僕は何か嫌な予感がするけど、とりあえず、聞いてみることにした。

公園にジュエルシードがあるのは知ってるでしょ？

ああ、あのクロノとの出会いのイベントか。

その時にクロノを挑発して、ちょっとボコって。

え、なんでですか？

アテネから、こんな言葉が出るとは思えなかった。

うっくん、私、クロノって嫌いなの。KYボーイってうざいよね

ああ、一緒に原作見た時にも、アテネ『このボーヤ嫌い、なんかうざいから。』って真顔で言ってたもんな。

うっくん、分かったよ。僕も、ちょっとは空気読めって思うところ何回があったし。

でも、別に嫌いというところまではいかない。

さすが奏 今度デートしてあげるからね

そこで念話が切れた。

デートって、アテネ現世にこれないんじゃないかなかったっけ？

主に書類仕事が増えるの嫌だから。

っていうやりとりがあったために、僕はわざわざ発動するまで、待っていた。

さてと。

梨桜いける？

問題ないと思います、奏なら、あれくらい、三秒で終わります。

そっか。

そして、行動を開始する。

今まで、なのはお姉ちゃんのずっと後ろの位置にいたんだけど、魔力を足の裏にこめて、地面を蹴る。

これは、止まるのにコツがいるけど、光速移動できるすぐれもの。

確か名前は縮地だったかな？

まあ、ある一定の強さを持つ人なら、誰でもできるけどね。

「俺がやるから、おまえたちは下がってる。」

それだけ言った。

そして、エクスカリバーを創りだす。

もちろん、風王結界付き。

「待ってください。一人じゃ」

ユーノがなんか言ってるけど、とりあえず、無視。

まあ、ユーノだからいつか。

「ジャストオブウィンドウー！！（一陣の突風）」

風王結界の風を使った技。

前は斬撃を飛ばす時に何も言わなかった。

けど、やっぱり、技名がないと、気合が入りにくいから、梨桜と一緒に考えた。

「「「え！？」「」「」

四人が一斉に驚く。

仕方ありません、一振りで、あの怪物を倒したんですから。

梨桜が念話で話しかけてくる。

そうなのかな？

今、僕たちの目の前には、真っ二つになった木が倒れている。

そして、封印したジュエルシードを四人に見せながら、聞く。

「このジュエルシード、どっちが回収する？」

その瞬間に二組の間に火花が散る。

「あ、待った。それなら、俺が立ち会うから、二人が決闘すれば、いいんじゃないか？」

決闘フラグをほのめかすことを言うておく。

ちなみに、原作を変えることはしないと、アテネと話あって、決め
た。

僕が関わっても今回の事件を好転させることはできないらしい。

それを聞いた時、かなり悔しかった。

本当は、奏のアヴァロンを使えば、好転するのだが、そのことを、
アテネは奏に伝えなかった。

まだ、奏にはアヴァロンは早すぎる。

あの力は、奏の体がもっと成長しなければ使えない。

そうアテネが判断した。

梨桜を助けるために彼がアヴァロンを使った、その時は不完全だっ
た。

おかげで、奏は即死しなかった。

しかし、もう一度、体が成長する前に使えば、即死する。

だから、アテネにとっても辛い選択だったが、伝えないという選択をした。

しかし、今、それはまた別の話。

「分かった。」「やるよ、私も、フェイトちゃん。」

二人が向きあったその時に。

「ストップだ。ここでの戦闘は危険すぎる。僕は時空管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか？」

KY君が現れた。

・・・正直、確かにうざい。

アテネの言ったことが分かったような気がする。

「ピシューン」

クロノに向かって、アルフが魔力弾を撃ち込んだ。

「撤退するよ、フェイト、離れて。」

そう言つて、さらに魔力弾を撃ち続ける。

それを回避するため、なのはお姉ちゃんもクロノも距離とる。

「くっ。」「きゃあ。」

フェイトはここぞとばかりに、ジュエルシードをとろうとするが、

クロノは魔力弾をフェイトに撃つ。あれは直撃コースだ。

僕は縮地を使つて、フェイトの前に行き、エクスカリバーでクロノの魔力弾を薙ぎ払う。

「大丈夫か？」

「あ、はい。」

「まずい状況なのか。」

まあ、たてまえ上、聞いとかないと。

「見りゃ分かるでしょー!!」

「よし、それなら、ここは俺に任せて行け。」

なんか僕、ヒーローぽくてカッコいいかな？

「ふん、礼は言わないよ。」「あ、ありがとう。」

そう言って、飛び立つ。

「待て!!」

「待つのはおまえだ。」

僕はクロノの前に立つ。

「なんなんだ、君は!!公務執行妨害だぞ!!」

「知らないな。」

そうしている間に、フェイトは行ってしまふ。

よし、この後は、クロノと話すだけか。

「おまえは自分が何をしているか、分かっているのかい？」

「なんだと!!」

クロノって意外と怒りっぽいよね。

「急に決闘の真ん中に現れて、変なこと言っつて、攻撃されても仕方がないのに、それに対して、反撃するなんて。」

「僕は時空管理局の執務官だ。」

知ってるけどね。

「知らない。」

「何を言っている、管理外世界で魔法を使っている君が知らないはずがないだろう!!」

「今のおまえの言葉で前提が崩れた。おまえは今、管理外世界と言った。そこに君たちの法が適応されるのか？」

「クッ、うるさい!!」

梨桜。

ガキですね。

梨桜も同意見だった。

攻撃して来たのは向こうだ。

正当防衛だよね。

はい、奏。映像はとっています。

ならいいかな？

はい、やっちゃってください。

ってことだ。

O S I O K I 開始

僕に向かって来る、魔力弾に対して、

「ジャストオブウインドウ!!」

はい、全弾、薙ぎ払いました

「なんだと!?!」

さらに、クロノに縮地で近づいて、クロノを蹴って木にぶつける。

「っ!?!」

そして、小型のエクスカリバー（ナイフ位の大きさ）を何本も創りだす。

「ふんふんふん」

小型エクスカリバーを投げる。

これ結構、練習したんだ

クロノのバリアジャケットだけを貫いて、木に貼り付ける。

「なっ!?!」

さらに、どんどん創りだして、どんどん投げる。

完全に顔青くなってるよ。

さてと、遊ぶのはこれくらいにしておこうかな。

近づいて、小型のエクスカリバーを突きつける。

「さて、どうされたい？」

「あ、あのやり過ぎじゃあないですか？やめてあげた方が……。」

なのはお姉ちゃん……。

それは私からもお願いするわ。

声の方を見ると、大きなモニターがあった。

そこに映っていたのはリンディさんだった。

「あなたは？」

知ってるけどね。

私はそこにいる、クロノの上司であり母親である、リンディ・ハラウンです。今回の件はこちらが悪かったわ。だから、クロノを放してあげて。

「嫌です。」

即答した。

こんなKY君は一度泣かしておいた方がいい。

なぜかしら？

「こいつは、俺が解放した瞬間、俺に襲いかかる可能性があるから。」

「……否定できないのが悲しいわね。それなら、どうしたらいいのかしら？」

「あんたがここに来てくれ。もちろん一人でなどとは言わない。護衛を一人なら連れて来い。十分以内で。まあ、こちらは、何もする気はないがね。」

「なんか、僕、悪役になってない？」

「まあ、今頃、アテネも満足してるでしょ。」

「そんなこ」

クロノが何か言おうとしてるけど、小型エクスカリバーを顔の横に投げて、黙らせた。

「僕ってこんなキャラだったけ？」

「分かったわ。」

「五分後」

リンディさんはエイミィを連れてやって来た。

まさか、ここで、エイミィをチヨイスするとは。

この人は……。

「約束通り来たわよ。」

「じゃあ、また明日ここで集まるうか。」

「」「」「え？」「」「」

ここいる、クロノ以外の全員が驚いた。

「護衛に非戦闘要員連れて来た時点で、俺の何もしないと言った言葉を信用してることだろ？」

リンディさんに問い掛ける。

「え、ええ。」

「それなら、今日は、もう、遅い。なら、明日話した方がいい。それじゃあな。」っていうか、これ以上遅くなると、お母さんが怖い。

「クロノは？」

「大丈夫。俺が半径十キロ離れたら、消える。」

もちろん嘘。

任意でしか消えないよ。

「分かったわ。もちろん、追跡はしないわ。」

「なら、これで。明日、午後四時にまたここで。」

そう言い残して、この場を後にした。

なんか、僕のキャラ、今日、ブレまくってない？

第二十一話 お仕置きなの（後書き）

【INアテネの教えて、神様!!】

「さてさて 今回はまったく出番がなかった、アテネよ」

「どうしたのじゃ？アテネ。」

私は今、クロノのフルボツコが見れて、とても機嫌がいいです

「お父様も、さっきの映像見て奏の性格がなんであんなに変わってるのか、疑問に思ったでしょ」

「あ、ああ、確かにそう思ったの。」

「そうですね そうでしょう だ・か・ら、今回は私が特別に解説してあげます」

「ワシは忙しいのじゃがの。」

「お・と・う・さ・ま」

ニコっとお父様に微笑む。

「・・・分かった、聞こう。」

お父様は話分かるので助かります。

「実はね、あの奏がしてた仮面は私が渡したもののなの」

「なんと、そうじゃったのか。」

「はい」

梨桜がセイバーだった時に渡したの

「まさか・・・アテネ、お主あれに・・・」

「はい、神の魔力を込めました。」

「・・・はあ、そんなことのために魔力を使うでないぞ。」

「だって 面白そうだったんだもん」

「・・・それで、どんな能力を与えたのだ？」

「そ・れ・は」

「私も、お聞きします。」

「あら？梨桜、どうしたの？」

ちなみに、梨桜には私がいつでも、神界にこれるようにしてあげてるの

現状、梨桜はここで、ご飯を食べてるからね

「ご飯を食べに来るついでに、あの仮面について奏が聞いてきてっ
てお願いされました。」

あら

奏、よく気づいたわね

「あの仮面の名前はズバリ、キャラぶれぶれ仮面!」

「「はあ?」

「ふ、ふ、ふ。私が開発した物でね。その人の性格をある程度、変化させるのだから、さっき、奏は偉そうだったの」

「「・・・」

「だって、これまでも、奏は、なのはちゃんやユーノ君に呼び止められても、無視したでしょ?普通、奏なら、必ず立ちどまって挨拶するでしょ」

「あ、確かにそうです。あの時、少し違和感がありました。」

「そうですね、奏の場合、『素直で良い子 偉そうで悪い子』に変化するのよ」

「「・・・しょうもな。」

うう、まさか、お父様と梨桜がハモルなんて。

その後、仮面をつけた、奏が『仮面のせいで、凶暴になっちゃった』とか言って、説教しに来ました。

まさか、三日も説教されることになるとは、私も思わなかったよ
外では三時間しかたってないからってやりすぎ……。
でも、それはまた別の話。

【END】

第二十二話〜お話なの〜

〜次の日の午後三時四十五分〜

僕は、もう、アテネの仮面をつけて、待ち合わせの場所にやって来ている。

ちなみに、アテネがつけた特別な能力は消させた

アテネかなり嫌がったけど、ちゃんと、説得したよ。

僕は、一応、今回のホストだから、ビニールシートとお茶とお母さんに作ってもらった、翠屋特製シュークリームを持って来た。

なんで、シュークリームかというと、食べやすいから。

もちろん、コップは今回のために買った物。

そして、芝生の上でビニールシートをひく。

「これでよしよ。」

用意完璧、これで、後は、皆が来るのを待つだけだね。

そこから、約十分後

「皆、揃ったな。」

ここに呼んだ全ての人が揃った。

今、ここにいるのは、なのはお姉ちゃん、ユーノ、リンディさん、エイミィ、クロノである。

ちなみに、皆には、紅茶とシュークリームを配った。

「誰が敵からもらった物を素直に食べるものか!！」

クロノだけが、反発したけど、他の人が、素直に食べているため、黙った。

「それでは、まず、なぜ、あなた達がジュエルシードを集めるか教えてもらえないかしら?」

「俺は、近所に危険物があつたから、回収してただけだ。」

一応、口調だけは、あのままする。

「嘘だ!!」

クロノだけまた、反論する。

「僕は・・・僕がジュエルシードを発掘したから・・・。」

ユーノまで、クロノを無視する。

リンディさんは苦笑してるし。

「偉いわね。」

「しかし、無謀でもある。」

クロノはめげずに、会話に加わり続ける。

なんか、クロノが可哀そうに思えてきた。

仮面をつけた状態の僕がこういうキャラに追い込んだんだけど・・・。

「分かりました。でも、次元震が発生するような次元干渉事件です。今回の事件は私たちで解決します。」

「君たちは事件を忘れて、家に帰るんだ。」

「「え?」「」

「いきなり、そう言われても、心の整理がつかないでしょう、ですから、今日は一日、家で考えるといいわ。」

うーん、仮面つけてなくても、この言い方はムカつくかな。

これは騎士精神に反しますので、私もむかつきます。

念話で梨桜も同意してくれる。

「その言い方はおかしい。」

「「「「え?」「」「」」

リンディさん以外の全員が驚く。

リンディさんは落ち着いているように見えるけど、ちょっと、唇の端がヒクヒクしてる。

「簡単な話だ。あなたたちがこの事件を解決するなら、なのはたちに考える余地はない。まるで、自主的に協力しろって言っているようなものだ。」

「あ、そっか。」

今日、始めて、エイミィが喋ったね。

「……あなたの言う通りです。私は立場上、あなたに協力してくださって言うことはできないの。騙すようなことを言っただけめんなさいね。」

「あ、いえ。」「僕も、大丈夫です。」

「なら、後で、ちゃんと、お礼をするということので、手伝ってもらえ。」

「そつすることになります。」

「なら、今日はこれでいいな?」

まあ、このまま終わりにはできないだろうけど。

「待ってください。あなたのことについてです。」

「ノーコメントです。」

今、明かすと、後で動きにくくなる。

「なぜですか?」

「色々事情があるんです。たぶん、いつか分かると思います。」

うん、いつになるかは分からないけど、嘘は言ってない。

「そうなら、一番重要なことを聞いわ。あなたは敵？味方？」

「今回は味方だ。」

「それで、あなたは今回のことに協力していただけの事ですか？」

「ああ。それは保障しよう。」

「それなら、連絡先を……。」

「大丈夫。空に向かって俺の名前を叫んでくれれば、ピンチなら、駆けつける。」

「どんな変な奴だよ。」

ホントちよこちよこ、クロノ会話に入ろうとするね。

まあ、原作知ってるから、言えるんだけどね。

ただ、なのはお姉ちゃんがキラキラした目で見てる。

「ヒーローみたい。」

「分かったわ。それでは今日はこれで。」

それで、今日はお開きになった。

その後に、高町家にリンディさんが来て、なのはお姉ちゃんのことについて色々話してみたい。

リンディさんが僕を見て、妙にニコニコしてたけど、正体ばれてないよね。

魔力は、封印してるからランクEくらいのはずだしね。

その後に、僕の所になのはお姉ちゃんが来て、これから、少しの間、家を開けるってことを話してくれた。

「なのはお姉ちゃん。」

僕はできるだけ、優しい声で、

「頑張つて、なのはお姉ちゃんのこと、上手くいくように僕も願つてるよ。」

そう告げた。

「か、奏!!!」

「僕はいつでも、なのはお姉ちゃんの味方だから。」

これは絶対に嘘じゃない。

原作を見て、ファンになったからじゃない。

高町奏としての本心。

優しい、なのはお姉ちゃんが本気で好きだから。

そして、なのはお姉ちゃんは僕に抱きついて爆弾発言をした。

「今日だけ、一緒に寝てもいい？」

な！？

確かに僕たちの年齢と姉弟ってことを考えたら、普通だけど・・・正直、お父さんとお兄ちゃんに殺されます。

そして、僕が迷っている間に。

「なのは！！それは認めん！！男は獣だ！！」

「そつだ！！例え姉弟でも！！そつだ、奏も獣だ！！」

お父さんとお兄ちゃんがやって来た。

しかも、ノックもせずには部屋に入ってきてるし。

「嫌なの！！！！」

その悲痛の叫びが天に届いたのか。

「土郎さん、ちよつとO H A N A S I I しましょうか、自分の息子を獣と言つなんて。」

「恭ちゃんも、O H A N A S I I しようかあ〜。弟を獣って言つなんて。」

お母さんと美由希お姉ちゃんがお父さんとお兄ちゃんをお仕置き部屋に強制連行しました。

「邪魔者は消えたの」

結局、僕となのはお姉ちゃんと一緒に寝ることになった。

。高町家の女の子は、全員最強ということが、今日分かりました・・・。

第二十三話、本当のランクなの？

それから、数日、なのはお姉ちゃんもフェイトも、確実にジュエルシードを集めていった。

ちなみに、今、僕はこの状況に関して、傍観。

なのはお姉ちゃんの魔法のレベルアップが目的。

だって、この後も、きっと、なのはお姉ちゃんは魔法に関わっていきたくて言うと思うから。

お父さんとお兄ちゃんが道場で、『なのは、カムバック!!』って叫んでいたのは、見なかったことにしようと思う。

次に関わるのは、海上かな？

「奏!!」

「どうしたの？ 梨桜？」

突然、梨桜が、声をかけてくる。

それも、かなり焦ってるみたい。

「海上に大きな魔力反応です。たぶん、フェイトが動きました。」

「よし、行くよ。」

「はい。」

「「ユニゾンイン」」

そして、そこが、普通の道だということも忘れて、飛び去った。

ちなみに、これを見た、通行人の人々はアテネが。

「奏は、もう、仕方ないわね。」

っと言って、記憶操作した。

ちなみに、このことで、アテネは三百枚の始末書を書かされるはめになったのは、また別の話し。

く海上く

「行くよ、レイジングハート、風は空に、星は天に、輝く光はこの腕に、不屈の心はこの胸に、レイジングハート、セイアアップ!!」

「stand by ready」

なのはお姉ちゃんと着いたのは同時だった。

「お待たせ。」

「あんたは!?!」「ナイトさん!?!」

アルフとなのはお姉ちゃんが反応してくれる。

「フェイト、無茶したな。」

「え？なんで私の名前を？」

あ、しまった。

後で、なんとしても、言い訳できますよ。

そっか、梨桜。

「よし、四人は下がってる。」

いつの間にか、来ていた、ユーノにも、そう言うておく。

「無茶だ！！」

「大丈夫だ、ユーノ。魔力、リミッター解除。」

了解です。

ちなみに今まで、センサーに引っかからないように、魔力にリミターをかけておいた。

まあ、リミッターつきでも、梨桜とユニゾンしてるからAくらいはあるんだけどね。

「はあああああああ！！」

体から、魔力を放出させる。

制限なしの本気バージョン。

たぶん、推定SSランク。

梨桜、真名を解放する、ジュエルシードを壊さないように、力の制御頼める？

もちろんです。

よし、行くよ。

俺は右手にエクスカリバーを創りだす。

「 真名解放 」

僕の声が海上に響く。

そして、僕の右手には、黄金に輝く剣が見えるようになる。

「 「 綺麗。 」 」

なのはお姉ちゃんとフェイトが同時に言ってくれる。

なんか僕が褒められたみたいで嬉しい。

「 エクス（約束された） 」

カリバー（勝利の剣） 「 」

海上は光に包まれていった。

【インリンデイ】

なのはさんとユーノさんが命令を無視してあの子の元に行ってしまった。
った。

やはり、まだ子供のあの二人には私たちのしようとしたことが、残酷に思えたのでしょうか。

でも、まさか、あの素直な子供たちが命令を無視するなんて、ちょっと意外でした。

「クロノ、何かあった時にいつでも、出れるようにしておいてね。」

「はい、艦長。」

最悪の場合、私が出ればいいかしら。

「か、艦長、海上に急接近する、熱源が……たぶん、ナイトくんです。目標と接触するまでの時間は……なのはちゃんが接触する時間と同じです。」

エイミイが少し焦った様子で教えてくれる。

「……なのはさんが行かなくても、ナイトさんが助けていたのね。」

「……はい。そう思います。」

「なら、なのはさんのことは不問にしましょうか。」

結果が同じなら。

それでもいいわ。

「か、艦長、それでは他の隊員に示しがつきません。」

クロノが抗議してくる。

はあ、どこで育て方を間違えたのかしら。

「クロノ、なのはさんは民間協力者よ、私たちに必ず従わなければならぬ理由はないわ。それに九歳の女の子に罰を与えたい、隊員がこのアースラにいますか？」

そんな隊員いないはず。

・・・もし、いたら、私が、なのはちゃんの、O H A N A S
I方式で更生させてあげましょう。

「・・・しかし。」

「もちろん、私が次はないと、釘をさすわ。それでいいでしょ？」

「艦長がそう言うのなら、反論はしません。」

本当に硬い子に育ってしまったわね。

もう少し、融通のきく子に育って欲しかったんだけど。

「か、艦長、ナイトくんの魔力値が!？」

「どうしたの?」

「どんどん、上がってます。」

「どれくらいなの?」

「AA、AAA、AAA、S、推定ランクSSです。」

「SSだと!??」

クロノが驚くのも無理ありません。

「……SS。」

管理局でSSと言えば、エース中のエース。

エースオブエースと呼ばれる存在になっても、おかしくない。

どこに行ってもエースになれる。

たぶん、今の管理局の中でSSは十人くらいしかいない。

なぜ、そんな人が、管理外世界のこんな小さな事件に関わっているのかしら？

彼は管理局と関係ないと言っていたけど……。

「なんて奴だ。」

「あの子の周りの魔力値増大、きっと、あの子の最大クラスの一撃が放たれます。」

「エイミイ、映像を記録しろ。」

「うん、クロノくん、もう撮影してるよ。」

……この事件どつなるのかしら？

【END】

「……すごい。」「あいつ、ホントに人間かい？」

「さすがすぎるよ、ナイト。」「す、すごいの。」「

四人はそれぞれ、違った、方法で僕を褒める。

まあ、一気にジュエルシードの暴走を止めたんだから、当たり前か。

でもさ、前に梨桜が今の俺はStrikerSの時のフェイトと同じくらいって言ってたから、StrikerSなのはお姉ちゃんとフェイトも大概チートだよな。

「さあ、早くジュエルシードを封印しろ。」

「は、はい。」「わ、分かりました。」

さすがに、そこまでは、やらないよ

次のプレシアさんの攻撃に備えるためにも。

一応、相手はSランクの魔導師。

警戒するにこしたことはない。

「ジュエルシード、封印」「

二人が力を合わせて、ジュエルシードを封印する。

なんか、この光景はいいよね。

さてと、そろそろか。

梨桜、準備は？

今なら、どんな攻撃魔法防げます。

そう念話を交わした。

そうだ！！

なのはお姉ちゃんがここであのセリフを言うんだ。

「なのは、何かフェイトの言いたいことあるんだろ？」

「え、あ、はい。・・・あのね、フェイトちゃん、悲しい気持ちも、寂しい気持ち、半分子にできるからね、私、フェイトちゃんと友達になりたいんだ。」

「・・・え？」

その時だった。

確かに空間が揺らいだ。

奏、来ました!!

了解!!

「プロテクト!!」

超広範囲のバリアを張る。

これなら、なのはお姉ちゃん、フェイト、ユーノ、アルフを同時に守れる。

「ドゴーン。」

「クツ。」

でも、思ったよりもキツイ。

どんだけの魔力を込めたのかな？

それでも、奏には楽勝ですよ、私もついていきますし。

・・・でも、しんどいよ。

・・・
・・・
・・・
ふっ、やっと止まった。

「フェイト、ジュエルシードを回収するよ。」

「う、うん。」

しかし、周りを見渡しても、ジュエルシードがない。

・・・雷撃の途中でクロノ来てたからな。

クロノってホントにKYだな。

「いったん、退くよ、アルフ。」

「・・・分かった。」

「逃がすか!?!」

ホントにKYだよな。

「クロノ、ちょっと待って。」

「クツ、また君か。」

僕が、一瞬クロノを引きつけた、おかげで、フェイトとアルフは無事脱出した。

「なぜ、君は、彼女たちを助ける!?!」

「真実を知っているから。」

原作見たからだけど。

「な!?!」

あ、クロノどころか、なのはお姉ちゃんとユーノも驚いてる。

「なら、話してくれ!!それでこの事件は解決する!!」

・・・どうしたものかな？

梨桜、どう思う？

私は言わない方がいいと思います。アテネと無印に関しては、原作ブレイクをしないと決めたくないですか。

・・・そうだよね。

「・・・正直に言っと、自分たちで調べて欲しい。本来なら、他人の口から話すのは、ダメな内容だ。」

「なぜだ!?!もう、これだけのことをしている時点で、彼女は犯罪者だ!?!」

「・・・取り消せ。」

「え?」

僕は一気にクロノとの距離を縮めて、抜き身のエクスカリバーを突きつける。

「今の言葉は、管理局が言っているいい言葉じゃない。」

・・・実は、アテナから聞いたのだけど、プレシアさんが、アリシアさんを失った事故は実は管理局が関係している。

プレシアさんの研究で得られるエネルギーがもっと、早く欲しいから、無能な本局の研究員を派遣した。

それで、試験が不十分だったにも関わらず、実験を最終段階まで進めた。

それで、結果は・・・完全に失敗。

そして、その失敗を、プレシアさんになすりつけた。

さらに、プロジェクトFに関しても、最高評議会が裏で手をまわしていたらしい。

「・・・君は何を知っているんだ？」

「取り消すのか？取り消さないのか？質問に答えろ？」

取り消さないなら・・・。

「分かった、何も知らないのに、すまない。不謹慎なことを言った。」

「それでいい。自分たちで調べる。後、俺の戦闘記録は消させてもらった、すまない。」

「え？」

今は、僕の能力を解析させるわけにはいかないから。

ちなみにどうやったかというと、忘れてると思うけど、僕のもう一つの希少能力のマスター・オブ・プログラムを使ったよ

やっと、この能力の出番が来た

そして、僕は、この場から飛び去った。

後日、クロノはプレシアさんの事件の表層だけ知り。

さらに、アルフがアリサに保護され、この事件が本格的に終わりを告げようとしていた。

第二十四話〜決闘なの〜

そして、ついに、あの日がやって来た。

なのはお姉ちゃんとフェイトの決闘の日。

僕は、梨桜とユニゾンして、アースラに向かうために、転移魔法の準備をしていた。

「梨桜、僕、転移魔法を使うのは初めてだけど、大丈夫かな？」

「はい、奏なら、大丈夫です。それに、私はアテネの所に行くために何回も転移魔法を使ったことがありますので、サポートは完璧です。」

「ありがとう。」

ん？

考えてみたら、それって、梨桜が転移魔法を使えばいいんじゃない？

「ほら、転移魔法を始めますよ。」

「あ、うん。」

僕は、アテネからもらった、仮面をつけて、

「ユニゾンイン!!!」

梨桜とユニゾンし転移魔法を発動させる。

「座標指定、目標、次元航行艦アースラ。」

僕の足元の魔法陣が展開する。

・・・そういえば、僕の魔法陣って何式なんだろう？

「転移開始。」

そして、僕は、アースラのブリッジに転移した。

くアースラ・ブリッジく

「「「「え？」」」」」

そこにいた全員が驚く。

まあ、当然か。

僕が突然、転移して来たから。

「な、ナイト、貴様！！どうやってここに転移して来た！！」

クロノが血相を変えて、僕に近寄って来る。

ただ、血相を変えているのはクロノだけで、他の局員は僕の転移に一瞬は驚いたものの、すぐに自分の作業に戻ってしまう。

「リンディさん。」

「はい？なに？」

「プレシアさんの所に俺も武装局員と一緒に行っていいですか？」

「そ、そんなこといいわけないだろう！！」

クロノってホントに僕のすること全部に文句言っちゃうね。

「いいわよ。」

「か、母さん！？」

艦長じゃなくなったし。

「だって、クロノ、彼はSSランクよ。一緒に行ってくれるにこしたことはないじゃない。」

「。っ。」

クロノは言い返せないようだ。

まあ、正論だからね。

「ねえ、ナイトくん!!」

エイミィが話しかけてくる。

「なに?」

「あのね、この前、アースラにある、自分が映った映像消したでしょ? どうやったの?」

「俺の希少能力で管理局のコンピュータにハッキングした。」

「犯罪だ!!」

クロノが突っかかって来るが。

しかし、エイミィは

「すごい！！」

瞳をキラキラさせて、僕によって来る。

「エイミィ！！」

クロノが怒るも。

「だって、クロノくん！！管理局のデータって観覧するのにも制限がかかってて思うように調べられないんだよ！！それがハッキングできたら、情報得放題じゃない！！」

「し、しかし……。」

エイミィが僕を褒め、クロノが釈然としない、アースラが、なんとも気まずい空気の中、なのはお姉ちゃんとフェイトの決闘が幕を開けた。

【INなのは】

「フェイトちゃん、お互いのジュエルシード、全部を掛けて、決闘しよう!!」

フェイトちゃんに私の気持ちを伝えるために、私はフェイトちゃんに勝つ!!

「Photon Lancer」

フェイトちゃんの周りに、魔力弾が形成される。

「Divine Shooter」

私も自分の周りに魔力弾を形成する。

「ファイヤ!!」「シュート!!」

それが、私とフェイトちゃんの決闘の幕開けだった。

私は、フェイトちゃんが、放った、魔力弾を避けつつ、次の魔力弾を形成する。

フェイトちゃんは私の魔力弾を避けるのに必死で私の姿を見失ったみたい。

「シュート!!」

次弾をフェイトちゃんに向かって放つ。

「Scythe Form」

フェイトちゃんは、バルディッシュを鎌に変形させて、私の魔力弾を斬り裂いて、私に急接近する。

「!?!」

私は咄嗟に手を前に突き出して、

「Round Shield」

障壁を張った。

私の障壁にフェイトちゃんのバルディッシュが当たった瞬間に、私は始めに放った、魔力弾をコントロールして、フェイトちゃんの背後を狙う。

しかし、フェイトちゃんはその魔力弾を障壁を張って防ぐ。

その間に私はフェイトちゃんの頭上に移動する。

「Flash Move」

「セエエエエエエエ!!!」

そして、フェイトちゃんに急接近して、レイジングハートで殴りかかる。

「クッ。」

私にレイジングハートをフェイトちゃんはバルディッシュで受け止める。

その瞬間、私とフェイトちゃんの間で光が起きる。

その光のせいで、私はフェイトちゃんを見失ってしまう。

「Scythe Slash」

「ハアア!!」

フェイトちゃんの斬撃が私のバリアジャケットを少し斬り裂く。

「クッ。」

さらに、私が避けたところには。

「fire」

魔力弾が設置されていた。

「あっ!!」

私は、簡易障壁を張って、防ぐも、かなりダメージを受けてしまった。

「はあ、はあ、はあ、はあ。」

そして、フェイトちゃんの足元に巨大な魔法陣が形成される。

そして、私の周りには、いくつもの魔法陣が形成されては、消えていく。

これじゃあ、どこから、攻撃が来るか分からない。

「Phalanx Shift」

その音声で、私はフェイトちゃんがいる所に気づく。

フェイトちゃんの周りにこれまでとは比較にならないほど、多くの魔力弾が形成される。

反撃しなきゃ、そう思った瞬間。

「きゃっ!?!」

「ライトニングバインド。」

私の両手がバインドで拘束される。

まずい、フェイトは本気だ。

アルフさんが念話で話しかけてくれる。

なのは、今、サポートを!!

「ダメ!!」

二人の言葉に私は思わず叫んでしまった。

「アルフさんも、ユーノ君も手を出さないで、これは私とフェイトちゃんの全力全開の決闘だから。」

でも、それにアルフさんが。

でも、フェイトのそれはホントにヤバイんだって!!

そう言ってくれる。

でも、

大丈夫!!

フェイトちゃんは私が念話している間に何か呟いている。

たぶん、儀式魔法。

「撃ち碎け!!ファイヤ!!」

そして、私に向かって、魔力弾を放つ。

「なのは!?!」

「フェイト!!」

それを私はギリギリ、障壁が、間に合ったため、持ちこたえることができた。

「撃ち終わると、バインドっていうのも、解けちゃうんだね、今度は。」

「Divine」

「私の番だよ!!」

「Buster」

「うわあ!!」

フェイトちゃんが残りの魔力弾を私に放って来る。

でも、私のデイバインバスターがそれを消し去る。

そして、私のディバインバスターはフェイトちゃんの障壁に直撃する。

私は、フェイトちゃんの頭上に移動する。

私の思いを、全力全開の思いを伝えるために！！

「受けてみて、ディバインバスターのバリエーション！！」

そして、私の足元に魔法陣が形成される。

「St arllight Breaker」

レイジングハートに周りの魔力が集まる。

「クツ、え？バインド！？」

今度は、私がフェイトちゃんにバインドをかける。

「これが私の全力全開！！」

スターライト

ブレイカー
「

私の思いが、フェイトちゃんを貫く。

私のスターライトブレイカーを受けたフェイトちゃんは海に落ちてしまう。

「フェイトちゃん!!」

私はフェイトちゃんを海に戻って、助けだす。

そうそう、さっき、魔王って思った人、後で、
O H A N A S
Iなの

「フェイトちゃん、私の勝ちだよね。」

「そうみたいだね。」

「put off」

フェイトちゃんのジュエルシードがバルディッシュ中から、現れる。

「飛べる？」

「・・・うん。」

そう聞いて、フェイトちゃんが離れた瞬間だった。

「ゾーン！...」

フェイトちゃんに雷撃の雨が降り注ぎ、フェイトちゃんが持っていたジュエルシードが空の雲の中に消えて行った。

【END】

第二十五話〜開戦なの〜

モニターでフェイトがなのはお姉ちゃんのスターライトブレイカーを受けて、倒れてしまった。

「なんていう、魔力だ。」

「フェイトちゃん、生きてるかな？」

クロノ、エイミィ、人の姉をなんだと・・・正直、僕も怖かった。

あれの直撃なんて受けたら、僕でもただじゃ済まない。

・・・お姉ちゃんは怒らせないようにしよう。

そして、フェイトに向かって、雷撃が空から、放たれた。

「ビンゴー!!尻尾を掴んだよ!!」

「よし、不用意な次元干渉魔法は、命とりだ!!」

「艦長!!今、座標、送ります!!」

「分かったわ、武装局員とナイトさん、お願い!!」

「『『『『『了解。』』』』』」

そして、俺と、数人の武装局員が転送された。

たぶん、今頃、フェイトがリンディさんと会っているところかな？

そして、簡単に玉座まで、辿り着いた。

「プレシア・テッサロツサ、時空管理法違反、時空管理局戦艦の攻撃容疑で、あなたを逮捕します。」

「速やかに、武装の解除を。」

武装局員がそう言う。

そして、武装局員があ部屋に踏み込む。

たぶん、アースラでフェイトがこの映像を見ているはず。

「いけない!!その部屋は!!」

僕はそう叫ぶ。

しかし、もう遅かった。

「こ、これは!?!」

そこには、一人の女の子がポットの中で眠っていた。

「うわああ!!」

武装局員がプレシアさんの魔法で吹き飛ばされる。

「危ない!!」

僕は咄嗟に武装局員、全員をアースラに転送した。

そして、僕の周りに障壁を張った。

「チツ、邪魔をしたな。でも、もう、ダメね、時間がない。たった九個のロストログアではアルハザードに辿りつけるか分からないけど」

「その先を言うな!!」

僕は、咄嗟に叫んでいた。

「あら？あなた、あの人形のことを知っていたの？」

「言うな。」

「ホントに、あのできそこないの人形はせっかく、アリシアの記憶をあげたのに、ぜんぜんアリシアとは違う。」

こんなことを言っても、この人たちを救ってあげたい。

「The world always make mistake .
(世界はいつも、間違っ)」

それは、歳老いた、老人の声のように、

「But I always choose .」しかし、私は選ぶ

大人の男性の声で。

「Because I expect . . . (なぜなら、わたしは期待する)」

大人の女性のような声で。

「So I want the world . . . (だから、私は世界を望む)」

全ての声が合わさったような声で。

最後の一言を言おうとした瞬間に後頭部に激痛がはしった。

【INアテネ】

あの力にはリミターを掛けてあるから、奏は自力であの力を使うことはできないはず、でも、万が一のことを考えて、奏の様子を窺っていた。

そして、今、私の願いは最悪の形で碎け散った。

奏が死ぬ。

私は、そう思った瞬間に、転移魔法を展開していた。

そして、一瞬で、奏の傍に駆け寄り、奏の後頭部を殴って気絶させた。

「間に合った。」

私は、神である、立場も忘れて、溜息を吐いた。

「あら、また変なのが現れたわね。」

プレシアが私に対して、何か言ってきた。

「私が認めた人間以外は私に話しかけるな。」

殺気を込めて言い放つ。

「な、礼儀知らずな女ね、人の庭に無断で入って来たくせに。」

「黙れ、今、私は機嫌が悪い。」

「ふん、まあいいわ、死になさい。」

そう言って、プレシアは私に雷撃を放つ。

無駄なことを。

私はそれを、ピクリとも動かずに、障壁を張って防ぐ。

私の障壁を破れるものは現世にせいぜい、五人いるかないかくらいのはずだ。

障壁を張ってしまえば、もう、プレシアにはどうすることもできない。

「ゲホ。」

魔法を使ったせいで、プレシアは、せき込んでしまう。

私が介入したせいで、プレシアの死期が早まってしまったかな？

まあ、奏が無事なら、いいか。

そして、私は、奏を連れて、神界に転移する。

【END】

【インリンデイ】

母親の逮捕されるころなど、見たくないだろうと思ひ。

私がフェイトさんをブリッジから出て行くように言う前に、武装局員が玉座に辿りついた。

そして、玉座には、プレシアの他に驚くべき人物がいた。

・・・アリシアさん。

エイミーから、報告は受けていたけど、まさか、本当に蘇生実験を・

・・・。

そして、さらに驚くべきことに、アリシアさんのこともナイトさんは知っていたようだ。

そして、プレシアさんの言うことを止めようとしていると、彼の様子が変わった。

「艦長！！ナイトくんから、とんでもない量の魔力が・・・推定ラック・・・え？」

エイミイが言葉を呑んだ。

「どっしたの？」

「は、はい。・・・計測魔力値・・・SSS以上です。正確には計測できません。」

「なんだと!？」

それにクロノも驚く。

管理局ではSSオーバーを超える魔導師には、SSSランクがつけられる。

すなわち、計測不能の魔力を持っていても、SSS。

SSオーバーをギリギリ超えても、SSSランク。

前者と後者では話が違つ。

それも、今回は前者だなんて……。

ナイトさん、あなたはいつたい……。

さらに、見てみると、今度は黒色の髪を持った、女の人が転移して来た。

そして、ナイトさんの後頭部を殴って、気絶させた。

どうなってるの？

敵？

「艦長……あの人の魔力が異常です。」

今更、異常って言われても……。

「どう異常なの？」

「SSSランクなんですけど……計測不能を通りこして……エラーが出るんです！！もしかしたら、何か特別な魔力を持っているのかも……。」

「え？」

「異常なんです！！」

「なんてことだ。」

管理局、始って以来の魔力値測定エラー！

まさか、そんな人がいるなんて……。

さららに、プレシアさんに攻撃を防いで、どこかに転移していつてしまった。

ナイトさんを連れて。

「ん！？箱庭から魔力多数出現！！これは！？Aランクが二十・・・三十・・・さらに増大、艦長！！」

まさか、プレシアさんがここまで、戦力を持っていたなんて・・・。

「全乗組員、第一種警戒態勢を発令！！武装局員は今すぐ、また、出動できるように準備して！！」

「「「「はい！！」「「「「」

・・・この事件、私も前線に出ましよう。

【END】

第二十六話〜決意のジュエルシードなの〜

【INフェイト】

「ホントに、あのできそこないの人形はせつかく、アリシアの記憶をあげたのに、ぜんぜんアリシアとは違う。」

え？

母さん、何を言っているの？

「ふん、フェイト、聞いてるんでしょ？あなたのことよ、フェイト。それにね、良いことを教えてあげるわ。フェイト、私はね、あなたのことがずっと嫌いだったのよ。」

瞬間、私の中の何かが、砕け散った。

「フェイト!!!」「フェイトちゃん!?!」

アルフとあの真っ白な女の子が私の名前を呼んでくれる。

でも、私は、倒れてしまう。

私の意識は闇に吞まれていってしまふ。

母さんは、最後まで微笑んでくれなかった。

私が生きていたいと思ったのは、母さんに認めてもらいたかったからだ。

どんなにたりないと言われても、どんなに酷いことをされても、私は母さんに笑って欲しかったからだ。

あんなにはつきり捨てられた今でも、私は母さんにしがみついている。

アルフ、ずっと傍にいてくれたアルフ、言うことを聞かない、私に何度も嫌気がさしただろう。

真っ白な女の子、何度も私と戦って、始めて、私と対等に向き合ってくれた、何度も名前を呼んでくれた。

生きていたいのには母さんに認めてもらいたかったからだ。

母さんに認めてもらうために生きていた。

私はそれ以外に生きる意味はないと思っていた。

「でも、違ったでしょ？」

誰？

私は心の中に語りかけてくる声を聞いた。

「君の生きる意味は他にもあつたでしょ？」

私の心の中に、男の子が現れる。

この子は私にジュエルシードをくれた子だ。

私に優しくしてくれた男の子。

でも、なんで？

「君が僕に、もう一度、会いたいと思ったからだよ。」

私が？

「うん。」

思っ
てないよ？

「うんうん、思ってる、だから、僕があげたジュエルシードを君のお母さんに渡さなかったんだ。」

ジュエルシード？

「そう、まだ、君がポケットの中に持っているジュエルシード。」

あ、そうだ。

なんでか、私はこの男の子からもらったジュエルシードを誰にも言わずにずっと持っていた。

あの決闘の時もこれだけは、別に持っていた。

「だから、僕は、君の心の中にいれる。もちろん、本物の僕ではなく、君が望んだ僕、すなわち、もう一人の君だけだね。」

もう一人の私？

「うん、もう一人の君。母さんに笑ってもらえないなら、死ねばいいって思っていない君。本当はもう、気づいてるんじゃない？」

すると、私の頬に滴が流れる。

あれ？

どンドン出てきて止まらない。

「それは涙だよ。」

涙？

「うん、でも、涙を流すのには、少し早いかな？」

なんで？

「まだ、全て終わってないから。」

・・・うん、本当は分かったのかも。

もう、逃げてるだけじゃダメなんだ。

「うん、そうだよ、行っておいで、フェイト。きっと本物の僕がなんとかしてくれるから。」

【END】

【INなのは】

私は今、ユーノくん、クロノくんと共に、庭園に来ていました。

「なのは！！僕はプレシアの所なのは、君たちは、最上階にある、起動炉の破壊を。」

「クロノくんは？」

「僕はプレシアの所に向かう。それが僕の仕事だから。」

「クロノくん、気をつけてね。」

そう言い残して、私は最上階を目指した。

「なのは!?!」

「え!?!」

最上階へ向かうための螺旋階段には、あの騎士みたいなのが、いっぱいいた。

「なのは、ユーノ、助太刀するよ!?!」

「アルフさん!?!」

「ああ、私もこのまま終わるのは嫌なんでね!?!」

三人で協力して敵を倒していく。

しかし、

「クッ、やっぱり、数が多い。」

ユーノ君がバインドで騎士みたいなのを縛って、くれているから、私は狙いやすいけど、ユーノ君がバインドで縛れなかった騎士みたいなのが、私の方に、どンドン、押し寄せて来る。

今は、アルフさんのおかげでなんとか、耐えれてるけど、正直、時間の問題だと思っの。

私たちは先を急がないといけないのに。

「なのは！！」

声のする方を見ると、ユーノ君のバインドを破った、騎士みたいなのが、私を剣で斬ろうとしてる。

斬られる、そう思った瞬間だった。

「Thunder Rage」

「サンダーレイジ！！」

騎士みたいなのに雷が走ったの。

「フェイト？」

アルフさんがこの場には、いない子の名前を呼ぶ。

助けに来てくれたんだ。

「ドン！！」

壁を突き破り、大きな騎士みたいなのが、螺旋階段に現れたの。

「大型だ、バリアが堅い、でも、君と私二人なら、倒せる。」

「うん、うん、うん。」

フェイトちゃんが私と二人でって言うてくれた。

本当にうれしいの。

「サンダーバスター！！」「デイベインバスター！！」

「「せーの。」」

騎士みたいなのが消え去る。

私たちは二人揃えば、無敵なの！！

その君、魔王、死神って思ったら、後でO S I O K Iなの

「フェイト、フェイト、フェイト！！」

アルフさんが、フェイトちゃんに抱きつく。

「大丈夫、アルフ、ちゃんと自分で決着をつけて、また、始めるよ。」

・・・フェイトちゃん。

「だから、行こう。」

「「「うん!!」」」

そして、私たちは、起動炉へ、フェイトちゃんたちはプレシアさんの所に向かうのだった。

起動炉に着いた私たちを、待っていたのは、今までとは比べものにならない多さの騎士みたいなのだった。

「なのは、僕が、防御するから、なのはは、封印に専念して。」

いつもそうだ。

「うん。ユ一ノくん、いつも私と一緒にいて、守ってくれた。」

「Sealing Mode」

「だから、戦えるんだよ、いつも、背中が暖かいから。」

信頼できる『友達』!!

「全力全開、ディバインシューター!!」

【END】

【インリンディ】

私も、今、前線に出ている、ナイト君を連れ去った、女の人のことがある以上、クロノとなのはさん達だけ、前線に出すのは危険すぎる。

いざとなれば、私が彼女達の楯になろう。

彼女達が、逃げる時間は、稼げるはずだ。

しかし、今、あの女の人が、現れる様子はない。

だから、私は今、プレシアさんが、起こそうとしている次元震の発動を抑えている。

そして、モニター越しにプレシアさんと話をする。

「プレシア・テッサロツサ、次元震は私が抑えています。起動炉はまもなく封印されます。あなたのもとには時期に執務官が到着します。アルハーザード、それは存在するかも分からない、ただの伝説です。おとなしく逮捕されてください。」

私は、彼女に私の思いを言葉にして伝える。

「違うわ、アルハーザードは存在するわ。アルハーザードへの道は次元の狭間にある。時間と空間が砕けた時にその道は姿を現す。」

なんてことなの、彼女は本気でアルハーザードへ……。

「ずいぶんと部の悪いかけね？あなたはそこで、いったい何をするの？おかした過ちを取り戻すの？」

そんなことは……。

「そうよ、私は取り戻す、アリシアと過去と未来を。」

できない。

そんなことは人間には。

「こんなはずじゃなかった世界の全てを！！」

「ドゴーン。」

プレシアのもとで爆発が起きる。

そして、その爆発の中から、私の息子が現れる。

「世界はいつだって、こんなはずじゃなかったことばかりだ。昔から、そうだ。いつだって、誰だって、そうなんだ！！」

・・・クロノ。

そこに、フェイトさん、アルフさんも合流する。

「それから、逃げるか、立ち向かうかは、個人の自由だ。自分の勝手な悲しみに他人を巻き込んでいいはずがない。」

言うようになったわね、クロノ。

「ゲホ。」

そうこうしている内の、プレシアがせき込んでしまった。

・・・まさか病気？

「母さん!？」

フェイトさんが駆け寄りうつとする。

・・・あなたって子は。

「何をしに来たの？」

その言葉を聞いて、フェイトさんは立ち止る。

「消えなさい、もう、あなたに用はないの。」

酷い、いくらなんでも、酷すぎるわ。

娘に言う言葉じゃない。

「あなたに言いたいことがあつてきました。私は……私は……アリシア・テッサロッサではありません。あなたが、作ったただの人形なのかもしれません……私、フェイト・テッサロッサはあなたに生み出してもらつて、育ててもらつた、あなたの娘です。」

そう告げるフェイトさんの瞳はとても綺麗でした。

「ふ、ふ、ふ、あははははは、だから、何？あなたを娘と思えと？」

「あなたが、望むなら、私は、あなたを世界中の誰からも、あなたを守る。私が、あなたの娘だからじゃない。あなたが私の母さんだから。」

そう言って、フェイトさんは手を伸ばす。

プレシアの元へ。

「くだらないわ。」

そう言って、プレシアは足元に魔法陣を展開する。

・・・プレシア、あなたって人は。

「ああ。」

私は、庭園の崩壊の震動のため、その場に倒れ込んでしまう。

しまった、これでは、魔法が解けてしまう。

だめです、艦長、庭園が崩れます。戻ってください。この規模の崩壊なら、次元断層は起きませんから。クロノ君たちも脱出して、もう時間がないの。

ここまでだというの？

「了解した。フェイトー!!」

クロノも脱出しようとする。

「私は向かうアルハザードへ、そして全てを取り戻す。過去も未来もたった一つの幸福も。」

そして、プレシアの足元が碎ける。

・・・もう、時間がないのね。

彼女を助けたいけど、この距離ではもう間に合わない。

「母さん!!」

フェイトさんが落ちたプレシアさんの所に行こうとする。

「フェイト!!」

しかし、アルフさんに止められる。

良かった。

彼女まで、死ぬことはない。

「一緒に行きましょう、アリシア……………」

……………

……………」

何か言っているみたいだけど、もう聞き取れない。

皆、早く脱出して、本当に時間がないの……!

そして、私たちにとっては最悪の形での帰還を無事はたした。

【END】

第二十六話〜決意のジュエルシードなの〜（後書き）

奏が、フェイトにあげたジュエルシードの伏線が、やっと回収できました。

今回で無印完結まで、後、少しになります。

これからも、頑張りますので、よろしくお願いします。

第二十七話　名前を呼んでなの……

【INなのは】

次元震の余波が収まるまでは私たちは、アースラに滞在した。

ちなみに、私たちは、今回の事件のことについて表彰されるといってお話になりました。

私は結局、フェイトちゃんに何もしてあげられなかったから、そんなものもらえないと受け取り拒否したのだけど、ユーノ君は、素直に受け取っていた。

私は少しユーノ君の常識を疑ったのは、また別の話し。

それと、フェイトちゃんのことなんだけど、クロノ君が言うには、大丈夫らしい。

それと、ユーノ君がまた私の家に来ることになりました。

それに、後、数日で、家に帰れるんだって

やっと、奏に会えるの

そして、私とユーノ君が帰る日になったの。

「ありがとうございます。リンディさん、エイミイさん、クロノくん。」

「また、いつでも来てね、後、ユーノ君、帰りたくなったら、連絡してね、アースラの転送ポート使わせてあげるから」

「ありがとうございます。」

「なのは、ありがとう、協力感謝する。」

そして、クロノ君は握手を求めてくるの。

「クロノくん、堅い。そんなんじゃないぞ、女の子にモテないぞ」

「エ、エイミー!？」

にやはは、クロノ君、顔が真っ赤だよ。

そんなんだから、エイミーさんに、いつも、からかわれるんだよ。

「と、取りあえず、ありがとう／＼」

「「ちらこそ、ありがとう。」

そして、私はいつもの日常に戻っていった。

ちなみに、奏は、友達の家泊まりに行くとのこと、ここ数日、家にいないんだって。

むう、一緒にお話ししたり、一緒に学校行ったり、一緒にお風呂入ったり、一緒に寝たりしたかったのに!!

それを言った時、お母さんは笑ってて、お姉ちゃんはニヤニヤして、お父さんとお兄ちゃん目は目がおかしかったので、私がO H A N A S Iした後に、お母さんとお姉ちゃんがO S I O K Iしたの！！

当然なの

そして、次の日、クロノ君とエイミィさんから、嬉しいお知らせが届いたの！！

「え！？そうなの！？」

うん、フェイトは、ほぼ無罪確定だ。

「やったー！！」

本当にうれしいの、私は自分のことのように喜んで、ユーノ君を抱きしめた。

「う、くるちい、なによ……。」

なんかユーノ君が、白目になっているけど、無視なの。

それでね、なのはちゃん、裁判に向かう前に少しだけなんだけど、フェイトちゃんと話せるよ!!

「本当ですか!?!」

ああ、エイミイが適当なのはいつものことだが、今回は事実だ。

「ありがとう。」

本当にフェイトちゃんに会えるんだ。

ちょっと、クロノ君、私が適当ってどういふこと!?!

あ、それは……。

後で、O H A N A S I I ようね

・・・はい。

なんかクロノ君が可哀そうなの。

「・・・なのはが言っちゃいけ、グホッ。」

フェレットもどきが死にました。

取りあえず、今からあの公園に来てくれ。

「うん!!--」

そう言って、急いで、私は着替えて、フェイトちゃんのもとに向かった。

〈公園〉

「フェイトちゃん!」

私は、フェイトちゃんの元に駆け寄った。

「時間はあまりないが、少し話すといい。僕たちは、向こうに行っているから。」

そう言って、クロノ君たちは、行ってしまった。

海の波の音がまるで、私たちの再会を祝福してくれるように、綺麗な音を奏でてくれる。

「なんだか、フェイトちゃんに話したいこと、いっぱいあったのに、フェイトちゃんに会ったら忘れちゃった。」

ホントにあったんだけどな。

「そうだね、私もいっぱいあったのに。」

「やはは、フエイトちゃんも一緒か。」

「なんか嬉しいな」

「嬉しかった。」

「え？」

「真っ直ぐぶつかってくれて。」

「うん、友達になれたら、いいなと思って、私、全力でぶつかったよ。」

「でも、せっかく、そう言ってもらえても、私はもう行かないといけない。」

「戻ってこれるんだよね。」

「もっと、一緒にいたいよ。」

「いつかは・・・でも、やっと、ホントの自分を始められるから。」

・・・そっか。

「来てもらったのは、返事をするため、君が言ってくれた友達にならいたって言葉の返事。」

「うん、うん、うん。」

覚えてくれていたんだ。

「だけど、私、どうしてもいいか分からない。今まで家族はいても、友達はいなかったから・・・。」

「そんなの簡単だよ。」

「え？」

「あのね、名前を呼んで。」

「名前？」

「うん、名前、私、高町なのは、なのはだよ。」

「・・・なのは。」

「うん。」

「なのは。」

「うん。」

「なのは！..！」

「うん！..！」

私たちを包み込むように、風が吹きぬける。

「ありがとう、なのは。」

「うん！！」

「なのは。」

「うん。」

私の瞳から、涙が流れ落ちる。

「なのは、分かったよ。友達が泣いてると、自分も同じように悲しいんだ。」

「フェイトちゃん！！」

私はフェイトちゃんに抱きつく。

「なのは、今は離れてしまっけど、いつかは戻って来る絶対だ、どんなことをしてでも・・・その時も君の名前を呼んでもいい？」

「うん。」

そんなの当たりまえだよ。

「会いたくなったら、君の名前を呼ぶよ。」

「うん。」

「だから、なのはも私の名前を呼んで、なのはに困ったことがあったら、今度は私が助けに行くから。」

「うん。」

「時間だ、そろそろいいか？」

グス、クロノ君、ホントKYなの。

「うん。」

「フェイトちゃん!!」

このKYを瀕死にして、二人でもっと話そうよ!!

・・・けど、フェイトちゃんが決めたなら。

私は、髪を結んでいた、リボンをほどいて、

「思い出にできるのこんなしかないんだけど。」

フェイトちゃんに渡す。

「じゃあ、私も。」

そう言って、フェイトちゃんも結んでいたリボンを私に渡してくれる。

「ほい。」

アルフさんが、ユーノ君を肩においてくれる。

「ありがとう、アルフさんも元気だね。」

「ああ、色々ありがとね、なのはとユーノ。」

「じゃあ、僕も。」

「クロノ君もまたね。」

そして、三人の足元に魔法陣が展開される。

ばいばい、またね、クロノ君、アルフさん、フェイトちゃん。

フェイトちゃんが私に、手を振ってくれる。

私はそれに、力限り、答える。

その日から、私の髪を結ぶリボンは黒色。

フェイトちゃんのリボンはピンク色になりました。

けど、私は知らなかった。

このやりとりを見ている人たちがいることを。

「本当に、会わなくていいんですか？ 僕の方なら、なんとかできま
すよ。」

「ええ、ありがとう。でも、私には、まだ、あの子に会う資格はな
いわ。」

「まだ、そんなことを言ってるんですか！？ フェイトがあなたが次
元の狭間に落ちる前になんて言ってたか忘れたんですか！？」

「……でも、今は。私は罪をきちんと償ってから、その後、あ

の子にしたことに対する償いをするわ。私の罪を償うまではあの子には会わない。」

「分かりました。」

【END】

第二十八話〜創造者〜（前書き）

すみません。

朝から腹痛が酷くて、投稿する余裕がなく、遅くなってしまいました。

後、今回、勝手に神様のこの物語の中での解釈を書きましたので、神様を信仰している方の観覧は、ご遠慮ください。

第二十八話　創造者

時間は数日前。

奏がアテネによって、気絶させられた、すぐ後。

「うっうっ、ここは。」

そこは見覚えがあつた。

確かここはアテネの部屋だ。

前に梨桜にボロボロにされた時に、寝かされたベッド。

「気がつきましたか？」

ベッドの横には、アテネと梨桜が立っていた。

そして、今、喋りかけてくれているのは、梨桜ではなく、アテネ。

いつもの喋り方ではなく、顔は真面目そのものだった。

このごろ、真面目なアテネを見ていなかったから、一瞬、誰か分からなかったよ。

「自分がどうなったか、覚えてる？」

「……はい。」

「どこまで？」

「確か、プレシアさんと話をしている、最中に僕の中で、何か弾けて……何かの呪文を唱えている最中に、気絶しました。」

うん、確か、そうだったと思う。

呪文の内容は覚えてないけど……。

何か、心の奥底から、あの言葉が、湧きあがってきた。

「・・・私たちのリミッターでは、抑えきれなかった以上、本当のことを話して理解してもらおうしかありません。だから、予定よりも遙かに早いですけど、あなたのその能力について、説明します。」

アテネがまったくふざけないってことはそれだけ、重大なことなんだろうけど、能力って？

「まずは、私たち神のことを話さなければなりません。」

そう言って、ベッドの傍にある、椅子に僕と梨桜が座るように促す。

「それでは・・・まず、神とは、システムなのです。」

「システムですか？」

梨桜も知らなかったようで、驚いている。

「システムと言っても、あなたたちが思っているような、システムではありません。現に私たちは生きています。創造主が創り出したシステム。人間の世界のバグを修正するためにある存在。それが神です。」

人間の世界のバグ？

修正？

「何を言っているか、分からないでしょう？簡単に言えば、人間の死は決まっているの、時間、場所、どうやって死ぬかも。でも、まれに、その決まった死に方をしない場合がある。それをそのまま放っておくと、その世界が死んでしまう。それを防ぐために創られた存在が神。」

「その世界の死っていうのは？」

「世界の死、すなわち、その世界の消滅よ。それを防ぐために、事務的に処理するシステムそれが、神。」

「・・・そのバグで死んだ人を転生させて、バグを取り除くんだね。僕のように。」

そうか、それで、僕は転生させられたのか。

「・・・半分は正解。でも、半分は間違っているわ。さっき、私たちは創られたと言ったわ。その私たちを創った人物こそが、創造者・

クリエイター。」

「その人が本当の神だということですか？」

「それは分からないのよ、梨桜。」

「分からないというのは、どういうことなんですか？」

「そのクリエイターは私たちというシステムを創りだした後に転生した。それも、人間に。」

「そんなことが可能なんですか!？」

「ええ、可能よ。そもそも、転生システムは、もしかしたらクリエイターが転生するために創られたのかもしれないわ。」

「・・・でも、それと僕の力、どう関係があるんだろう？」

「それと、奏の能力には、どんな関係あるのですか、アテネ？」

「・・・そのクリエイターの転生者が奏よ。」

「「!?!」」

「驚くのも無理ないわ。でも、セイバー、あなたは体験したはずよ、奏の力を、偽物とはいえ、ジュエルシードの力で限りなく本物に近づいていた、カリバーンが砕けると言われただけで砕けた。」

「・・・確か、その時のことは覚えていないんですね、奏。」

「・・・うん。」

「正直に話すよね、奏の転生の理由はそれなのよ。私を庇って死んだからじゃないの。」

アテネはかなり言わずらそうだ。

「どづいつことなんですか?」

「あなたの前世の体は、もう、クリエーターの力に耐えきれなかった。あのまま、放っておけば、三日ともたずに、暴走して、あの世界を破壊していた。だから、あの世界と奏を守る緊急処置で転生させたの。そして、今度はクリエーターの力が暴走しない体を与えた

の。」

・・・そうだったのか。

「でも、成長していない、あなたではクリエーターの力に耐えられなかった。梨桜の時に私たちはそう理解したわ。だから・・・リツミターをかけた。でも、それは簡単に破られた。・・・だから、今、話をしようと思ったの。奏、クリエーターの力を使わないで、もし、あなたがクリエーターの力に耐えられずに、死んでしまったら、その力がどうなるか分からないわ。」

・・・確かに。

神様を創ったほどの力だ。

でも、ふと思った。

「その力を使えば、ハッピーエンドにできるんじゃないんですか？ 仮にも、神様を創った力なら、プレシアさんの病気を治して、アリシアを生き返らせることも・・・。」

「!?!?」

今度はアテネが驚く番だった。

「・・・確かに、そうよ。でも、あなたはその力に耐えられない。だから、無理よ。」

「僕と前世の家族、知人を救ってくれたことには感謝します。でも、そのお願いは聞けません。」

「え?」

そりゃあ、そうだよ。

「僕はハッピーエンドが好きなんだもん。」

アテネの顔に焦りが生じる。

「私の話を聞いていたんですか!??」

「うん。でも、やっぱりね。」

「ダメです。あなたが死ねば、どうなるか分からないのですよ!!」

前々回のあなたの世界は、あなたが死んだことによって消滅しました！！周りの百の世界を巻き込んで！！」

僕とアテネが睨み合う。

「はあ、では、ここで、その力の練習をしてみてもいいですか？」

「え！？」

梨桜の一言に、僕もアテネも目を丸くした。

「だから、ですね、奏は今まで、意識せずにいた。でも、もしかしたら、意識して、使えば、体に負担がかからずに、発動できるかもしれないっと言いたいですよ、アテネ。」

・・・かなり、驚いている。

アテネ、その発想はなかったんだね。

「し、しかし、奏に何かあったら　。」

「やりなさい。」

突然、ドアの方から、声がした。

「お父様!!」「ゼウス様!!」

白い髪に白いひげを生やした老人が立っていた。

「梨桜の言うことも一理ある。それに、わしはここで奏とおまえが喧嘩しても、二人の仲が悪くなるだけだと思っただけだと思っただけじゃが?」

確かに、僕も、アテネも自分の意見を曲げる気はないし。

「・・・分かりました。ただし、お父様も立ち会ってくださいね!」

「ほ、ほ、ほ。もちろんじゃ。それに、クリエイターの能力を、発動まで、持っていける者が現れたのは久方ぶりなのじゃ。出て行けと言われても出て行かんぞ。」

そして、僕は、力を試すことになった。

「って、どうやって、発動すればいいんですか!？」

僕は肝心の発動方法を知らない。

っていうか、今までは無意識だし。

「願うのじゃ。」

「願う?」

「そうよ、その思いが本物なら、発動するわ。」

・・・願う。

今の僕の願いは、フェイトを、プレシアさんを、そして、アリシアさんを救いたい。

もし、僕の中に彼女たちを救える、翼があるなら、僕に力を貸して。

『小僧が、おまえはどこまで、貪欲なんだ？』

突然、僕の中に声が響く。

『おまえは、ただの自己満足のために世界のルールを犯すのか？そんなことをすれば、あの世界にバグが起こって、あの世界の人々が全員死ぬぞ？』

・・・これは。

『本当は分かっているんじゃないのか？そんな力おまえにはないってこと。』

そうだ。

これは。

『おい、なんとか言ったらどうだ？』

「君は僕だね。そう、僕の迷い。」

そう、その声の主は心のどこかで思っていることを口に出しているだ

け。

『は、はははははははは！！今まで、俺のことをそう言った、適合者はおまえが初めてだ。まあ、おまえは他の適合者と境遇がかなり違うがな。まあ、いい。発動を許可する。しかし、使えるかどうかはおまえ次第だ。世界はいつも、思い通りにはならないぜ。』

「できるぞ。この世界は、そんなに捨てたもんじゃない。」

僕の中で別の声が響く。

「I am the world. (私は世界)」

それは、言葉を覚えてたての子供の声のようで、

「The world always make mistake .
(世界はいつも、間違っ)」

それは、歳を老いた、老人の声のように。

「But I always choose . (しかし、私は選ぶ)」

大人の男性の声で。

「Because I expect . (なぜなら、わたしは期待する)」

大人の女性のような声で。

「We expect our fate . (運命に期待する。)」

いつもの僕の声で。

「So I break the world's rules .
(だから、私は世界の理を破壊する。)」

全ての声が合わさり、願いが届く。

そう、それは、僕が求める理想郷を無理矢理、世界に投影させる、
禁忌の術。

「 アヴァロン（全て遠き理想郷） 」

そして、僕が、求める理想郷に向かう。

第二十八話 創造者（後書き）

【INアテネの教えて、神様！！】

「さてさて、再開しました、アテネの教えて神様！！本日は、この頃、セイバーから、名前を梨桜に変えた、どっかの偉かった、王様」

「・・・梨桜です。それより、奏の心配をしなくていいんですか？」

「ああ、それなら、大丈夫 アテネの教えて、神様！！はあの世界から切り離されているから」

「・・・あれだけ、心配していたのに、薄情ですね。」

「だって、シリアスモードは疲れるの」

「はあ、そうですか。」

「では、今回は梨桜をゲストにして、質問にどんどん答えて行くわよ」

「しかし、私は、奏の所に行かないと・・・。」

「大丈夫 今の奏はユニゾンしなくても、大丈夫だから」

「うっうっうっ。。。」

「はい、いじけないでね このコーナーにも呼ばれない、出番がないフェレットもどきもいるんだから」

「・・・はい。」

「では、久しぶりなので言うっておきます。この『アテネの教えて、神様!』は作者の提供で行っております。ここでは本編の内容解説をするので、質問などがあつたら、お気軽に感想まで 私たちが解説するわ。後、ここでのやり取りは本編には一切関係がございません、ご了承ください。」

「グスツ、感想もお待ちしております。」

「さてさて、まずは、ペンネーム、白ひげのおじさんからです。ほら、梨桜、読み上げて!」

「・・・グスツ、分かりました。え〜と、奏のクリエイター的能力を発動する時ってなんで、英語で唱えるのじゃ?後、なんで、金髪の王様の鞞の名前が技名になってるのじゃ?」

「あ、それはね、お父様」

「・・・ペンネームの意味は?」

「作者が、カッコイイと思ったから。バカだよね〜」

グサ!!

「それと、なんで、アヴァロンかって言うと、奏にはFateの知識があるから、アヴァロンの存在を知っていた、そして、心の何処

かで自分の望む世界〓理想郷って勘違いしたクリエイターの能力が勝手につけたみたい。だから、原作のアヴァロンとは能力が全然違うのよ」

「へ〜そうだったんですか。」

「そうよ、ではでは、どんどん、いつてみましょう」

「はい、ペンネーム、関西弁の女の子からです。作者！無印にどんだけ時間かけとんねん！！さつさと、A'sに入り！！そやないと、私が出られへんやんけ！！」

ちなみに、今、梨桜ちゃんは、関西弁が恥ずかしかったのか、下を向いて、顔を真っ赤にしてるわ　可愛い！！

「それはそうと、え〜と、これについては翼から、手紙を預かって来てるわ」

「それは、なんとも・・・。」

「なになに、すいません、文章力がないため、こんな、ダラダラ書いてしまいました。もっと、精進いたしますので、これからも、よろしく願います、だって」

「「ようは作者がダメなんだ！！」」

グサ、グサ！！

「ああ、もう時間が来てしまったわ　また、私の気が向いたら、会いましょう」

「よっは気分なんですね。」

「うんでは、またね。」

【DZF】

第二十九話、あの日のできごと

【インプレシア】

あのできそこないの人形が私に前に姿を現した。

鬱陶しい。

あの子はアリシアではないのに。

「あなたに言いたいことがあってきました。私は・・・私は・・・アリシア・テッサロツサではありません。あなたが、作ったただの人形なのかもしれません・・・私、フェイト・テッサロツサはあなたに生み出してもらって、育ててもらった、あなたの娘です。」

「ふ、ふ、ふ、ふ、ふ、あははははは、だから、何？あなたを娘と思えと？」

何を言いだすかと思えは。

「あなたが、望むなら、私は、あなたを世界中の誰からも、あなたを守る。私が、あなたの娘だからじゃない。あなたが私の母さんだ

から。」

私はアリシアの母親よ。

「くだらないわ。」

そして、私は魔法陣を足元に展開する。

しかし、私の足場は崩れてしまう。

後、もう少しだったのに。

落ちて行く中、私の所にあの人形が飛び込んでこようとする。

その瞬間に昔の記憶がよみがえる。

そう、あれはまだ、アリシアが元気だった時のこと。

私はアリシアとピクニックに出かけていた。

「アリシア、母さんね、この仕事が終わったら、長いお休みもらうから、その時はもっと、遠くにお出かけしたりしましょう。」

「ママ、あのね。」

「なあに？」

「私、欲しいのがあるの!!」

「あら、アリシアが欲しい物だなんて、めずらしいわね。いいわ、母さん、なんだって、あげちゃう。」

すると、アリシアは目を輝かせて、

「私ね、妹が欲しいの!!」

爆弾発言をした。

・・・アリシア!?

「あ、あのね、アリシア、子供は・・・。」

「え〜、だって、私、もう、妹の名前も決めたんだよ。それに、妹がいたら、ママがいなくても、寂しくないよ。」

・・・アリシア。

「そうよね、母さん、頑張ってみるわ。それで、アリシア、妹の名前は何にするの?」

私はその時に興味本意で聞いてみた。

「フェイト、フェイト・テッサロッサ。運命の女神って意味なんだって。」

「そう、なら、母さん頑張ってみるわ。」

「わあ〜い。」

そっだ、なんで、私は忘れていたんだろう。

私は、いつも、気づくのが遅すぎる。

「一緒に行きましょう、アリシア、あの子を置いていってしまつのは、悲しいけれど、私はあの子に今まで、酷いことをしてしまつたわ。だから、あの子にはこれから、幸せになつて欲しい。」

フェイトごめんなさい。

私は、いつも気づくのが遅すぎる。

「まだまだよ、まだまだ。」

私は優しい光に包まれた。

～海鳴市・山の中～

「ここは？」

私とアリシアの入ったポットは突然、優しい光に包まれて、森の中に立っていた。

「ここは海鳴市ですよ。プレシアさん。」

「あなたは。」

私の前に、アリシアとフェイトと同じくらいの年齢の男の子がいた。

「僕は、ナイトって言えば、分かりますか？」

「あの管理局と一緒にいた子？」

「はい。」

でも、あの時と雰囲気全然違うような気がする。

確か、仮面をつけていたはず。

「あなたが、なぜ？」

「あなたたちを救いに来ました。」

え？

救いに来た？

「何を言っているの？あなたが私たちを救ってなんになるの？」

管理局に突き出すのかしら。

それなら・・・アリシアを管理局に渡すくらいなら。

「大丈夫です。それに、僕には、時間がない。だから。」

男の子の体が光だす。

「 Care a patient a disease . . .
患者の病気よ、治れ。」

すると、今度は、私の体が発光し始める。

なんだろう、この光は私は今までに経験したことのないくらい、暖

かくて、気持ちいいわ。

「これで、あなたの病気は治りました。」

え？

何を言っているの？

私の病気は不治の……。

「大丈夫です。」

男の子はそう言いきった。

なぜだか、この子は信じてもいい、そんな気がする。

フェイトを何度も助けてくれたしね。

「さて、次はアリシアさんだ。プレシアさん、すみませんが、アリシアさんその水槽から出してもらえませんか？」

・・・水槽って。

しかし、彼なら、アリシアを救ってくれそうな気がする。

「分かったわ。」

私はそう言っつて、ポットを操作して、アリシアの体を抱きかかえる。

アリシア、かなり、痩せてしまったわね。

「え？」

一瞬、驚きの声をあげてしまった。

なぜかと言うと、私はこれまで、感じたことのないくらい、大きな魔力が私の傍で、集まったからよ。

私以上の魔導師にも会ったことはある。

しかし、これほどの差を感じたことはない。

私はこれでも、Sランク魔導師だから。

この子はいつたい……。

「大丈夫、絶対成功させます。」

そう、男の子は言いきった。

「 I a m t h e C r e a t o r . (私は創造者)

その声はまるで、私の母の声のような気がした。

「 I c a n d o . (私はできる。) 」

それは、確かに男の子の声なはずなのに。

「 But it is mistake . . .)しかし、それは
過ちである。」

でも、確かに彼の声には、そう思えさせる、何かがある。

「 I always admit a mistake . . .)
私は、いつも、過ちを認めている。」

「 But I do . . .)しかし、私は、行く。」

「 because I want to do」なぜなら、
私がしたいから。」

「 So I do」だから、私は行く。」

突然、私が抱いている、アリシアが光始めた。

「 You become the phoenix」(不死
鳥となれ。)

アリシアが炎に包まれた。

しかし、その炎は、熱くなかった。

それどころか、心地よい。

「うう~~~~、あれ？ママ、なんで泣いてるの？」

あの娘が、私にもう一度、話しかけてくれた。

瞳から、涙が止まらない。

「ママ、泣いちゃダメだよ。」

「アリシア、アリシア、アリシア、アリシア、アリシア……！」

「ママ、苦しいよ、そんなに、きつく抱っこしないで。」

【DZF】

第二十九話、あの日のできごと（後書き）

【INアテネの教えて、神様！！】

「さてさて、MCのアテネよ、気づけば、このコーナー結構な回数してるわね。応援してくれる、皆、ありがとう。さてさて、今回のゲストはこのお話について、復活を果たした、アリシアちゃんよ。」

「はあ、いい、アリシアです！！いつも、ママとフェイトがお世話になっただけです！！」

「あら、元気がいいわね。でも、私、元気がある方が、好きよ。」

「ありがとうございます！！」

「では、質問コーナーにいきなり、行ってみましょう。アリシアちゃん、お願い。」

「はい！！では、まず初めのお便り、ペンネーム、娘は歳とっていないのに、自分だけ、老けてしまった母親さんから！！」

「あら、確かに、可愛いそうよね。」

「あの男の子はアリシアに不死鳥となれって言うてましたけど、アリシアは不死になっただけですか？だって！！」

「確かにね。でも、はっきり、言っちゃうわ。なってます。」

「ええ、私、不死になりたかったなあ！！」

「あれは言霊なだけだから、実際には、生き返らせるための気合いみたいなものよ」

「そうなんだ!!」

「さて、次の質問にいきましょう」

「はい!!ペンネーム、姉が生き返った妹さん!!こんばんは!!」

「こんばんは!!」「こんばんは」

「私のお姉ちゃんの声って私と同じなんですか?だって!!」

「ずばり、答えます 一緒」

「やっぱり!!」

「次にいきましょう」

「ペンネーム、未だに、自分のプロフィールが公開されない、主人公さん!!僕のプロフィールはいつになったら、公開されるんですか?だって!!」

「あ、時間がないから、そのお便りは次にしましょう」

「ええ~~~~!!」

「では、また次回のアテネの教えて、神様!!で会いましょう」

「質問、感想待ってます!!」

【END】

第三十話　その後

その後、アリシアが生き返ってから、三日たった、結局、プレシアさんはフェイトに会わなかった。

なんでも、今、会っても、フェイトを幸せにしてあげられないから、きちんと、罪を償ってから、会うつもりらしい。

それで、プレシアさんの現在は、フェイトの知らない隠れ家の一つに住んでもらっている。

食料などは、アテネが『私がなんとか、して、あ・げ・る』って言うてくれたので、助かった。

後、罪のことなのだけど、アリシアがある程度、大きくなるまで、償うのを待ってもらっている。

幼いアリシアを一人にってしまうのは忍びない。

それにまだ、僕が管理局のリンディさんたち以外で信頼できる人と接触できていないというのもある。

信頼できる人とプレシアさんのことについては話し合おうと思っ
ている。

まあ、罪と言っても、幼児虐待くらいかな

フェイトに対しての。

それ以外はって？

僕的能力で全部、映像を消したから、証拠なし。

もちろん、フェイトの裁判が有利になるデータだけは残している
けど。

それにしても、管理局にハッキングとか、なんか僕、悪役みたい。

後、僕は、週に一回はプレシアさんとアリシアの所に行っている。

なぜかというのと、たぶん大丈夫だと思うけど、一応、梨桜に護衛を
頼んでいるのだけど、梨桜が『奏が週に一度、必ず会いに来てくれ
ないなら、護衛しません！！』と言い張ったためである。

なんで、我がママを言ったんだろっ？

そして、現在、フェイトに送るビデオレターをなのはお姉ちゃんと一緒に作成中です。

「ほら、奏、笑って。」

なのはお姉ちゃんはノリノリです。

「う、うん。」

「でも、奏とフェイトちゃんがお友達だなんて、ビックリしたの。」

「う、うん、僕は、友達だと思っているけど、フェイトはどうかは、分からないよ。」

「たぶん、大丈夫。」

・・・その自信はどこからくるんだろっ。

そして、ビデオレターを撮り終えた僕は、なのはお姉ちゃんと別れて、ある場所に向かった。

なのはお姉ちゃんも一緒に行くって言い出した時はどうしようかと思っただけ、すずかとアリサと出掛ける約束があったため、助かった。

さてさて、僕は、一人でどこに向かっているかと言うと、それは！！

図書館！！

確か、守護騎士が現れるのは六月三日だったはずだから、まだ大丈夫。

だから、今のうちに、はやてに接触しておこうと思う。

え？

無印の時も、僕はナイトと名乗って、顔を見せてないから、フェイトと友達になる必要はなかったって？

うん、正直ノリで

でも、まさか、初日には、会えないだろう。

っと思っていたら、

「うん、届かへん。」

いきなり、会えました。

僕って、クリエイターの能力を自覚してから、かなり、運が上がったよ。ような気が……。

まさかね。

それにしても、車椅子の女の子が困ってるのに、周りの大人は無視して……正直おかしいでしょ。

まあ、予定通りで助かったけど。

僕は、はやくに、近づいて、本をとってあげる。

「はい。」

もちろん、スマイルは忘れずに。

「あ、ありがとお／＼／」

ん？

顔が赤いような・・・大丈夫かな？

「他にとって欲しい本はある？」

「で、でも、悪いし。」

「大丈夫、今日、僕、暇だから。」

「ほなら、お願いします。」

そして、手伝うこと三十分・・・三十分!？

どんだけ、読みたい本あるんだよ。

なんでも、棚の高い所にある本で読みたい本が結構あったけど、手が届かないから諦めていたらしい。

・・・周りの大人もうちよつと、親切になろうよ。

「今日は、ありがとう／＼／」

「うん、うん、ぼくも、八神さんと話せて、楽しかったよ。」

ちなみに、自己紹介は済ませてある。

「はやてでええよ／＼／」

「あ、それなら、僕も、奏でいいよ。」

「それでなんやけど・・・今日のお礼がしたいから、家に遊びに来てくれへんかな？美味しい、クッキーを石田先生にもたつたんよ／＼／」

正直、はやての家に、どうやって、行くのかと考えていた所だから、ラッキーだ。

「じゃあ、お言葉に甘えて。」

「それじゃあ、家にレッツゴ〜〜〜や」

そして、八神家でクッキーを食べている最中に、僕の魔力リミターを解除する。

はやてと別れて、帰路につくと、案の定、ネコが尾行して来た。

よし、計算通り。

僕は唐突に振りむいて、ネコを見る。

向こうは、一瞬、警戒したようだが、

「あ、可愛いねこだな〜。」

と言う、僕の言葉にまんまと騙されて、僕を接近させてしまった。

「おまえ、誰かの飼いネコか？」

そう言いながら、ネコの頭をなでてやる。

「ニャ〜」。

なんか気持ちよさそうだ。

すると、結界が張られた。

あ、そっか、一匹が僕を油断させて、もう一匹が、僕を、捕まえる役割か。

確かに、昔の僕なら、やばかったけど、もう、使い魔ごときには、おくれはとらないよ。

小型のエクスカリバーを創りだして、頭をなでていたネコに突きつける。

「動かないでね。動くところの子の命はないよ。」

案の定、振り返ってみると、仮面の男が立っていた。

「貴様、何者だ？」

「誰でもいいでしょ？君たちの主である、ギル・グレアム提督に会わせて。」

「な！？父様を知っているのか！？」

僕の前で硬直している、ネコがしゃべった。

ちなみに、僕はこの二匹の区別がつかないよ。

だって、実際、ほとんど、同じで、まったく違いなんてないんだから。

「……目的は？」

かなり、警戒されてしまったみたい。

「闇の書についての議論かな？」

「やはり、そこまで、知っているのか。でも、父様に会わせるわけにはいかない。」

「でも、それだと、君たち、ここで死ぬよ？」

殺気と魔力を最大限放出する。

もちろん、殺す気なんてないよ。

交渉のための嘘。

「クツ!?」「」

さすがに、僕の魔力量に驚いたみたい。

SSランクはだてじゃない。

数秒のこうちやく状態が続いた後に、モニターが現れた。

「アリアを解放してもらえないかい？そうすれば、君と会おう。」

「「父様!?!」」

そのモニターに映ったのは、ギル・グレアム提督だった。

第三十話〜その後〜（後書き）

【INアテネの教えて、神様!〜】

「さてさて、ついに、本編がA's編に突入よ」

「そうですね。」

「あら、梨桜元気ないわね どうしたの?」

「私の出番はいつあるのでしょうか?アテネはこのコーナーがあるのでいいでしょうが、私は、本編で軽くその後を紹介されて終わってしまいました。」

「元気だして、あなたは一応、ヒロインなんだから（笑）」

「本当ですか!?!」

「さあ?ぶっちゃけ知らないわ」

「知らないのに、言わないでください!!!本気にしちゃったじゃないですか!〜!」

「まあまあ、でも、今回はゲストで出れるんだからいいじゃないお父様なんてここにも、呼ばれないのよ」

「・・・確かに、仮にも最高神なのに。」

「そうよ、いくぶんかはあなたの方がマシよ それに、あなたの活

躍は、このA's編が終わった後にあるらしいわよ」

「え！？それまで、出番なし！？」

「さあ？それは神のみぞ知る」

「あなたが、神だ！！」

「さてさて、梨桜はほつといて、今回は奏のプロフィールを紹介するわよ」

名前 高町・奏 たかまち・かなで

年齢 九歳

身長 138cm

体重 30kg

魔力量 SS

容姿 黒髪で、黒い瞳。顔は女顔で、知らない人がみれば、なのはとは姉妹に見える。体つきは、一見、ひ弱に見えるが、梨桜との修行のおかげで、ほど良く筋肉がついている。本人は、黒髪、黒い瞳ってクロノとカブツてる・・・と落ち込んでいる。

希少能力 聖剣解放（エクスカリバーを創りだせる 聖剣を創りだすに変化。クリエーターの能力を自覚したため。制限本数なし）

- マスター・オブ・プログラム（あらゆる、プログラムを

指揮下におく。)

- 世界創造（現在修行中のため、使えない。ただし、緊急時を除く。未だに能力の全貌は分からない。）

補足 この頃、ダークになりかけているが、基本は姉思いの優しい子。なのはが三歳の時に、高町家の前に捨てられていたのを保護された（神が高町家一同の前に現れて、面倒をみるようお願いする）。その後、梨桜（元セイバー）の元、剣の修行及び、魔法の修行を続けたために、SS時のフェイトと互角に戦える実力を持つ。しかし、剣技に関してはまだ、梨桜の方が上。魔法は現在、アテネに教わっている。

補足2 - 高町奏の遙か昔の前世は神を創った、存在で、創造主・クリエーターと呼ばれていた。奏にもその能力があり、世界を操ることが可能。ただし、強力すぎて、自覚した今でも、使用はアテネが見ている時に限られる。修行も。

「てな、感じよ」

「うーん、我がマスターながら、チートですね。」

「でも、このくらいの方が、私は好きよ」

「さてさて、じゃあ、今日はこの辺で、次回はアリシアちゃんがゲストに来てくれるわ。ご意見、ご感想・質問がありましたら、感想まで」

「私の出番は」

「
バイバイ
」

【END】

第三十一話　A's 始動

時間は過ぎて、守護騎士が覚醒。

闇の書の収集が始まった。

僕はその間に何をしていたか？

梨桜とプレシアさんとアリシアの所に行ったり、なのはお姉ちゃん、アリサ、すずかと遊んだりしていた。

後は、アテネと魔法の修行

たまに、図書館に行つて、はやてと話したり？

え？

守護騎士との接触は？

シヤマルさんだけだよ。

他の守護騎士の皆さんは僕の体つきできっと、敵だと認識して襲っ
てきそうだから。

・・・後、クラスの男友達となぜ遊ばないかって？

友達はあるよ！！

でも、大抵、お姉ちゃん、アリサ、すずかと仲良くなりたくて寄っ
て来るだけだから、そんなに深くはなれません。

てか、そんな不純な理由で友達になりたくないし。

そんなこんなで、なのはお姉ちゃんとヴィータの戦闘フラグ。

それから、梨桜とユニゾンしなくても、僕自身に認識阻害魔法をか
けて、ナイトって認識するように魔法かければ、金髪じゃなくても、
良かったんだよ。

気づいて、梨桜に言ったら、『出番が、出番が、出番が・・・』っ
て、なんか呟いてたよ。

なんか、悪いことした気分・・・後で、お母さん特製シュークリームを持って行ってあげたら、機嫌を直してくれた。

その時にアリシアにも、あげたら、アリシアのお気に入り品の一つになっちゃった

シュークリームのクリームをほつぺたにつけながら、必死に食べる様子はかなり可愛かった。

さてさて、そんな訳で、僕は、仮面をつけたただけでの登場になります！！

でも、

「はあ、どうしたものかな？」

入るタイミングって大事だよな。

「ラケーテン！！おおおおおおお！！ハンマー！！」

・・・なんか、なのはお姉ちゃんが一方的にやられるのを見ると、ムカつく。

僕は、咄嗟にもう、結界内に侵入していた。

そして、なのはお姉ちゃんがビルの窓ガラスに衝突する前に受け止めた。

「大丈夫か？」

「え、え、え〜〜！？」

ちなみにフェイトがなのはお姉ちゃん助けるフラグ潰しちゃった

ちなみに、ユーノの回復フラグも

「なのは！！あ、あなたは！？」

そこにフェイトも到着。

これで、ヴィータは五対一で戦わないといけなくなった。

ヴィータにお仕置きして逃がすか。

「さて、後は俺に任せて逃げろ。」

「そんな、私たちも戦います。」

ユーノが反論してくるけど、

「俺は今、非常に機嫌が悪い。従わないなら、おまえらも戦闘不能にするよ」

「うっ。」

黙らせる

でも、僕もシスコンかもね。

「なら、私だけでも。」

フェイトがそう言ってくれる。

「見学なら許す。ただし、ユーノはなのはを守っている。以上だ。」

さてさて、いきますか。

「エクスカリバー。」

一振りだけ、エクスカリバーを創りだす。

「ヴィータちゃん 覚悟しろよ」

そう言って、斬りかかる。

「な、こいつ、速い!？」

バリアを張って、対応しようとするけど、

「マスター・オブ・プログラム起動。バリアブレイク。」

バリアが消え去る。

「なんだと!？」

さらに、不可視のエクスカリバーでヴィータのグラーファイゼンを
一刀両断する。

さらに、バインド。

梨桜がいなくても、ある程度は使えるようになったよ。

「くっそ!！」

「さてさて、お仕置きタイムといきましょうか。」

その時、僕とヴィータの間に炎の柱が現れた。

・・・シグナムか。

「大丈夫か？」

「今から、逆転するところだったんだよ!！」

「ふふ、それは余計なことをしたな。」

「そんな喋って余裕だね。」

完全に僕、無視されてるよ。

「ヴィータをよくも、やってくれたな。」

「そう怒るな、先に手をだしたのは、そっちだろ？シグナム？」

「な！？なぜ、私の名前を知っている！？」

「さあ？俺に勝てたら、教えてあげるよ。」

「シグナム、あいつは私にやらせてくれ。」

「・・・ああ、おまえがそう言うなら。」

僕的には、全員で一斉にかかって来て欲しいんだけどね。

「ナイト、あの剣士は私にやらせて。」

フェイトがそう言うてきた。

・・・今のフェイトじゃ、シグナムには・・・まあ、いざとなった
ら、助ければいいか。

「あの、男は私が。」

アルフもやる気だ。

「分かった、ただし、危なくなったら下がれよ。」

「うん。」「分かったよ。」

それじゃあ、改めて、お仕置きしようかな。

「いくぞー!」

俺の、言葉を合図に、また、戦いが幕を開けた。

「アイゼン!!」

修復した、アイゼンで再び、俺に向かって来る。

その際に、魔力で強化した鉄球を俺に向けて放つが、エクスカリバーの敵じゃない。

「はあああああ!!」

五球あった、鉄球は一瞬で全て、斬り捨てる

そして、ヴィータのアイゼンを受け止める。

「うおおおお!!!!!!」

ヴィータは、叫び声をあげながら、さらに、力を込めるが、僕の剣は一切押されない。

梨桜の斬りつけの方が十倍は思い。

「はあ!?!」

その声と共に、ヴィータを弾き飛ばす。

「くっそ!?!アイゼン、カートリッジロード!?!」

「load cartridge」

カートリッジが三本も勢いよく、アイゼンから、吹き出す。

・・・本気だね。

「ラーケンハンマー!?!?!」

そこで、フェイトがシグナムに、バルディッシュを折られてしまった光景を横目で見てしまった。

「ジャストオブウインドウ!?!」

ヴィータのハンマーが僕に当たる前に、僕の放った、風がヴィータを呑み込んだ。

そして、そのまま、ビルに激突する。

すると、フェイトの相手をしていた、シグナムが急いで、こっちに来た。

「まさか、一対一の勝負でベルカの騎士が負けるとは・・・貴様、何者だ？」

「ただの弟だ!!」

「.....」

ミスった.....

「このまま、退くなら、逃がしてやるよ。おまえたちの主は嫌いじゃない。」

「な!?! 貴様、主のことを知っているのか!?!」

「ああ。」

「それなら、このまま、退くわけにはいかないな。」

さてと、シグナム相手に、リミッターつきはしんどいかな。

「リミッター解除。」

瞬間、僕から、SSランクの魔力が吹き出す。

「な!?!」

「これでも、やるのか？実力の差が分からないほど、愚かではないだろうか？」

これで、退いてくれれば、追わないんだけど・・・。

その時、

「きゃあ!?!」「なのは!?!」

なのはお姉ちゃんのリンカーコアが抜き取られた。

な！？

シヤマルか！？

忘れてた。

「あああああ！？」

僕の目には、苦痛で、顔を歪ませた、なのはお姉ちゃんが写った。

「・・・真名解放。」

風王結界を解除する。

そこには、あの黄金に輝く、剣が現れる。

「O H A N A S I I の時間だ。」

エクス（約束された）

カリバー（勝利の剣）

最大出力の光の魔力の奔流を、叩きこむ。

その威力、スターライトブレイカーの五倍。

「くっそ!!」

シグナムはそう言残して、転移した。

ちっ、逃がしたか。

僕の剣を見た瞬間に転移魔法の準備してたから、さすがといつとこ
ろかな。

しかし、目標を失っても、光の魔力の奔流は止まらない。

そのまま、結界を破って、夜空に花火のように撃ちあがっていった。

第三十一話 A's 始動（後書き）

【INアテネの教えて、神様!!】

「さてさて、本編でまさかのシスコンが判明した、主人公はほつておいて、アテネの教えて、神様!!を始めるわよ」

「ゲストのアリシアです!!でも、アテネ、奏のシスコンは仕方ないよ、あんなに可愛がってもらってるお姉ちゃんが傷つけられたら、普通怒るよ。ちなみに、私は、奏を傷つける人は許さない!!」

「あらあら、アリシアちゃんは奏のことが好きなのね」

「うん!!それとね、梨桜とママと会ったことないけど、フェイトも!!」

・・・まあ・・・この子にまだ恋愛は速いわね。

精神年齢六歳くらいだし。

「それでは、今日のお便りにいってみましょうか」

「うん!!ペンネーム、主人公のお姉ちゃんからの質問!!急に私の出番減ってないですか?後、展開急に早くなってないですか?だつて!!」

「それは、また作者から、お手紙をもらってきたわよ、すみません、いつも、お世話になってる作者です。なぜ、A'sの展開がこんなに早いかわかりますと、無印の時にダラダラやったのを反省した

からです。だって」

「むう、確かに、三十話近く、使ったもんね!!」

「そういう理由らしいわ」

「では、今日は、いつもより、かなり短いけど、バイバイ!!」

「え？もう終わりなの？」

「うん、最後にアテネお願い!!」

「感想、質問、待ってます」

【END】

第三十二話　シャルさんの憂鬱

結界を破った、後に、僕はいったん、なのはお姉ちゃん、フェイト、アルフ、ユーノから離れて、様子を窺うことにした。

やっぱり、なのはお姉ちゃんは管理局の治療を受けるために本局に向かうようだ。

僕は、正体を明かしていない以上、同行はしない。

さて、僕は、いったん、家に帰ろう。

・・・あんまり、遅くなると、お母さんに殺される。

比喻表現じゃなくなるくらいのお仕置きになる。

あれを、毎日のように、受けている、お父さん、お兄ちゃんはずいと思っ。

・・・僕は一日で根をあげた。

なんとか、お母さんに気づかれる前に、家につくことができました。

ホントに、良かった。

それから、一日たった。

案の定、フェイトたちが引越して来た。

それで、今、アリサ、すずかに誘か・・・連行されて、フェイトの
家に向かっています。

後で、結局、翠屋に来るんだから、家にいても・・・。

「奏君、私たちといるの楽しいよね」

すずか、顔は、笑ってるけど、目からハイライトがなくなってるよ。

逆らったら・・・。

考えるのをやめた。

「はい、楽しいです。」

「良かった。」

それから、世間話をしながら、歩いていると、五分もしない間にフ
エイトの家についた。

てか、マジで近いよ。

俺は、ナイトの状態で、シグナムたちと接触しないといけないのに。

フエイトの家のインターホンを押すと、KY君が現れた。

まさか、KY君が出てくるとは……。

「なんか君、今、失礼なこと考えなかった？」

「いえ、何も考えてませんよ。」

勘がするどいKY君でした。

なんだかんだ言っでちゃんと呼んで来てくれました。

KY君ってホントはいい奴？

「奏！！来てくれたの！？」

なのはお姉ちゃん、アリサとすずかもいるよ。

「な・の・は！！私たちもいるわよ！！」「もう、なのはちゃん！
！」

二人は怒るけど、なのはお姉ちゃんの後ろで隠れている、フェイトを見ると、すぐに笑顔に戻る。

さすがはお嬢様。

「初めましては変かな？」

「ビデオメールで何回も会ってるもんね。」

「僕は久しぶりだし。」

「うん、アリサ、すずか、奏、久しぶり。」

ニコっとしてくれる。

「あら、皆来てくれたの。アリサさんにすずかさんに奏君よね。」

さらに、リンディさんが出てきてくれた。

「え、え〜と。」

アリサが焦ってる。

久しぶりに見るな。

「ああ、ビデオメール私も見せてもらったの。」

「そうなんですか。」

アリサが落ち着きを取り戻した。

もう、ちょっと慌てても良かったのに。

「うるさいわよ!..!」

殴られた。

僕の周りって、心読める人多くない？

「みんな、どこかで、お茶でも。」

「あ、じゃあ、家で。」

あ、やっぱり、そうなるんだ。

「あら、なのはさんのお家で？私も挨拶にいきましょう、ちょっと待ってね。」

そう言って、奥に入っていくてしまう。

「綺麗な人だね。フェイトちゃんのお母さん？」

・・・すずか、その質問は!？」

「・・・うん。」

ああ、やっぱり、まだ、プレシアさんのこと諦めきれてないんだ。

プレシアさんも会ってあげれば・・・うんうん、考えるのをやめよう。

僕が口を挟む問題じゃない。

その後、翠屋で軽く雑談して、僕は、皆と別れて、シグナムたちの元へ向かう。

さてと、管理外世界を何回か転移していけば、会えるだろう。

案の定、五回目の転移で、シャマルに会えた。

「あなたは!？」

あ、驚いてるよ。

今回もシャマルが闇の書を持っているみたい。

って、僕に気をとられたせいで、犬の化け物みたいな生物の攻撃がシャマルにクリンヒット。

はあ、助けてあげようか。

化け物相手なら、

「
聖剣解放

来い、
アスカロン
」

ゲオルギウスが使ったとされる、ドラゴン殺しの聖剣。

僕のエクスカリバー精製能力が、クリエーターの能力を自覚した時

に、聖剣解放という希少能力に変化した。

能力は、あらゆる、聖剣を創りだせる。

しかし、能力は必ず、神話と同じとは限らないのが悩みの種だね。

このアスカロンの能力は、人以外の全てのものを切り裂くことができる。

つまり、対獣用。

ガジェットなどに有効かは不明。

つまり、こんな、犬の化け物なんて、一瞬で斬り伏せられる。

「ぎゃあ……！！！！！！！！」

はい、終わり。

一応、回復魔法で死なないようにして、バインドをかける。

そして、尻もちをついているシャマルを手を差し伸べる。

ううん、こんな時は背が高かったらいいのになってつくづく思う。

「あ、ありがとうございます／＼」

ん？

なんか、シャマルさんの顔が赤いような……。

まあ、この世界熱いから。

「すまない、念話ができないように、ジャミングをかけさせてもらっている。」

そう言った瞬間、シャマルは持っている闇の書を両手でかかえて、睨んでくる。

「闇の書は渡しません。例え、この身にかえても。」

ああ、この前のことで、警戒されちゃったかな。

仕方ない。

僕は、自分の胸に手を当てて、自分のリンカーコアを取り出す。

「俺のリンカーコアを闇の書に喰わせる。」

「え？」

「だから、俺のリンカーコア、欲しいだろ？ちなみに、俺一人で三十ページは、軽くいくぞ。」

「で、でも。」

「それで、俺と君の信頼関係につながるなら、安いもんだよ。」

「え／＼／」

また、顔が真っ赤だ。

大丈夫だろうか？

「いいから。」

「・・・うん、分かった。」

そう言って、俺のリンカーコアは、闇の書に一部喰われた。

「クッ。」

思った以上に辛いなこれ。

「大丈夫ですか!？」

「あ、ああ。」

ま、痛いのは痛いけど。

それから、俺の胸の痛みが、治まるまで、シャマルは話すのを、待
ってくれた。

「それで、あなたはなぜ、私たちに協力してくれたんですか？」

「ああ、それは、俺も君たちの主を死なせたくないからな。」

「はやくちゃんを知ってるんですか!？」

「……めっちゃ、名前言っちゃたよ。」

「名前は出さない方がいい。誰が、どこで聞いているか分からない。」

「あ、そうですね、気をつけます。」

「まあ、君と接触できたのは幸運だったが。」

「え／＼／」

「他の守護騎士たちなら、戦闘は避けられなかった。」

「あ、確かに。」

そう、納得したように、言うけど、どこか、落ち込んだ様子のシヤマルだった。

「それでだ。本題に入ろう。」

「はい。」

「俺は君たちの主を救いたい。だから、忠告する、闇の書を完成させる時は俺を呼べ。」

「なぜですか？」

「闇の書を制御して、はやての足を治す。」

「そんなことが!？」

「ああ、できる。」

もちろん、MOPのおかげで。

「不可能です。闇の書は主以外には操作できません。」

「大丈夫だ、俺の希少能力が、そういう能力なんだ。」

そう言う僕をジト目で睨んでくる、シャルル。

うーん、直接、見せる方が、早いかな？

「MOP発動、クラールヴィント、モードリリース。」

すると、シャルルのバリアジャケットが急に、解除される。

もちろん、僕の指示に従ってなんだけど。

「な、なんで、どうしちゃったの！？クラールヴィント！？」

しかし、シャルルの声に、まったく、反応しない。

リリース、つまり、待機状態だから。

「どうだ？これで、少しは信用する気になったか？」

ん〜。

難しい顔してる。

「分かりました。あなたの言葉を信用します。」

結局、おれてくれた。

「それで、実際、私は何をすれば、いいんですか？」

「今まで通り、魔力を集める、防衛プログラムが発動していない、今の状態では、ほとんど、干渉不能だ。干渉するにしてもリスクが高すぎる。」

「・・・やっぱり、そうですか。」

「でも、心配するな、完成したら、必ず救ってみせる。後、他の騎士には俺のことは言つな。」

「どうしてですか？」

「絶対にひと悶着ある。」

「クスッ、そうですね。分かりました。」

「では、またな。」

「はい、また。」

そう言い残して、シャマルから、ある程度、離れたところで転移して、僕は家に帰った。

第三十二話、シャマルさんの憂鬱（後書き）

【アテネの教えて、神様！！】

「さてさて、今回のゲストは、未だに、出番がかなり少ない、はやてちゃんです」

「皆、おひさあ〜！！！」

「ホントに久しぶりの登場よね」

「それで、今回、新たに現れた、聖剣、アスカロン。まさか、作者が、奏にエクスカリバーを使わせたいから、作った、能力がまさか、こん風に変化するとはな。」

「そうよね、作者の思いつきらしいけど、こっちからしたら、奏がさらにチートになってしまいうから、やめて欲しいんだけどね」

「そうやね。」

「な！？作者がこの会話が不快だったから、強制終了をかけようとしてるわ！？」

「なんやて、この頃、質問に全然答えてへんのか！？」

「ええ、だから、最後にこれだけ言います 作者は聖剣について、あまり、詳しくありません、ですから、皆が知らないような聖剣、オリジナルの聖剣がありましたら、教えてくださいね」

「そな、今回はこれで。」

「バイバイ」

【END】

第三十三話 涙 (前書き)

今回は短めです。

すいません。

第三十三話　涙

シヤマルと会った次の日、ついに、フェイトが僕たちの教室に転入してくる。

「楽しみだね　奏」

「うん、そうだね。」

なのはお姉ちゃんは朝からもう、上機嫌だ。

フェイトと一緒に学校通えるのが嬉しくてたまらないんだろう。

だって、一時は敵対関係にあったわけだから。

でも、僕的には、プレシアさんとアリシアと和解して欲しいんだけどね。

まだまだ、プレシアさんの方に、問題がありそう。

まず、管理局への根回しがたいへん。

まだ、僕は管理局に入局してないけどね

「みんな、席について、今日は転入生を紹介するわよ。」

「「「「はい。「「「「」

皆、現金なもので、転入生が来ると聞いたら、十秒もしないうちに、全員が席についた。

いつもは、先生に言われても、なかなか、席につかないのに。

「転入生は、なんと、外国から、来てくれました。さあ、入っていわよ。」

すると、教室のドアが開いて、金髪のツインテールの女の子フェイトがトコトコと歩いて入って来た。

「フェイト・テッサロッサです。よろしくお願ひします／＼」

緊張してか、頬が少し赤い。

たぶん、クラスの男の半数が可愛い！！って思ったと思う、現に僕も、少し、ドキッてした。

・・・なのはお姉ちゃん、アリサ、すずかの視線がなんか怖い。

「フェイトちゃんはまだ、日本になれていないから、皆、色々教えてあげてね。」

「「「「はい。」」」」

「それじゃあ、フェイトちゃんは高町君の隣ね。」

「はい。」

また、トコトコと歩いて、僕の隣の席までやって来る。

「よ、よろしくね、奏／＼／」

「うん、よろしく。」

瞬間、男、なのはおねえちゃん、アリサ、すずかからの殺気が……気のせいだと思つことにした。

だって、その方が、人生楽しいよ（泣）

そして、一時間なんてあっという間にたつてしまった。

それと、僕がフェイトに教科書を見せるために席を寄せた時も、色々あったのだけど……聞かないでください。

「どこから来たの?」「日本語上手だね。どこで、覚えたの?」

「高町君と知り合い?」「向こうの学校ってどんな所?」

今、フェイトは質問攻めにあっていた。

「ううううう。奏ううう。」

そんな捨てられた子犬みたいな、目をしないでよ。

ちよつと、このまま、フェイトを見ていたって思っちゃったじゃないか。

ホントにちよつとただだよ!!

でも、さすがに、可愛いそうなので、

「ほら、皆、そんなに質問しても、フェイトは一人なんだから、答えられないよ。ほら、質問は一人一個ずつ。」

・・・僕はフェイトのマネージャー？

「か、奏、ありがとう!!」

そんな目をキラキラさせないで、さっき、もっと困ったフェイトを見てみたいと思った僕を!!

それから、質問タイムは、次の授業が始まるまで続いた。

ちなみに、次の休み時間は、隣のクラスの子が来て、まったく同じことになった。

その後は、まったく原作と同じ？

で、高町家に皆が遊びに来た。

僕？

うん、僕はアテネの所に魔法に修行を見てもらいに行こうとした所を、なのはお姉ちゃんに見つかって、強制連行されました。

・・・一応、アテネに修行を見てもらう約束をしていたので、時間に遅れて、アテネに散々怒られました。

なんか、僕、このごろ、良いことあったかな？

何も、悪いことしてないよ。

あれ？

瞳から涙が・・・。

僕のベッドはその日、人知れず、濡れていた。

第三十四話、主との約束

このごろ、まったく良いことがない奏です。

この間、プレシアさん、アリシア、梨桜の所に行ったら、シュークリーム持って行かなかったからってご飯抜きにされました。

まさか、プレシアさんまで怒るなんて、僕、泣いてもいいよね？

なのはお姉ちゃんたちからは、フェイトと仲良くすると、殺気の籠った視線を浴びせられ。

その逆の同じ。

誰とも、会いたくない今日このごろ。

そんなことを考えながら、ボーとしていたので、すっかり今日が、なのはお姉ちゃんとフェイトが再戦する日だったんだー！

魔力を感知するまで、すっかり忘れてたよ。

急いで、行かないと!!

闇の書のページを使わせないのもあるけど、あんな不安定なカード
リッジシステムをなのはお姉ちゃんとフェイトに使わせられないよ
!!

え？

なんで、不安定か知ってるかって？

そんなの

ハッキング

【INヴィータ】

いつも通り、闇の書のページを収集していると、魔導師に囲まれた。

「クッ!!」

「管理局だ。」

一緒に来ているザフィーラがそう呟く。

「ああ、でも、こいつら、たいしたことないよ。」

今日は、はやてのお友達が家に遊びに来るから、皆で一緒にご飯食べようねって約束したのに!!

こんな奴らの相手してたら、時間がもったいねえ!!

すると、急に上から、大きな魔力反応が。

「ステインガーブレイド・エクスキュージョンシフト!!」

大量の剣の形をした魔力弾が襲いかかって来る。

「上だ!!」

私よりも、早く気がついた、ザフィーラが一步前に出て、私を庇ってくれる。

ザフィーラを数十本の剣の魔力弾が襲う。

「チッ。」

「ザフィーラ!?!」

しかし、ザフィーラの障壁を破ったのはたった三本だった。

「大丈夫だ、この程度では、倒れない。」

「上等!!」

さすがは、私たちの守りの要、楯の守護獣だぜ!!

「今度はこっちの番だ!!」

反撃の始まりだ!!

っと思った瞬間だった。

この前、魔力を奪った白い魔導師と、シグナムと戦った、金髪が現れた。

そして、その手に持っていたのは

「あいつらのデバイスまさか!？」

あれは、まるで、カートリッジシステムを積んだデバイスのようにだ。

「私たちは、あなたたちと戦いに来た訳ではありません。」

「なんで、闇の書を完成させようとしているか、教えて!!」

っけ!!

偉そうにだから、

「あのさ、ベルカのことわざにこんなものがあるんだよ！！和平の使者は槍を持たない！！」

って言っただけだ！！

あいつら、キョトンとしてやがる。

バカだな！！

「話し合いをしようって奴は武器を持ってこないってことだよ、バカ！！」

「はう！！この間、有無を言わず、襲って来たのはそっちじゃない！！！！」

あの白いのが吠える。

まあ、バカだから、仕方ないか。

私は大人だから、見逃してやるわ。

「それに、それは、小話のオチだしな。」

ザフィーラが余計なことを言う。

「うっせ、いいんだよ、細かいことは――！」

「ドゴーン」

突然、結界に亀裂がはしって、炎を身にまとったシグナムが現れた。

「やるぞ。」

シグナムが静かにそう呟く。

「私はいつでも、いいぜ――！」

その時だった。

シグナムが無理矢理、力技で入って来た時とは、違い、綺麗に音もなく、結界が崩れた。

「シャマルか!？」

私は、咄嗟にシグナムに聞いてみる。

しかし、シグナムも驚愕している所を見ると、シャマルでも、シグナムでもないみたいだ。

じゃあ、いったい誰が？

まさか、管理局の連中であるはずがないし。

仮にそうでも、これだけの結界を音もなく、消し去れるなんて。

どんだけ、すごい奴なんだよ!!

しばらくして、私たちの元に降りて来たのは、忘れもしない。

白いのをやった時に、私に襲って来た、仮面の男だった。

「おまえらは退け。」

そして、静かに、そう言いきった。

まさか、こいつが？

「何をしている？早く、逃げろ？それとも、ここで捕まるのか？」

「シグナム、どうする？」

「あ、ああ。」

シグナムでも、決断ができないみたいだ。

なんだよー！！

こいつに、この前、攻撃されたの忘れたのか？

「何を言っただよ！！二人共、あいつは敵だ！！信用するなよ！！」

私がそう言つと、仮面の男は、

「そんなことを言っている時間はないんじゃないのか？主と約束があるんだろっ？」

と言つて来た。

まさか、こいつ、はやてのことを！？

ザフィーラとシグナムも驚いてる。

こいつはいったい誰なんだ！？

「いいから、ここは、俺に任せろ。」

仕方ない、背に腹は代えられない。

はやてのことが第一だ。

ザフィーラとシグナムも同じ意見だったようで、私と同時に転移魔法を発動した。

「……礼は言わないぞ!!」

「分かっている。」

そして、私たちは、はやての元に転移した。

【END】

【IN奏】

僕が、皆の元に辿り着いた時、もう、戦いが始まる、一歩手前だった。

良かった。

間に合った。

ここで、なのはお姉ちゃんと守護騎士が戦えば、確か、はやてとすずかのお食事がなくなってしまうんだっと思ったと思う。

二人共、友達だ。

悲しい思いはさせたくない。

「MOP発動。結界解析……完了。破壊プログラム起動……完了。」

その瞬間結界が音もなく、消え去った。

はあ、MOPって、便利だけど、魔力の消費量が半端ないんだよね。

だいたい起動でエクスカリバーの真名解放、一回分くらい。

それで、一分ごとくらいに、また一発分くらいが消費されていく。

正直、エクスカリバーで破った方が、魔力の消費は少ないけど、一歩間違えてたら、皆に、怪我を負わせてしまいかもしれないからね。

そして、皆の元に、降り立つ。

「おまえらは退け。」

この口調は慣れないんだけど、仕方ない。

最初にこういうキャラっていう認識を皆にされてしまったから。

それにしても、なんで、シグナムたち、何も反応しないんだ？

「何をしている？早く、逃げろ？それとも、ここで捕まるのか？」

「シグナム、どうする？」

ザフィーラがシグナムに相談する。

僕って信用ないのかな？

まあ、前回あった時は、敵だったからね。

「何を言ってるんだよ！！二人共、あいつは敵だ！！信用するなよ！！」

ヴィータにはとことん嫌われたみたい。

だから、仕方ないので、切り札を使う。

「そんなことを言っている時間はないんじゃないのか？主と約束があるんだろう？」

これは効果抜群だったようで、渋々、転移魔法陣を展開させる。

「何をやっているんだ、君は！？」

KY君が案の定、抗議してくる。

まあ、仕方ないかな、今回は。

なのはお姉ちゃんとフェイト、アルフ、ユーノも納得してなさそう
だもん。

「逃がすか!?!」

シグナムに攻撃しようとする。

させないよ。

「
聖剣解放

エクスカリバー
」

なにも、新しい剣を見せる必要はない。

光の中から、エクスカリバーを取り出す。

そして、クロノの前に立つ。

「なんで君は邪魔をする！！君は味方ではないのか！？」

もっともな疑問だと思つ。

「私たちも聞きたいです。」

なのはお姉ちゃんもそう言つ。

他の三人も目がそう言っていた。

「答えない。」

「なぜだ！？」

「簡単だ。今回は君たちよりも、向こうにつくべきだと思ったからだ。」

嘘は言っていない。

「何か知っているんだな？なら、君を逮捕してから聞くことにする。」

そう言って、僕にデバイスを向ける。

・・・仕方ない。

戦うか。

【END】

第三十五話 お姉ちゃんとの初めて (前書き)

今回も短いです。

第三十五話　お姉ちゃんとの初めて

まさか、このメンバーと戦うことになるなんて。

逃げてもいいんだけど。

・・・絶対、なのはお姉ちゃんは、逃がしてくれない。

「仕方ない。少し相手をしてあげよう。ただし、命をかける覚悟で来てくれよ?」

そう言って、殺気をぶつける。

これで退いて・・・くれませんよね。

「分かった。あなたが誰かも含めて、一回、O H A N A S I
したかったの。」

なのはお姉ちゃん、字が違うよ!!

殺気ぶつけた、僕も悪かったけど・・・。

「ステインガーブレード!!」

クロノが剣の形をした魔力弾を僕に向かって発射、考えたら、この人数を相手に手加減して勝つのは難しい?

・・・でも、なのはお姉ちゃんやフェイトに怪我はさせられないし。

なんかいい聖剣あったかな?

っとそうこうしている内に魔力弾が僕の目の前で。

「ジャストオブウィンド!!」

風ので薙ぎ払う。

「デイバインバスター!!」

次は、なのはお姉ちゃんのデイバインバスター!?

それをぎりぎりです、避ける。

「な！？バインド！？」

そこには固定型のバインドが！？

「くっそ！！」

それを無理矢理、引きちぎる。

しかし、

「甘いよ！！」

アルフの拳が僕のお腹に直撃する。

そのまま、フェンスに叩きつけられる。

・・・確かまだ、フェイトが魔法を出していない気が。

「はあああ!!」

雷の鎌で斬りかかってくる。

って、それはまずい!!

いくら、僕でも、あれの直撃は、当たれば、戦闘不能になる。

「アクセルシューター!!」

さらに、なのはお姉ちゃんの魔力弾が!?

ホントに容赦ない!?

ここは、仕方ない。

まあ、見せても問題ないだろう。

僕は、エクスカリバーを消し、新たな、聖剣を呼びだす。

魔力弾までの距離、十五メートル。

「
聖剣解放

あまのむすぶせのつるぎ
天叢雲剣

」

魔力弾を薙ぎ払うと再度、天叢雲剣に命令する。

「喰らえ!!」

「「「「なに!?!」」」」

全員が驚きの声をあげる。

天叢雲剣、別名、くさなぎのつるぎ草薙剣、やえがきのつるぎ八重垣剣。

三種の神器の一つで、太古の昔、スサノヲが出雲国でヤマタノオロチを倒した時に尾からでてきたとされる太刀で。

僕が、この聖剣を扱った時の能力は奪うこと。

つまり、相手の魔力を奪いとる。

しかも、さすがは有名な神話に出てくるだけあって、その力は凄まじい。

未だに、完全に制御できていない剣の一振りだ。

エクスカリバーもきちんと扱えているか分からないけど……。

「さあ、これで、形勢逆転だ。そうそう、他の魔力値の弱い魔導師は呼ばないでくれ。魔力を吸い終わったら、生命力を奪ってしまうからな。」

これが唯一の欠点。

普通の市街地で使えば、数百人の人間の命を簡単に奪い取る。

……たぶん。

僕が未熟なだけかもだけど。

だから、よっぽどの時しか使わない。

切り札の一つ。

「くっそ！！なんて力だ、まるで、魔力が集まらない。それどころか、外の放出してしまう。君はいつたいどんな能力を使ったんだ！？」

「答える義務はない。それと、君たちの拠点に明日の午後五時に行くから。」

「な！？僕たちの拠点を知っているのか！？」

「・・・めっちゃ、お呼ばれましたけど。」

「それは企業秘密だ。」

「何しに来るんだ！？」

なんか、ただ、疑問を強く言われてるだけのような……。

「まあ、明日、行った時に話をする。あのリンディさんにも、久方ぶりに会いたいしな。」

「か、母さんに何の用だ!？」

もう、なんか、いいや。

「では、また、明日。」

なんか、このやり取り、前にもしたような……。

第三十五話 お姉ちゃんとの初めて (後書き)

【INアテネの教えて、神様!!】

「今日は、またまた、アリシアちゃんに来てもらったわ」

「皆のアイドル、アリシアです!!」

「そのキャッチフレーズいいわね これから、私も使おうかしら」

「え〜〜、アリシアが考えたのに!!」

「そういうのは、皆で共有すべきよ そんなことより、お便りコーナーに行くわよ」

「む〜〜、けど、仕方ない、コーナー始めないと、奏がシュークリーム持って来てくれないから、頑張る!!」

「アリシアちゃんは、奏とシュークリームが大好きなのね」

「うん!!」

この子、ここまで、素直って・・・危ない人に誘拐されないように、プレシアと梨桜に言っておかないと。

「じゃあ、お便りをお願い。」

「はい、では、ペンネーム、出番がもう、完全になくなってるユニゾンデバイスさん、私の出番はなくなってしまっていますが、本

編を呼んでいて、気づいたことがあります。奏の聖剣解放で創りだした、天叢雲剣の能力って、カンピオーネ！の天叢雲剣と同じような能力ですが、関係ありますか？だって！！」

「まあまあ、作者から、返事をもらっています」

「もう、梨桜の出番のことにはふれないんだ！！私も少ないから、なんとも言えないけどね！！」

「ではでは、皆さん、いつも、読んでくれてありがとうございます。実は、私は、カンピオーネ！の大ファンです！！全巻買ってます！！もう、ほんと面白いノベルです！！だから、どんな形でもいいので、カンピオーネ！の要素を入れたかったんです！！」

「うーん、嘘を言わないのはいいけど、いいのかな？」

「ノーコメントです」

【END】

第三十六話、デバイス強化

次の日、いつも通りに学校に行つて、帰つて来て、遊びに行つてく
るつて皆に伝えて、フェイトの家に向かった。

もちろん、仮面をつけた状態で。

そして、インターフォンを押す。

すると

「はあゝい。」

上機嫌のリンディさんが出て来た。

「ど、どうしたんだ!？」

あまりのテンションに、僕は慌ててしまった。

「だって、たぶん、ナイトくんのことだから、あ・ま・い物、持って来てくれたんでしょ？」

・・・今回は忘れました。

とは言えず。

翠屋まで、走りました。

自分の家にケーキ買いに行くのって、こんなに虚しいんだね。

そして、場所は変わって、リンディさんの家のリビング。

ちなみに、メンバーは、リンディさん、エイミー、なのはお姉ちゃん、フェイト、アルフ、ユーノだけだった。

なんで、クロノがないのかな？

まあ、いつか。

「それで、いきなり本題に入るのだが、レイジングハートとバルデ

「イッシュを見せてくれないか？」

二人は、その言葉が意外だったのか、キョトンとしてしまっている。

ん？

「なんか僕、変なこと言ったかな？」

リンディさんが、ニコニコ（目は笑っていない）して僕の方を見て、こう言った。

「闇の書のことについて教えてくれないの？」

あ、そっか、闇の書のことを話すと思ったのかな。

「ああ、まだ、話すべきじゃない。時が来たら、話す。」

「今、私たちは知りたいの。」

「それなら、俺はもう帰る。せっかくカートリッジシステムを安定させてやるうと思ったんだが。」

「『『『『え!?!』』』』」

なのはお姉ちゃんとフェイトの負担を減らすために、PT事件が終わった後に、毎日、研究してたから、完璧だ。

ちなみにMOPを使って。

あの、なのはお姉ちゃんが墮ちるフラグはなんとしても、回避したい。

これでも、弟だから。

「そんなこと可能な!?!」

エイミイが今日、始めて口を開いた。

「ああ、それに、聖王協会あたりは、その技術をもつ、持っているんじゃないのか?」

聖王協会のパソコンにもハッキングしました

「・・・管理局と聖王協会は。」

ああ、やっぱり情報通り、仲が悪いのか。

確か、仲を取り持ったのがカリム・グラシエじゃなかつたかな。

原作では。

「そうか、分かった。なら、俺の情報はさらに貴重じゃないのか？」

「・・・はい。」

難しい顔をするリンディさん。

「じゃあ、構わないだろ？後、エイミィ。」

「え、はい！？」

名前を呼ばれたのがそんなに以外だったのかな？

滅茶苦茶、驚いてる。

「おまえがメンテをするんだろ？やり方を教えてやる。これで、管理局のデバイスは飛躍的に進化する。」

「ありがと~~~~~!!マリーにこのこと言ったら、きっと羨ましがるよ!!!」

このやりとりを聞いても、リンディさんは難しい顔をしたままだった。

「それで、条件は？」

さすがかな？

無償にするつもりだったんだけど、このパターンは何かしてもらえるかな？

さすがに偉い人を交渉しすぎて、交渉術がある程度身についたから。

好機は逃さない。

「一つだけ、お願いがある。」

「あら、お願いなのね？」

「ああ。」

「それで、そのお願いというのは？」

「闇の書の主をフェイトと同じように、あなた達が弁護してやって欲しい。」

「なぜかしら？」

「それは、さっきも言ったがまだ言うべきではない。」

「そう、分かりました。それくらいなら構わないわ。」

「よし、交渉成立だ。」

それから、エイミーに指示をしながら、デバイスを完成させた。

「それでは、俺はこれで。」

「待て!!！」

ここでKY君が登場。

「そつだ。なのは、フェイト、絶対無理はするなよ。」

無視

「あ、はい。」「できる限り、頑張ります。」

「後、フェイト、君は君だ、他の誰でもない、アリシアの妹だ。それだけは間違えないでくれ。」

これだけは、言うておかないと。

「え？それって、どうい

そう言っつて、僕は、転移魔法を使っつて離脱した。

「な！？なんで封術結界を張っているはずなのに！？」

つてクロノが叫んだけど、無視して帰る事にした。

ちなみに、封術結界を張るために、今まで、外で頑張っていたらしい。

【インシャマル】

あの後、つまり、ナイト君のおかげで、はやてちゃんとの約束の時間にギリギリ家に全員、帰る事ができた。

「ザフィーラはフカフカだね」

今は、晩御飯も食べ終わり、皆でテレビを見ています。

ザフィーラはすすかちゃんに、抱きしめられて恥ずかしそうにしています。

ちなみに、ヴィータちゃんも、初めはすすかちゃんに緊張していたものの、今ではすっかり、気を許しちゃってます。

でも、もし・・・私たちが管理局の襲撃で、帰れなかったら・・・。

本当にナイト君には、感謝してもしきれません。

「そういえば、今日は皆どこに行くとたんや？」

「「「「！？」」「」」」

いつもなら、どこに行っていたか聞かないはやてちゃんが、今日、始めて私たちがどこに行っていたか尋ねてきました。

皆、平静を装っていますが、あきらかに動揺しています。

「あ、皆が答えづらかったら、答えんでもいいよ。」

はやてちゃん、もし、それで、私たちが答えなかったら、余計に怪しいんじゃないか……。

「わ、わたしは、いつもの通り、ザフィーラを連れて、散歩に行つたついでに、おばあちゃんの家にお邪魔してたよ、はやて。」

「そつか、ヴィータは町内のお年寄りの人気者やもんな。」

「うん、皆、私にゲートボールのやり方とか教えてくれる良い人だよ。」

ヴィータちゃん、私、おばあちゃんの家に行くたびに、お菓子を相応な量もらっているの知ってるわよ……。

たぶん、始めの方は、お菓子目的だったでしょ？

「私は、近くの道場に子供たちを教えに行っていました。」

「シグナムさん、剣道できるんですか？すごいですね。」

「すずかちゃん、シグナムが剣術やってるの知らないんだっけ？」

「はい、正確には剣道ではなく、剣術ですが……。」

「シグナムはめっちゃ強いんだよ。」

「そうなんだ、はやてちゃん。もし、何かあったら、シグナムさんに相談するね。」

「ええ、ある……はやての友達を守るのも、私の務めです。何かあったら、気軽にお声をかけてください。」

「ありがとうございます。」

「そこで、私は、気づいた。」

「……私、何も言いわけがない。」

考えてみたら、主婦の人達がそんな遅い時間まで、お喋りするはず
ないし……。。

どうしよう!？

聞かれたら、何も言えない!？

「そう言えば、シャマルは?」

はやてちゃんが、キラキラした目で私を!？

やめて、私をそんな目で見ないで!!

シャマル、落ち着け、適当に言いわけして、この場は凌げ!!

シグナム、さすがは、私たちの将、こんな時、頼りに……。適当に
が問題なのよ!!

大丈夫だ、適当に言っても、シャマルのことなんて、たいして興
味ないよ。

ヴィータちゃん、それはそれで、悲しいわ!!

混乱した私は、言うてはいけない一言を言うてしまった。

「お、男のひつ人と会ってたの!!」

「『『『『』』』』」

うん、うん、うん、この前、ナイト君と会っていたから、嘘は言うていないよね!!

「シャ、シャマル、いつの間に!?!それは、おめでたいやないか、なんで言うてくれへんかったんや、そんなんやったら、家を開けてもいいんやで!!」

はやてちゃんが、さらにキラキラした目で、私にすり寄って来た。

「ど、どんな人なんですか!?!」

すずかちゃんもキラキラした目で私に近寄って来る。

「え、えっと、（仮面が）ミステリアスな感じで、（はやてちゃんを助けてくれるから）優しく、頼りがいのある人かな。」

あれ？

私、なんで、ナイト君のことを言っているんだろう？

「ええ人じゃないか、今度家に連れてきてや。」

さらにキラキラした目で、はやてちゃんが、寄ってくる。

・・・ナイト君との接触は内緒な訳だから、ダメなんだけど。

「はい、また機会があれば。」

ん？

なんで、私、ナイト君のこと言っただろう？

【END】

第三十七話　久しぶりの日常

「か〜な〜で〜、お昼だよ！！御飯、一緒に食べよう！！」

なのはお姉ちゃんが、昼休みになった途端、僕の所にやって来た。

そして、案の定、すずか、アリサ、フェイトも、なのはお姉ちゃんの後ろから、誘いに来るが、

「今日は久しぶりに、姉弟、二人きりなの！！」

なのはお姉ちゃんが珍しく、わがママを言いだした。

「何言ってるの？なのはちゃん、奏くんは皆の共有物だよ」

すずか、顔は笑ってるけど、目は笑ってないぞ！！

「そつだよ、なのは、私も、なのはと奏と一緒にご飯食べたいよ。」

上目づかいで、フェイトも言ってくる。

・・・破壊力抜群！？

「ううー、いくら、フェイトちゃんの頼みでも、これだけは、ダメなのー!!」

「奏、この頃、家でなのはに構ってないでしょ?」

アリサが小声で僕に行ってくる。

・・・確かに、この頃、アテネの所とか、梨桜とアリシアとプレシアさんの所に長い間行っていて、なのはお姉ちゃんの相手してなかったような。

「はあ、また、なのはの発作が出たのね。」

「奏は私のモノなのー!!」

いつの間にか、なのはお姉ちゃんは、すずかとフェイトに血迷ったことを言っている。

って、僕は誰のモノでもないよ!!

「わ、私も、奏のことは好きだよ!!」

「フェイト!?!」

まさか、フェイトまで、血迷ったことを言いだす。

「・・・まさか、フェイトまでとはね、競争率は高いわね、私も頑張らないと。」

アリスが小声で何か言ってるけど、聞こえない!!

誰か、この状態から、助けて!?

「奏は私の弟なの、だから、奏と結婚するのは私なの!!」

「わ、私だって、奏には良くしてもらってるし、それに、奏のことは一目惚れだったんだよ!!」

「二人とも、頭をH I Y A S O Uかあ」

フェイト、ホントなの！？後、すずか、なんか、怖い！！

「皆、皆で一緒に仲良く食べようよ！！」

すると、なのはお姉ちゃんがおもむろに近づいて来て、

「今日、一緒に寝てくれるならいいよ」

と言った。

な！？

僕は、お父さんとお兄ちゃんに殺される！？

でも、このままだと、お昼御飯が食べれない……。

「……分かったよ。」

「OKなの」

そして、皆でお昼ご飯を仲良く？食べ始めました。

「そういえば、フェイトって、携帯持ってないよね。」

「うん、アリサ、私はまだ、日本に来て間もないから……。」

「それなら、今日買いに行かない？」

「え？」

「アリサ、フェイトの家にも事情があるんだから、そんな強制したら、ダメだよ。」

僕はそう言って、アリサをたしなめる。

「そ、そんな、強制なんてしてないわよ。」

アリサが心外とばかりに頬を膨らませて、反論してくる。

「でも、私も、あった方がいいと思うよ、色々と便利だし。」

すずかまでが携帯を購入することに賛成らしい。

この頃は、小学三年生で携帯持つのが普通なのか？

「分かった、リンディさんに相談してみる。」

フェイトが何か、決心したような顔をしながら、そう答えた。

・・・フェイト、戦いに行くんじゃないんだから、そんなに、真剣な顔はしなくていいと思うよ。

〈放課後〉

僕たちはフェイトの携帯を選びにデパートに来ていた。

・・・まさか、リンディさんが二つ返事でOKを出すとは。

「そういえば、奏君も、携帯を持っていないのよね。」

なぜか、リンディさんがそう言う。

僕、リンディさんとそんなに親しくないと思うんだけど・・・。

「そういえば、そうよね。何で、あんた持ってないのよ、なのはは持っているのに。」

「だって、そんなもの必要ないと思ったから。」

そんな小学三年生から、携帯なんて使う必要はない。

「私も、説得したんだけど、奏が、なかなかおれてくれなくて、夜遅くなると、危ないから、持った方がいいと思うんだけど。」

なのはお姉ちゃんが携帯を買う時に散々言われたけど、僕はNOを主張し続けた。

「それで、なんだけどね、桃子さんに頼まれて、奏君の携帯も一緒に買うようをお願いされたの。」

「な!?!」

母さん、なんてかってなことを!?!

「やった!?!これで、奏君に夜メールできるね。」

さすが飛び跳ねて喜ぶ。

・・・そんなに、メールが好きなんだろうか?

「それでね、奏君、もし断ったら、お仕置き部屋行きらしいわよ。」

リンディさんが良く分からないといった口調で言う。

「・・・買わせていただきます。」

あの部屋にだけは二度と入りたくない。

あの部屋だけは……。

それから、機種を選ぶのがたいへんだった。

「これにしたら？」

「え〜アリサちゃん、奏君にはこっちだよ。」

「すすかちゃん、これなんてどう？」

「あ、それ、奏にイメージに合う。」

フェイトまで、俺の機種選びに夢中になっている。

それから、三十分経っても決まらなかったため、僕自身が結局選んだ。

しかし、なぜか、それで、フェイトの顔が真っ赤になった。

「か、奏／＼／」

「どうしたの、フェイト？」

「そ、その機種ね／＼／。」

「うん。」

どうしたんだろう？

「わ、私とお揃い／＼／」

「え？」

良く見ると、僕の持っている黒の携帯は、フェイトの持っている携帯はまったく同じものだ。

「奏はお姉ちゃんの選んだのより、フェイトちゃんとお揃いがいいんだ。」

「べ、別にあんたとフェイトが同じ携帯でも、私は気にしないんだ

から!!」

「家に帰ったら、あの機種に変えよう。」

三人の視線が痛い。

かと言って、きつとここで機種を変えたら、『奏は私と同じ機種は嫌なんだ。』ってフェイトに泣かれるだろうな。

・・・どうしたらいいの？

第三十八話、本当は介入したかったんだよ（前書き）

今回は、少し短いです。

すみません。

第三十八話　本当は介入したかったんだよ

あれから、ついにフェイトも、魔力を闇の書に喰われてしまった。

あの時、僕はまったくの無干渉だった。

決して、この頃、帰りが遅いからって、お母さんにお仕置き部……
なんでも、ないです。

だから、お母さん、お仕置き部屋の道具を持つのはやめてください。

ホントに、アテネと梨桜の修行より、怖いですから。

世界最強の人間はお母さんなんじゃないかと思う今日この頃。

本当は僕も、介入して、皆の負担を減らしたかったんだよ!!

デバイスは、安定しているから、負担は少ないと思うけど……。

っと、終わってしまったのをいくら嘆いても仕方ないので、今の状況を説明します。

「はあああああー!!」

アスカロンを片手に竜種を狩っています。

ヴォルケンリッターは今、はやてが倒れたため、全員、病院に行っている。

ちなみに、シャマルに頼んだら、特に何もなく、貸してくれた。

時間がないから、闇の書のページ収集に僕も参加している。

アスカロンの力を使えば、亜種は、楽勝だからね。

・・・でも、はやて、大丈夫かな？

僕に、治療系の魔法が使えたら、良いんだけど、今は、戦闘用の魔法の習得が限界。

治療系魔法は戦闘用より難しから。

プレシアさんを治した、クリエイターの力は、そんなホイホイ使っていないものじゃないから。

痛みの、軽減のためだけには使えない。

もし、今度、安易に使おうとしたら、アテネが僕を、ボコボコに出来るらしい。

・・・さすがは、神様が、未だに、模擬戦で、かすり傷、一つ、つけたことがない。

「ふう。」

やっと、三十六匹目を倒した。

たった、これだけ狩るのに、一時間近くかかってしまった。

そこに、転移魔法陣が展開される。

・・・管理局にばれた？

そんなはずはないと思うんだけどな。

アリアかロツテが搜索妨害してくれていると思うんだけど。

しかし、展開された魔法陣を良く見ると、ミッド式ではなく、ベル
方式だった。

「お疲れ様、ナイト君。」

現れたのはシャマルだった。

「・・・なんだ、おまえか。」

無駄に警戒して、アスカロン構えちゃったよ。

「なんだとは、なんですか！？私は一人ではたいへんだと思って、
差し入れを持って来てあげたのに！！」

顔を真っ赤にして、文句を言ってくる、シャマル。

「・・・そうか、ありがとう、しかし、俺は言うほど、働いていないぞ。」

「え!?! そうなんですか? どれくらいですか?」

「竜種を三十六匹。」

「え!?!」

やっぱり、少なかったかな。

でも、竜種って探すのもなかなか、大変なんだよ。

管理外世界の無人惑星で。

「すごいじゃないですか!?! シグナムの一日の収集量と同じじゃないんですか!?!」

「そうなのか?」

「はい、どれだけ、強いんですか!？」

そうなのかな？

いまいち、強さの基準が分からないけど……。

「そんなことより、主はどうだった？」

途端に表情が険しいものへと変わってしまった。

「……はやてちゃんの麻痺は心臓にかなり、近づいて来ています。」

「……やはり、そうか、時間がないな。」

「はい。」

その日、俺は、遅くまで、闇の書の収集を行った。

はやてを救うため、闇の書の悲劇を起こさないために。

・・・その日、十時に家に帰った僕は、なのはお姉ちゃんとお母さんに有無を言わずに、お置き部屋に連行されました。

一週間の内に二回もお置き部屋に行かないといけないなんて・・・僕は、この世の地獄をみました。

第三十九話 裏切り

【INなのは】

クリスマスイブ、それは翠屋にとっては重要なイベントの一つです。

クリスマスイブは深夜の遅くまで、店を開けているため、お父さん、お母さん、お姉ちゃん、お姉ちゃんは大忙しです。

そして、終業式が終わった後に、入院してしまった、はやてちゃんのお見舞いに行こうということになりました。

サプライズでプレゼントを渡そうってことになりました。

本当は、奏と一緒に行きたかったんだけど。

お母さんが・・・『この頃、奏は、家族を蔑ろにしすぎよ、今日は、七時まで、店を手伝いなさい。』と命令してしまったのです。

・・・ホントはもっと奏と一緒にいたいんだけどな。

そして、今、私たちはプレゼントを買って、はやてちゃんの病室を目指しています。

奏といられないのは残念だけど、はやてちゃんに会うのは楽しみ

病室に入った私たちを待っていたのは、つらい現実でした。

「「「「え!?!」「」「」」

はやてちゃんの病室にいたのは、ヴィータちゃんたちでした。

「「「こんにちは。」」

「あれ?皆、今日はどうしたん?」

何も、知らない、すずかちゃん、アリサちゃんは、はやてちゃんに普通に挨拶して、普通にプレゼントを渡していました。

しかし、その横で、私とフェイトちゃんを無言で睨む、ヴィータ

やん。

……どうしようっ……

横を見ると、フェイトちゃんも、どうしていいか分からないみたいでした。

はやてちゃんが……闇の書の主。

それから、何も、話せないまま、面会時間が終わってしまい。

帰路につく私たち。

しかし、やはり、そのまま、帰してくれるほど、ヴィータちゃんたちは甘くありませんでした。

私たちはとある、ビルの屋上に呼び出されました。

「……はやてちゃんが闇の書の主。」

「悲願は後、僅か叶う。」

「いくら、はやてちゃんのお友達でも。」

シグナムさん、シャマルさんも、私の言葉を聞いて、くれそつにありません。

でも、私は、勇気を振り絞って告げる。

「ダメなんです、闇の書は完成させたら、はやてちゃんは。」

その時、

「はああああー!!」

丸腰の私に向かって、ヴィータちゃんが襲いかかってきました。

それを私はなんとか障壁を張って防ぎますが、勢いは殺せず、フェンスまで、吹きと罰されてしまいました。

「なのは!?!」

「うおおおおー!!」

シグナムさんも、フェイトちゃんに対して、剣を振るう。

避けて!!

フェイトちゃん!!

それを、鮮やかな、移動で斬撃を避けるフェイトちゃん。

「邪魔すんなよ、後、少しなんだ、今まで頑張ってきたんだ、もう少しはやてが帰ってくるんだ、邪魔すんな!!」

一滴の涙を流しながら、私を攻撃してくるヴィータちゃん。

私はそれをバリアジャケットを展開させて防ぐ。

そして、ヴィータちゃんは私をすごい目つきで睨んで、

「悪魔め。」

そう言った。

・・・悪魔か。

ヴィータちゃんたちからしたら、本当に悪魔かもしれない。

「悪魔でも、いいよ。悪魔らしいやりかたで、話を聞いてもらうか
ら。」

「うるせえ!」

「くっ!?!」

ヴィータちゃんのハンマーは今までに感じたことがないくらい、重い打撃を繰り出してきました。

私は、その衝撃をなんとか、防いで、魔力弾を形成して、反撃に出る。

魔力弾を操作しながら、私は、ヴィータちゃんに語りかける。

「グイータちゃん、今の状態で完成させたら、ダメなの!!!あのままじゃあ、はやてちゃんは。」

しかし、

「うるせい!!!私たちは闇の書の一部だ。闇の書のことには私たちが一番よく知っているんだ!!!」

そう言って、聞いてくれない。

「じゃあ、なんで、闇の書のなんて呼ぶの!?!本当の名前を呼べばいいじゃない!!!」

「・・・ホントの名前?」

私が、さらに、魔力弾を撃とうとした時、私の体をバインダが縛った。

「バインド!?!」

また、あの時と同じだ!?

いったい、どこから!?

「そこだ!!!」

私にバインドを掛けた仮面の人を、フェイトちゃんが見つつけて、魔力弾を放つ、さらに、バルディツシュで斬ろうとした時、

「ふう!!!」

もう一人の仮面の男が出てきて、フェイトちゃんを蹴り飛ばし、この場にいた全ての人にバインドをかけた。

さらに、仮面の男の人たちは、ヴィータちゃん、シグナムさん、シヤマルさんのリンカーコアを闇の書に吸収させた。

そうすると、シグナムさんとシヤマルさんは消えてしまった。

「なんなんだよ!!!てめえらは!!!」

「知る必要はない。」

そう言って、ヴィータちゃんからもリンカーコアを抜き取るつもりだった時。

「うおおおおおー!」

ザフィーラさんが、仮面の男の人に殴りかかる。

しかし、その拳は、障壁によって簡単に防がれてしまう。

「そうか、もう一匹いたな。」

そう言って、ザフィーラさんのリンカーコアも奪ってしまふ。

もうやめてあげて!!

そう思った時だった。

私とフェイトちゃんは、もう一人の仮面の男の人によって、四重のバインドをどこかされて、クリスタルの中に閉じ込められた。

・・・私たちは、何もできなかった。

そして、二人の仮面の男の人は、集まって、私たちの姿に変身してしまいました。

いったい何を!?

「目覚めの時だ。」

「因縁の終焉の時。」

私たちの偽物の前に魔法陣が浮かび上がり、はやてちゃんが召喚される。

・・・まさか!?

そして、偽物の私たちは、はやてちゃんに酷いことを言い続ける。

そして、はやてちゃんは気づいてしまった。

始業式が終わった後、僕は、すぐに、翠屋に帰ってウエイトレスをしていた。

「ありがとうございました。」

もうかれこれ、三時間は、ウエイトレスをしている。

奏、原作に介入しなくていいんですか？

僕のポケットに入っている、梨桜が聞いてくる。

うん、グレアムさんとは、協定を結んでいるからね。闇の書を完成させる日は、二人で事前に話し合っただけで決めることになっているから、今日の悲劇は起きないよ。だから、シグナムたちと、なのはおねえちゃんたちの戦いが始まったくらいに様子を見に行くよ。

そこで、事態を収拾するのですね？

うん。

ちなみに、なんで、梨桜がいるかと言うと、年度内に闇の書を完成させるつもりなので、いったん、アリシアとプレシアさんの護衛をやまめて、こっちに来てもらっている。

さすがに、ユニゾンなしでは、リンフォースに勝てるか分からないから。

そんな話をしながら、ウエイトレスを続けていると、

奏!?

うん、これは、闇の書が覚醒した時に起きる、黒い魔力の柱!?

なんで、今日!?

僕は、お母さんに出かけると言って、すぐに、ビルに向かった。

↓ビルの屋上↓

そこに待っていたのは、

「また、全てが終わってしまった。いったい、いくたび、こんなことを繰り返せばいいのだ。」

覚醒したリンフォースの姿が！？

「グレアム！！裏切ったな！！」

僕は、あまりの怒りに、叫び声をあげてしまった。

まさか、裏切るなんて。

リンフォースは、涙を流しながら、

「主の願いのままに。」

まずい！！

リンフォースの頭上に大きな魔力の塊が形成される。

広域攻撃魔法、今の傷ついた、なのはお姉ちゃんとフェイトじゃあ、

あれをくらったら、ただじゃ済まない。

「デイボリックエミッション、闇に染まれ。」

瞬間、僕は、なのはお姉ちゃんとフェイトを抱えて、飛び去った。

まさか、原作の通りに覚醒してしまうとは。

【END】

第四十話 協定

【IN三十話の少し後】

「それで、君が、私に直接会って、話したいこととは何かね？」

僕の目の前にはギル・グレラムがいる。

ロツテとアリアの案内で、僕は今、管理局の談話室の一室にいる。

今回、始めて、仮面なしで、管理局の人間に接触する。

一応、この人は信用できる。

「本当は分かっているんじゃないですか？」

仮面がないから、無理にキャラを作る必要がない。

「どっぴうことだい？」

実は、まだ、アリアとロツテの区別ができないため、どっちが言ったか分からない。

「腹の探り合いはやめよう、俺の出す、条件は、闇の書を、デュラ
ンダルによる永久凍結以外で、闇の書の事件を解決してあげる。も
ちろん、八神はやても救ってあげる。」

「バカな！？そんなことは不可能だ。」

「できるよ、僕の希少能力を使えば。」

「あんたの希少能力って？」

「マスター・オブ・プログラム、全てのコンピュータを支配下にお
ける能力、もちろんデバイスも可能なんだ。」

「「「！？」」」

「だから、闇の書も改造できるよ。」

「・・・それで、君の目的は？八神はやてを救うことその他にあるだろっ?」

さすがは、提督、言わなくても、伝わっちゃったかな。

「三提督との対談の場所を設けてもらうこと、それが、僕が、闇の書を改変するにあたりの、条件です。あなたなら、簡単はずだ。」

「バカな!?三提督の三人共との対談だなんて、無理だよ。」

「いえ、提督なら、不可能な話しじゃないはずですよ。」

「・・・本当に可能なのかい?闇の書の改変など?」

そっか、そっちの方が気になるよね。

「可能ですよ、なんなら、今ここで、管理局のメインコンピュータにハッキングして、深度SSSランクの情報を開示しましょうか?」

「深度SSSランクだって!?そんなの三提督だって、観覧できないかもしれないのに!」

僕の言ったことの重大さが伝わったのか、信じてくれたみたいだ。

「分かった、その条件で、協力してもらおう。」

「お父様!？」

「いいんだ、これ以上悲劇が起きないなら、それに越したことはないよ。それで、私たちは当面、何をしていたらいいのかね？」

「あなた方の、計画の通りで構いません。その最後の仕上げのみを僕が担当する形にしますので。だから、完成させる時のみ、話し合いますよ。」

「分かった。それで、君の名前は？」

「奏、てんどうかなで天童奏です。」

僕は生前の名前を名乗ることにした。

【END】

第四十一話 決戦開始

今、僕たちはリンフォースの攻撃を避けて、ビルの陰に隠れています。

「ナイト君、助けてくれてありがとう。」「ありがとう、ナイト。」

なのはお姉ちゃんとフェイトが、お礼を言ってくれる。

「こちらこそ、すまない、グレアムの裏切りに気づけなかった。それで、対応が遅れてしまった。」

「グレアムって、グレアム提督のこと!?!」

フェイトが驚いている。

「ああ、あいつと俺は協定を結んでいたからな。しかし、あの状態では、闇の書の改変ができない。」

「どづいつことなんですか？」

「ああ、俺の希少能力、MOPで、闇の書を改変しようと思っただのだが、あれを使っている最中、俺は無防備になってしまう。簡単な魔法を乗っ取るくらいなら問題ないんだが、闇の書の改変となると・・・。」

さすがに、膨大な魔力を使うために、障壁などを使う余裕はない。

・・・ここは原作の通りに行こうか。

「なのは!?!」

「フェイト!?!」

そこで、ユーノとアルフが合流する。

ここも原作の通りか・・・それなら、今頃、クロノがアリアとロッセを捕まえているところだろう。

「「「「つ!?!」」」」

僕たちの町を覆ってしまうくらいの大サイズの捕獲用の結界が張られる。

「やっぱり、私たちが狙ってるんだ。」

「今、クロノが解決法を探してる。増援も向かっているんだけど……」

「うん、それまでは、私たちで。」

ん？

リンフォースが翼をはためかせて飛んでいる。

翼の名前は確か、スレイプニールだったかな？

「なら、おまえたちは逃げろ。いても邪魔なだけだ。」

「……え！？」「」「」

「だから、今から、俺が奴と全力で戦う。おまえたちがいては足手
まといだ。」

「私たちも、はやてちゃんを助けるために戦いたいです!!」

・・・なのはお姉ちゃん。

「・・・もし、どうしてもと言うのなら、このくらい離れた所から
の下方支援だけだ。絶対にクロスレンジに入るなよ。」

「はい!!」

・・・僕も、なのはお姉ちゃんに甘いよね。

「梨桜!!」

「はい。」

そこで、後ろに待機させていた梨桜を呼ぶ。

「ユニゾンだ、手を抜いて勝てるほど甘い相手じゃない。」

「了解しました。」

「え？え？ナイト、この人、誰？」

フェイトが混乱している。

「ああ、俺のユニゾンデバイスの梨桜だ。」

「梨桜です、以後お見知りおきを。」

「」「」「あ、こちらこそ。」「」「」

皆、なんか緊急事態なのに、緊張感がないよ。

「行くぞー!!」

「」「ユニゾンイン!!」

梨桜とユニゾンしたことによって、髪の色が金色に変わる。

後、目の色も変わるんだけど、仮面をつけているから、分からない。

さらに、僕の切り札の一つ。

「
聖剣解放

デュランダル
」

フランスのローランの歌に登場する、英雄ローランが使ったとされる、不滅の刃。

天使からシャルル王に渡すように授けられ、その後ローランに授けられた、ロングソード、基本は馬上で使う剣、地上では、両手だが。

黄金の絵の中には、聖ピエールの歯、聖バジルの地、守護聖人である、聖ドニの毛髪、聖母マリアの衣服の一部と多くの聖遺物が納められている、

神聖な剣。

能力は不滅の刃、すなわち、常に、刀身の周りに魔力を纏っていて、斬撃を放てば、エクスカリバーの光の魔力変換のように、魔力を放つことができる。

しかし、これにも、欠点があつて、あまりに強力すぎるために、魔力の消費量がとんでもない。

今の僕では、維持するのが限界で、その能力を使つてしまつたら、それと同時に魔力不足で、刃が砕けてしまう。

梨桜とユニゾンしている分、多少はマシだけど。

まさに、もろ刃の剣。

これで、準備完了。

僕は、リンフォースの前に出る。

「貴様は？」

「おまえを止めるものだ。」

「そうか・・・主の願いの妨げになる、物は排除する。」

やっぱり、こうなるよね。

ちょっとは、戦わずに済むかなとも思ったんだけど。

「はああああ!!--!」

僕はリンフォースに縮地で近づきデュランダルで斬りつける。

「楯。」

リンフォースの前に楯が現れる。

ん？

この能力って、僕のクリエータの能力に似てるような・・・。

まあ、考えるのは後まわし。

僕のデュランダルとリンフォースの楯が接触した瞬間。

楯は、何事もなかったかのように、斬り裂かれた。

デュランダルの切れ味はエクスカリバーの五倍以上、楯では防げない！！

しかし、半ば、予想していたのか、背中ของグレイプニルを操作して、僕の斬撃から逃れる。

ここで不滅の刃を使えば、終了なんだけど・・・こんなところで切り札は使えない。

でも、大丈夫、たぶん、避けた先には、

「ダイバインバスター！！」

なのはお姉ちゃんの砲撃が待っている。

「くっ！？」

さすがに、連続して楯を張る余裕はなかったのか、ギリギリのところ、砲撃を避ける。

追撃を……。

「放てブラッティダガー。」

何事もないように、淡々とダガー型の魔力弾を僕に放って来る。

それを僕は、ギリギリのところ、障壁を張って、防ぐ。

デュランダルは、細かい物を着るのには、適していない。

防御力の高い、硬い物を斬るのに適している。

さらに、ダガーの魔力弾を次々と形勢して、僕に放ってくる。

……これは時間稼ぎ？

「滅びの光を。」

ピンク色の魔力の塊が集まる。

「星よ、集え、全てを貫く光となれ。」

な！？

まさか、お姉ちゃんのスターライトブレイカー！？

あれは、長距離でも、近距離でも関係ない。

「貫け閃光。」

奏、あの砲撃は、なのはちゃんたちを狙っています！！

分かってるよ、梨桜、それに、お姉ちゃんたちも気づいて、この場から、逃げだしているよ。かなり距離が離ればなんとかなるよ。

僕は、ダガーを防ぎながら。

梨桜に答える。

な！？なのはちゃんたちが逃げた方向に、民間人の気配が・・・
アリサちゃんとすずかちゃんです！！

・・・忘れてた二人共、巻き込まれるんだった。

二人を守りながらじゃ、なのはお姉ちゃんに負担がかかる。

ここは。

僕は、障壁を解いて、数発のダガーを受けながらも、お姉ちゃんたちの所に向かった。

この時、僕は、自分の仮面にヒビが、はいつたことに気がつかなかった。

第四十二話 仮面の奥に (前書き)

活動報告に書いていた、体調不良の時に書いたものですので、かなり短いです。

そして、お知らせがあります。

〈50万PVを超えました!〉

ありがとうございます、ありがとうございます!!

皆さんのおかげで、魔法少女リリカルなのは 奏でる世界 が、50万PVを超えました。

これも、応援してくださっている皆様のおかげです!!

それと、魔法少女リリカルなのは 様ほどのビッグタイトルのおかげもあると思うのですが。

本当にありがとうございます。

と、前置きはここまでにして、このたび、50万PVを超えたことを記念して、番外編を書こうと思います。

それで、その番外編のリクエストがありましたら、ドシドシ、感想 (活動報告のコメントのどちらに、書いていただいても、かまいません) の方にリクエストをお書きください。

例えば、奏は、なんで、ウエイトレスを普通にやるようになったの？

アリシアとプレシアさんと梨桜の日常って？などなど。

前に鏡花水月さんからのリクエストがあった、奏VSシグナムもやります！！

あ、ただですね。

今後のネタばれになる話はできません。

それで、受付期間なのですが、奏でる世界のA、S編の完結までとなります。

だいたい、9月10日くらいですかね。

ただ、他の二作品などとの兼ね合いもありますので、リクエストが多い場合、先着となりますのでご了承ください。

第四十二話 仮面の奥に

【INなのは】

「まさか、あれは!?!」

アルフさんが驚きの声を漏らす。

「スターライトブレイカー?」

私の切り札の魔法を今、使われようとしているのです。

「アルフ、ユーノ。」

「うん。」

フェイトちゃんが二人に逃げるように、促します。

「フェイトちゃん、ナイト君が!?!」

未だに、ダガーの攻撃を受けて、ナイト君は動けない状態になっています。

「大丈夫、ナイトは、砲撃の狙いは私たちだから、ナイトには当たらないよ。・・・それに、ナイトなら、なんとかかなると思う。」

・・・確かに、SSランクの魔力持つてるんだもんね。

私はフェイトちゃんに、ユーノ君はアルフさんに抱えられて逃げています。

「でも、なんで、私の魔法を・・・。」

「きつと、なのはのリンカーコアを吸収した時に、一緒に魔法もコピーしたんだよ。」

ユーノ君が教えてくれますが、なんと反則的な力なんでしょうか。

「フェイトちゃん、こんなに、離れなくても。」

「ダメだ、近距離なら、防御の上からでも、落とされる。回避距離をとらないと。」

回避距離をとっていると、フェイトちゃんのデバイスバルデッシュに反応があった。

民間の人が巻き込まれてしまっているみたい。

・・・そんな。

「なのは、この辺り。」

「うん。」

私たちは、民間の人を探し始めた。

すると、ビルの間隙から、二人の女の子が出て来た。

「あの、すみません、ここは危険ですから、そこでジッとしててください。」

「え?」

「今の声って？」

ん？

「なのは？」 「フェイトちゃん？」

その時、スターライトブレイカーが放たれた。

私たちは回避のために、障壁とバリアを同時に展開した。

・・・絶対に守る。

「レイジングハート。」

カートリッジを二本使う。

その時、

「無茶はするな。」

仮面にヒビが、はいつて、所々に傷がある、ナイト君が来てくれました。

「ナイト君!？」

「行くぞ。」

不滅の刃^{デュランダル}

「

魔力を覆った剣を片手でつき出しました。

瞬間、ナイト君の剣から、膨大な量の魔力が、まるで、砲撃のようにスターライトブレイカに向かっていきました。

「ドゴーン!!」

ぶつかった瞬間にスターライトブレイカは、ナイト君の砲撃?によって、消し去られていきます。」

なのは?大丈夫?

ユーノ君、ナイト君のおかげで大丈夫ではあるんだけど。

アリサとすずかが結界内に取り残されてるんだ。

フェイトちゃんが伝えてくれる。

なんだって、エイミイさんに逃げしてもらえるように、通信してみよう。

お願い!!

「はあはあはあ。」

肩で息をしている、ナイト君のおかげで、私たちは助かりました。

「なのはちゃん、フェイトちゃん。」「ねえ、ちょっと?」

二人が何かを言う前に……。

「バキッ」

ナイト君の仮面が砕けました。

「「「え!?!?!」」」

そこにいたのは・・・私の最愛の弟である、奏でした。

そして、次の瞬間にアリサちゃん、すずかちゃんの足元に魔法陣が現れて、二人は転送されました。

【END】

第四十三話、頑張らないと

「行くぞ。」

不滅の刃 デュランダル

「

僕は、リンフォースが放ったスターライトブレイカーに対して、デュランダルで突きを放ち、その勢いで、魔力を解放する。

それは、まるで、剣から、砲撃が放たれるように、見えると思う。

そして、

「ドゥーンー!!」

デュランダルから放った、魔力の奔流とスターライトブレイカーがぶつかった瞬間、とてつもない音がした。

・・・なんとか、デュランダルの魔力の奔流の方が勝ったのか、少

し、リンフォースを捉えた感触があった。

そして、

「パキッ」

な！？

アテネからもらった仮面から音が聞こえた。

・・・まさか。

「「「え！？」「」」

仮面は地面に落ちてしまった。

素顔を見られた後に、アリサとすすかは転送されて行った。

・・・エイミイ、もう少し早くに転送してよ。

「だって、まさか、こんなところで、奏に会えると思ってなかったから、つい／＼／」

「・・・」

そういえば、昔、町に別々に出かけた時、たまたま、会ったら、今みたいな状況になったような。

「・・・私もする。」

「っ!?!?」

今度はフェイトに抱きつかれた。

「フェ、フェイトまで、どうしたの!?!?」

「・・・私も奏が好きだから／＼／」

「え／＼／」

そんな真顔で言われると、照れるよ。

「フェイトちゃん、離れようか？」

お姉ちゃんが鬼のような顔をして立っていた。

な、なんで、そんなに怒ってるの!？

「と、取りあえず、まだ、終わってないんだから、離れて。」

「……うん。」

フェイトは渋々離れてくれた。

・・・まさか、クリスマススイブに、始めて告白されるなんて。(ア
テネ、梨桜、アリシアを除く。)

「僕は、デュランダルの能力を使ってしまったから、魔力が残りす
くないんだ、だから、皆を守りながら戦うのは無理になったんだ。
だから、もう、下方支援は、いいよ。僕一人で戦う。」

「そんなのダメ!!」「」

お姉ちゃんとフェイトの声が重なる。

「ダメじゃないよ、相手はロストロギアだ。どんな能力があるか、分からない。それにね、お姉ちゃんとフェイトは仮でも、管理局の魔導師なんだ。その魔導師とあれが、戦って、傷つけたら、はやての罪状が増えてしまう可能性がある。だから、分かって。」

「「うっ。」」

「それなら、ユーノとアルフと一緒にアリサとすずかを守っていて、その方が、僕も安心して、戦える。」

「……それはそうなんだけど。」

「私は奏といたいの!!」

……フェイトは分かってくれそうだけど、お姉ちゃんは無理か。

時間もないし。

仕方ない。

「はあ、分かったよ、さっきと同じように、下方支援だけお願い。ただし、今度は、海の方にあいつを誘導するから、それも頭にいらておいてね。」

「分かった!!!」

二人とも、元気だね。

・・・帰ったら、私にも、ハグさせてくださいね。

な!?

梨桜が突然、変なことを言いだした!?

今日は皆、どうしたの!?

「 聖剣解放

エクスカリバー

行くよ!!」

本当はデュランダルを使った方がいいんだけど、もつデュランダル
を使えるだけの魔力が残っていない。

「うん!!」

【INFIGHT】

私たちは、戦場を海上に変えて、闇の書の管理プログラムと戦って
います。

「はああああ!!」

今、最前戦で戦っているのは私の親友の弟で、私と親友の最愛の人。

高町奏、それが、彼の名前。

さつき分かったことなのだけど、私が深く関わった、PT事件で、何かと助けてくれたのも、彼だったのです。

「アクセルシユート!!」

桃色の魔力の弾丸が、闇の書の管理人格を襲う。

私は、桃色の弾丸を操っている女の子で、私の親友である、高町なのはほど、ロングレンジからの魔法に、正確性はない。

だから、奏への援護は、基本はなのは。

それで、奏と闇の書の管理人格に、ある程度の距離が開いた時のみ、私が、雷を纏った、魔力弾を叩き込む。

しかし、正直言って、戦いは三対一でも、闇の書の管理人格を倒すための、決定的なダメージを与えられない。

でも、確実に、こちらが優勢のはずだ。

ほんの少しずつだけど、闇の書の管理人格の動きが遅くなっているように、感じる。

「ナイトメア。」

「フェイトちゃん!？」

あ、一瞬の間をつかれて、黒い収束された魔力砲が私をめぐらして向かって来る。

しまった。

これは直撃コースだ。

「だから、僕一人で戦うって言ったのに。」

私の前に、急に人影が現れた。

私の最愛の人奏だ。

「うおおおおお!!」

奏は不可視の剣で、闇の書の管理人格の砲撃を受ける。

「か、奏!？」

「大丈夫。それより、怪我はない？」

奏が顔を寄せて、そう言ってくれる。

「うん、奏が助けてくれたから／＼」

正直、嬉しいけど、ドキドキする。

「戦闘中に余裕だな。」

「「な!？」」

さっきまで、ロングレンジにいたはずの闇の書の管理人格が私たちの目の前まで来ていた。

なんで!？

「くっそ、幻覚だ。」

悔しそうに、奏はそう呟いた。

まさか、あのロングレンジからの砲撃が幻覚だったの？

私には、普通の攻撃に見えたけど・・・。

「おまえたちも、我が内で眠るといい。」

急に、私と奏の体が闇に包まれた。

「奏、フェイトちゃん!？」

【END】

【INなのは】

「奏、フェイトちゃん!？」

私の最愛の弟の奏と親友のフェイトちゃんが、闇の書の管理人格さんが放った、闇に呑まれて、消えてしまった。

エ、エイミイさん!？」

私は、私たちをアースラの中からサポートしてくれているエイミイさんに連絡をとった。

状況確認、ナイト君、フェイトちゃんのバイタル正常。大丈夫、二人共、生きてる。闇の書にとり込まれただけ、解決法、今検討中。

了解です。

まさか、私の奏をとり込むなんて。

「闇の書さん、奏を私から、奪うなんていい度胸なの。」

あ、あの一応、フェイトちゃんも、とり込まれてるんですけど。

「行くよ、レイジングハート!!」

「All right my master. Load car
tridge」

「デイベインバスター!!」

「ナイトメア」

私の桃色の砲撃と闇の書さんの黒い砲撃がぶつかる。

ま、負けないの。

「マガジン、残り三本、カートリッジ、残り十八発、スターライト
ブレイカー撃つチャンスあるかな」

私、一人じゃあ、ちょっとしんどい。

「I have a matter. Call me A.C.
S. (私には方法があります。呼んでください、エクセリオンモ
ドを。)」

「ダメだよ、あれは。いくら、奏がカートリッジシステムを、安定させてくれても、フレイム強化するまでは、使ったらダメって言われてるじゃない。いくら、奏を助けるためとは、いえ、レイジングハートを危ない目にあわせられないよ!!」

「Call me.（呼んでください。）」

「一つ覚えの砲撃が通るとでも、思っているのか？」

「通す、レイジングハートが命と心をかけて、力を貸してくれてる。泣いてる子を、助けてあげてって。」

「A・C・S・set up.」

レイジングハートの形態が変わる。

先端から、魔力刀が現れて、柄の部分からは、翼がはえる。

それはまるで、私の杖の先に鳥が現れたようだった。

「エクセリオンモード、A・C・S・ドライブ!!」

私は、一直線に闇の書さんに突っ込む、策なんてない、ただ、突っ込む!!」

私のレイジングハートと闇の書さんの障壁はぶつかり合う。

「届いて!!」

ほんの少しだけだけど、魔力刀の部分が、障壁を貫く。

「ブレイクシュート!!」

私の桃色の砲撃が闇の書さんを、覆う。

「ほぼ、ゼロ距離、障壁を抜いてのエクセリオンバスター、これでダメなら。」

「Master」

あははは、無傷かな？

「うん、頑張らないとだね。」

「Yes」

【END】

第四十四話〈それぞれの夢〉（前書き）

さて、今回は、奏の視点以外、少し手抜きです。

フェイトとはやてに関しては、アニメとほぼ同じ内容です。

すいません。

第四十四話　それぞれの夢

【インフェイト】

私が目を覚ました、そこは、私が小さかった時に暮らしていた、所
でした。

横を見ると、アルフに・・・私？

「うう〜。」

でも、違う、私じゃない。

たぶん、彼女は。

「みんな、起きてますか？」

そこに、私の教育係だった、使い魔の女の人が入って来る。

「・・・リニス？」

「はい、リニスですけど。」

やっぱり、リニスだった。

「うう〜、まだ、眠いよ、リニス〜。」

「わたしも〜。」

「こら、アリシア、アルフ、また夜更かしてたのですか？早寝早起きのフェイトを見習いなさい。」

「え〜〜。」

「え〜〜じゃ、ありません。」

なんで、私はここにいるの？

「・・・アリシア？」

「おはよう、アリシア、アルフ。」

そこには、あの人が……。

「困りましたよ、今日は嵐が雪になるかもしれません。」

「あら、どうしたのリス？」

「フェイトが……怖い夢を見たのかもしれない。」

「あら、フェイト、こちらにいらっしやい。」

そう言って、私を呼んでくれる。

私は、おずおずとあの人に近づく。

すると、

あの人は、私の頬を

母さんは一度も、私にこんな風に、笑いかけてくれたことはない。

アルフとリニスを除けば、私に初めて笑いかけてくれたのは……。

「ねえ、今日は、皆で町に行きましょうか？ フェイトに新しい靴を買ってあげないと。」

「それは良い考えですね。」

「え〜、フェイトばかりずるい。」

「フェイトは、魔導師試験満点ですから、そのご褒美ですよ。アリシア。」

「え〜、でもリニス。」

私の瞳から突然、涙があふれる。

「フェイト？ どうしたの？」

アリシアが心配してくれる。

私のずっと欲しかった時間だ。

何度も、何度も、何度も夢に見た。

でも、違う。

これは夢だ。

現実じゃない。

きっとそうだ。

「ねえ……アリシア、これは夢なんだよね？」

「……………うん。」

「私とあなたは、同じ世界にはいない。」

「……………」

「母さんは、私にあんなに優しく笑いかけてくれない。」

「優しい人だったんだ、優しい人だったから、壊れちゃったんだ、死んじゃった私を生き返らせるために。」

「うん。」

「ずっと、一緒にここにしよう。フェイトが欲しかった幸せ、全部あげるよ。」

「……私の欲しかった幸せ。」

「でも、ごめん、アリシアでも、私、行かなくちゃ。」

そう言つと、アリシアは、私にバルディツシュを渡してくれる。

「アリシア……ごめんね。」

そう言つて、アリシアを抱きしめる。

「……うんうん、フェイト、やっぱり、夢より……本当の私たちと現実で……生きた方が……いいよ。それに、彼はここにはいないし。」

「アリシア？」

「だから、お願い、現実の私とママに会ったら、今みたいに、私を抱きしめてね。」

「え？」

「約束だからね。」

【END】

【INはさて】

「眠い、眠い。」

「ここはどこやる？」

「そのまま、お休みを、あなたの願いは私が叶えます。」

「なに？」

「守護騎士たちの平和で穏やかな暮らし。それが、夢の中ですっと
続いていきます。」

・・・それは。

「うんうん、それはただの夢や。私、こんな望んでない！！あなたも同じはずや。」

「私は騎士たちと精神リンクしています・・・だから、騎士たちと同じで、私はあなたを愛しています。だから、こそ、あなたを殺してしまうことが自分自身では許せない。暴走することも、あなたを侵食することも止められない。」

・・・そんなことを。

「私も、自由に生きられへん、苦しみが少しは分かるし、覚醒の時に、多少、シグナムたちのことも分かったつもりや。でもな、間違えたらあかん、今の、あなたのマスターは私や。」

だから。

「マスターの言うことはちゃんと聞かなあかん。名前をあげる。もう、呪いの魔道書とか、闇の書のとかわせへん。」

「無理です。自動防衛プログラムは止まりません。外で、管理局の魔導師が戦っています。」

涙を流しながら言うなんて・・・よっぽど辛かったんやな。

「止まって。」

そして、外に人に話しかける。

外の方、外の管理局の方。そこにいる子の保護者の八神はやてです。

はやてちゃん？

な、なのはちゃん！？ホンマに!？

色々あって、今は、闇の書さんと戦ってるんだ。

そっか、お願いやねんけど、そこにいる子止めたって、その子が動いてると、管理者権限が使われへん。

分かったやってみる。

ありがとう。

「もう、これで、大丈夫や。」

「……ありがとうございます。」

「そうや、名前やあげなな、祝福、祝福の風、あんたは今日から、祝福の風リンフォースや。」

【END】

【IN奏】

「こら、天童!!起きんか!!」

え?

天童?

「担任の授業中に寝るとはいい度胸だな!!!」

目を開けると、そこは、転生する前に通っていた高校の教室だった。

「あれ?俺、転生したんじゃない?」

「転生?そんなに転校したいのなら、廊下で立っている!!!」

「「「「「あははははははは。」「」「」「」

そこで、みんな笑う。

あれ?

どうしちゃったんだろう?

俺。

しばらく、外で立っていると、チャイムが鳴り響いた。

「おい、いつまで、立っているつもりだ？HR始めるから中に入れ。」

「……はい。」

俺は、確か……フェイトと一緒に……。

「実は、今日、連絡事項はない、だから、これで、終わりだ。」

そう言っつて、担任はスタスタと外に出て行ってしまった。

なんだよ、それなら、先に言えよ。

俺が席に座る意味ないじゃん。

「か〜な〜で〜!!また、授業中に寝て!!おばさんに言いつけるよ……!!」

先生が出て行くと同時に、一人の女の子が俺によって来る。

「……遥はるかか？」

「何言ってるの？もしかして、こんな美少女、忘れちゃった？」

そう言って、胸をはる。

少し、茶色が混ざった、黒髪で、身長は、俺より少し低い160cmくらい。

胸は普通の女の子より少し大きい。

彼女は、幼馴染の俺から見ても、美少女だった。

「おまえ、自分で、そんなこと言って恥ずかしくないの？」

「う、う、うるさいわね／＼／」

顔を真っ赤にして、反論する。

顔を赤くする位なら、始めから言っなよ。

「ほら、今日も、どうせ、暇なんだから？早く、帰るっぜ。」

「う、うん・・・って、ちょっと待ってよ！..！」

俺は、スタスタと家路につく。

「あ、あ、あのさ／＼／」

「なんだよ？」

「こ、この後さ、私にちょっとつきあってよ。」

「なんで？」

「そ、そんなん、奏だからに決まってるじゃない。」

「俺は帰って、ドラマ見たいんだけど。」

確か、あの再放送のドラマが、良いところだった気がする。

「そんなん、録画しとけば、いいじゃない!!」

「分かってないな、生で見るのが一味違うんだよ。」

「それって、再放送の奴でしょ?」

「な、なんで分かったんだよ? 遙、おまえ、エスパーか?」

「はあ、何年、幼馴染やっているとってるのよ、それくらい分かって当然よ。」

ブンブン、そんな音が聞こえてきそうだった。

「それでも」

「もし、一緒に来てくれないなら、おばさまに今日、先生に怒られたの言いつけるから。」

な!?

遙、それはひどいだろ!?

「ほらほら、どうする? 奏のおばさまは、そういうの厳しいからね
〜。来月のお小遣い、いくらになるかなあ〜?」

・・・こいつ、確信犯だな!!

「・・・分かったよ。でも、あんま、金のかかる所はやめてくれよ、
欲しいゲームが来月出るんだよ。」

確かそうだったと思う。

「はあ、女の子と遊ぶことより、ゲーム優先? 信じらんない、それ
でも、男?」

「ああ、れっきとした男だぞ。」

「このオタク!」

「おい、オタクって、俺の持ってるゲーム、ほとんど、おまえもするだろ？それも、勝ってに俺の部屋に入ってる。」

「何よ！！私はちゃんと、おばさまに許可もらって入ってるのよ、なんか文句ある？」

「かなり、あるぞ！！俺が、攻略してないゲームを勝ってにプレイして、クリアーして、結末を教えられた時は三日はへこんだぞ！！」

「いいじゃない、減るもんじゃないんだし、ほら、されより、こんな所で時間を使ってないで、行くわよ！！」

そう言って、俺は遙に、手を引つ張られて、行くのだった。

【END】

第四十四話〈それぞれの夢〉（後書き）

【INアテネの教えて、神様!】

「みなさん、ご無沙汰です MCのアテネです」

「みんなのアイドル、アリシアです!」

「それにしても、今回は驚いたわね。」

「うん、奏が、なんか、まったく別の物語の中にいるし、その上、私たちの知らない子までいるし。」

「ええ、でも、あの遥って子、実は、私よりも先に生まれたキャラらしいの。」

「そうなの!？」

「ええ、なんでも、この物語の重要なカギを握ってるらしいわ。だから、質問などをくださったっても、何も、お答えすることができません、ご了承くださいって、翼が言ってた。」

「そうなんだ、皆様、ごめんなさいね。少しずつ分かるみたいだから、それまで、我慢してね。」

「それでは」

「またね!」

【DZF】

第四十五話く重なる思いく

「それで、おまえの来たかった所ってここかよ？」

俺の隣には、幼馴染の遙がいる。

そして、遙に連れて来られた場所というのが、俺たちの高校から、二駅ほど、離れた場所にある、砂浜だった。

もちろん、なぜか、電車の切符の代金は俺持ちだった。

・・・欲しいゲームがあるって言ったばっかなのに。

しかし、ここに着いてから、五分ほど、遙はまだ、何も話さない。

なんでこんな所に来たんだ？

「ねえ、覚えてる？」

遙かは、水平線を見ながら、俺に聞いてくる。

「何が？」

「じじのじど。」

・・・確かここは。

A 俺が、始めて、バタ足に成功した場所。

B 一時、流行った貝殻を集めに来た場所。

C・・・

「ちなみに、AかB選んだ瞬間、海に投げ込むから。」

「な!？」

俺の心の声が、遙には、分かるのか!？

いや、待てよ、さっきもこんなやり取りしたような・・・。

「で、覚えてるの？覚えてないの？」

「・・・覚えてるぞ。」

ここは俺たちにとって忘れられない場所。

遥は何も言わない、俺の言葉を待っているのか。

「おまえと初めて、会った場所。おまえと初めて遊んだ場所。そして・・・おまえと、初めて気持ちを通じ合った場所だ。」

「・・・なんだ、覚えてんだ。」

「おまえとのことだぞ、忘れるわけねえじゃねえか。」

「・・・そっか。」

未だに遥は水平線を見つめたままだ。

「私だって、忘れられるわけないよ……だって、初めて奏に助けられた場所だもん。」

「おい、なんだよ、それ？」

「……覚えてないんだ。泣いてる私と一緒に、ママとパパを探してくれたの。」

「ああ、その後、結局、探すのやめて、一緒に遊んだんだだけ？だから、俺としては、遥と初めて会って、初めて、遊んだ場所だよ。」

「……私にとっては、王子様に助けられた、大事な思い出なんだけどね。」

「な、王子様って／＼／＼」

「クス、奏、照れてやんの。」

そう言って、遥は俺に背を向けた。

「からかうな!!!」

「うんうん、からかってはないんだけどね。本当に今でも、そう思ってるんだ。」

「……………」

「それで、その後、引っ越したら、奏の家が隣だった時は、ホントにビックリしたよ。」

「……………確かに、あれは、驚きだった。」

「私は運命だと思ったな。」

……………遥。

「そして、一度だけ、喧嘩した私たちはここで、仲直りした。」

「……………ああ、今、思うと、なんで、喧嘩したかも覚えてないけどな。」

「うん。でも、仲直りできた時は、ホントに嬉しかった。」

「・・・俺もだよ。」

「それでね、私、今日みたいな日が永遠に続くと思ってた。」

「・・・」

「そして、いつか、奏のお嫁さんになれるんだと思ってた。」

「・・・」

「気づいてた？奏が死んだ日、私、ここで、奏に思いを伝えようと思っ
て・・・思って・・・おもってたんだよ。」

こちらを向いた、彼女の瞳には、涙がたまっていた。

「それなのに・・・奏が、し、し、死んじゃって、ヒック、どれ
だけ、か、悲しかったなんて・・・奏には分かんないでしょ？」

ポロポロと涙を流しながら、遙がそう言う。

「ネコを抱いてさ、これで、俺は満足です、みたいな顔しちゃってさ……どれだけ、周りが悲しむかも知らないで。」

「……ごめん。」

「ごめんじゃないよ!!それなら、奏の力でこっちに戻って来てよ!!私の所に!!」

「……」

「奏には、その力があるんでしょ!!」

そうか、これは夢だ。

俺が、ネコを助けた時に……いや、神様を助けた時に封印した部分。

「私の……私の所に戻って来てよ……私には、あなたが必要なのよ。」

「……遥。今は、戻れない。」

ここから、先は、俺のただの偽善だ。

遥、本人に伝えられるわけじゃない。

でも、言いたい。

「なんで？」

「遥、俺は、確かにおまえのことが世界で一番好きだった。」

「そ、それなら」

「でもさ、今は、他にも大切な子ができちゃったんだ。謝っても許してもらえないかもしれないけどさ、ごめん。」

「ずるいよ、ずるい。奏はずるいよ、私の大好きな奏に、謝られたら、私、許しちゃうじゃない。」

泣きながら、遥は、そう言う。

「じゅん。」

そう言っつて、彼女を抱きしめる。

「・・・本当に、悪いと思っつているなら、約束。私を必ず、迎えに来て。」

「え？」

「実はね、私、本物なの。」

何を言っつてるんだ？

「私、奏の記憶の存在じゃなくて、本物なの。たぶん、あなたの夢と私の夢が世界を超えて繋がっつている。だから、私は、私。そのおかげで、奏の考えつてること、少しだけ分かるんだ。」

「・・・そっか。」

本当なら、こんなこと、信じられない、でも、なぜか、信じられるような気がした。

「だからね、お願い、私を迎えに来て、私ちゃんと待ってるから。」

そう言って、遙は微笑んでくれた。

「分かった、約束する。」

「あ、でも、あんまり、遅いと、浮気するかも。」

涙をためたままの瞳で、無理矢理ニヤニヤして、そう言って来る。

「分かった、なるべく、早くするよ。」

「分かれば、よろしい。」

そう言って、俺の腕の中から、離れて行く。

「奏、あなたの新しい、大切な子たち、今も戦ってるんでしょ？」

「ああ。」

「あの子たちも守ってあげてね。」

「もちろん。」

「はは、それでこそ、私の愛しの奏だ。さよならは言わないよ、奏。」

「ああ、またな。」

「うん、また。」

そう言って、俺たちは別れた。

第四十六話　僕たちは負けない

【INなのは】

外の方、外の管理局の方。そこにいる子の保護者の八神はやてです。

「はやてちゃん？」

急に、闇の書さんから、はやてちゃんの声が聞こえてきました。

な、なのはちゃん！？ホンマに!？

「色々あって、今は、闇の書さんと戦ってるんだ。」

そっか、お願いやねんけど、そこにいる子止めたって、その子が動いてると、管理者権限が使われへん。

「えっと?。」

どっやって止めたら、いいのかな？

「なのは！！分かりやすく、伝えるよ、今から、言うことを、なのはができたら、はやてもフェイトもナイトも、外に出られる！！」

ユーノ君が私にそう伝えてくれる。

「分かったやってみる！！」

ありがとう。

「よし、行くよ、レイジングハート！！」

「All right. (了解です。)」

私がレイジングハートを構えると、海から、出て来た、触手が闇の書さんを庇うように、三本現れる。

でも、関係ない。

止まっている相手になら。

「エクセリオンバスター、バレル展開。中距離砲撃モード。」

私のレイジングハートについている、魔力の羽が、さらに羽ばたく。

そして、闇の書さんに向かって、突風を放つ。

「エクセリオンバスター、フォースバースト!!!ブレイクシュート
!!!」

その瞬間、金髪の少女と少年が飛び出して来た。

【END】

【IN奏】

「外に出られたのかな？」

ええ、そのようです。

梨桜が答えてくれる。

「梨桜はさっきの夢のこと……。」

はい、あなたの傍で見えていました。……騎士にあるまじき行為だとは分かっていたのですが……。

「いいよ、いつか、皆にも、話すと思いつく。」

……ありがとうございます。

「それより、今は、この黒い塊をどうにかしないとね。」

ええ。

そこには、原作と同じかそれ以上に大きな黒い塊が海の上に浮かんでいた。

もちろん、周りには、とてつもない数の触手をたずさえて。

奏、守護騎士が現れました。

守護騎士たちの中央には、白い光の柱が。

足元には、白色の巨大なベルカ式の魔法陣が展開されている。

「我ら、夜天主の元に集いし騎士。」

「主、ある限り、我らの魂つきることなし。」

「この身に命ある限り、我らは恩身のために。」

「我らが主、夜天の王、八神はやての名元に。」

白い柱から、

「はやてちゃん……！」

はやてが現れた。

・・・ここからが、本番か。

「はやてえ~~~~~!!」

ヴィータが、はやてに抱きつく。

そこに、なんはお姉ちゃん、フェイトが向かう。

・・・あ、KY君も。

「なのはちゃんとフェイトちゃんもごめんな、家の子たちが迷惑か
けたみたいで。」

「うんうん。」「私たちはぜんぜん。」

そろそろ、僕も、行こうか。

「すまないな、水を指してしまうようで、時空管理局執務官、クロ

ノ・ハラオウンだ。時間がないので、あそこの黒い淀み、闇の書の防衛プログラムが暴走を開始する。それを僕たちは何らかの方法で止めなくてはいけない。停止のプランは、現在二つある、一つは極めて、強力な凍結魔法で封印する。もう、一つは、アースラからの魔道砲、アルカンセエルを撃つかだ。」

「あゝの、氷結はたぶん無理です。コアがある限り、再生してしまいます。」

シヤマルがおずおずと手を挙げて言う。

「アルカンシエルも絶対ダメ！こんな所で、撃ったら、はやての家もなくなっちゃうもん！！」

「・・・そういう問題ではないんだが、誰か意見はないか？」

皆が沈黙する。

原作の通りでも、いいんだろうけど・・・原作の通り、成功するとは限らない。

「ここは、僕が引き受けるよ。」

皆にそう言った。

「「「「「奏!?!」「」「」「」

「闇の書のバグは僕がやる、最初から、その約束だったしね。」

「き、君は・・・?」

クロノが聞いて来る。

あ、そっか、初対面?かな?

「ギル・グレアムと協定を結んでいた者だよ。・・・裏切られてしまったけどね。」

「君なら、なんとかできるのか?」

「と言うより、皆でなんとかするんだけどね、その方法を教える代わりに条件がある。一つ、ギル・グレアムが僕との約束を果たすこと。二つ、はやて、守護騎士たちの罪を問わないこと。三つ、管理局は、これから、起こることを一切、撮影したら記録に残したりし

ないこと。そして、僕的能力について、一切、説明を求めない。たった、それだけだ。」

「な！？君は、自分が何を言っているのかわかっているのか！？」

「それで、吞んでくれるんですか？リンディさん、裏切りのギル・グレアム？」

二つのモニターが、現れる。

しかし、その瞬間、闇の柱が現れる。

「夜天の書の事を闇の書と呼ばせた闇。」

はやてが、そう呟いた。

「時間がない！！早く決断を！！」

原作よりも早い。

やっぱり、現実には、そんなに甘くないね。

分かったわ、グラム提督が何を約束していたかは、分からないけど、その約束を飲むわ。

「母さん!!」

クロノ、たぶん、彼が、この場を一番、良い方法で終わらせてくれるそんな気がするの。

「・・・分かりました。」

そして、僕は、アニメで見た方法を話した。

そこに僕が、加わるわけだから、確実性は上がる。

「・・・なんと云うか。それは・・・なんとまあ。」

「クロノ君。奏の悪口を言ったから、後でお仕置きなの。」

「な!?!」

クロノの顔が歪む。

・・・お姉ちゃん。

「クロノ、大丈夫、もし、失敗した時のための、切り札もある。」

クリエーターの力が。

「分かった。艦長!!」

アルカンシエル、チャージ開始!!

「この作戦の立案者は君だ、君が指示を。」

「うん、皆、準備はいい?」

「」「」「うん!!」「」「」

「ギアアアアアアアアアアアアア!!」

闇の書のバグが叫び声をあげて、行動を開始する。

「行くよ、まずは、サポート班!!」

「了解!!」

「ストラクルバインド!!」「チェーンバインド!!」

ユーノとアルフがバインドの鎖で、触手の部分を、締め上げる。

「縛れ!!鋼の軛!!」

ザフィーラが!?

縛れって言ったのに、斬ったよ!?

ま、まあ、確か原作でも、そうだから……。

「次!!お姉ちゃん、ヴィータ!!」

「ちゃんと合わせるよ!!高町なのは!!」

「ヴィータちゃんもね!!」

「鉄槌の騎士ヴィータと鉄の伯爵グラーファイゼン!!」

「G i g a n t F o r m」

「ギガントシューラク!!」

ヴィータはアイゼンを巨大化させて、カメラに叩きつける。

よし、これで、魔力無力化の結界が解ける。

「高町なのはとレイジングハートエクセリオン!!行きます!!」

「l o a d c a r t r i d g e」

四発のカートリッジが排出される。

「エクセリオンバスター!!!」

突風がキメラに放たれる。

「ブレイクシュート!!!」

さらに、幾つもの、砲撃が重なった、

お姉ちゃんの砲撃が、対物理障壁を破壊する。

「次に!!!シグナム、フエイト!!!」

「ああ!!!」「うん!!!」

「剣の騎士、シグナムが魂。炎の魔剣レヴァンティン。刃と連続刀ほのおに続く、もうひとつの姿。」

カートリッジを一本使って、

「B o g g e n f o r m」

剣と鞘を合わせると、弓になった。

さらに、カートリッジが二本放出され、魔力の矢が形成される。

「駆けよ!!! 隼!!!」

矢が放たれる、そして、第三の対広域魔法の結界が破れる。

「フェイト・テッサロッサとバルデシッシュザンバー、行きます！
！」

二本のカートリッジがロードされる。

大剣をふるった、衝撃派で、対熱バリアにヒビをいれる。

さらに、

「撃ち抜け!!! 雷神!!!」

「Jet zamber」

刀身が伸びて、そのまま、キメラの本体を切り裂いた。

すると、今までジツとしているだけだった、キメラが砲撃を放とうとする。

「ザフィーラ!!」

「応!!楯の守護獣ザフィーラ!!砲撃なんぞ撃たせん!!」

大きな、鋼の軛を砲塔に突き刺し、やめさせた。

「はやて!!」

「うん、奏君!!」

はやては、夜天の書を開き、詠唱をし始める。

「彼方より、来たり、ヤドリギの枝。銀月の槍となりて、撃ち貫け!!石化の槍、ミストルティン!!」

上空から、体を石化させる力を持つ、槍がキメラに振り注ぐ。

しかし、石化した部分から、再生する。

「クロノ!!!」

「ああ!!!悠久なる凍土、凍てつく棺の内にて、永遠の眠りを与えよ!!!」

そして、デュランダルを振るい、

「凍てつけ!!!」

「E t e r n a l c o f f i n」

キメラの周りの海面ごと、凍らせる。

しかし、また、石化の時と同じ、凍っていない部分から再生する。

「
聖剣解放

デュランダル
」

出し惜しみなし、デュランダルに全ての魔力を注ぐ。

「『ブレイカー!!』」
不滅の刃デュランダル
」

四つの魔法がぶつかり、巨大な爆発を起こした。

「シャマル!!」

「はい!!」

シャマルの魔法によって、キメラのコアを捕まえる。

「リンカーコア、抽出……捕まえた!!」

「アルフ、ユーノ!!」

「長距離転送!!」「目標、軌道上!!」

そして、一気に軌道上に転送されるキメラにリンカーコア。

僕たちが見上げると、白い光が見えた。

効果範囲空間内の物質、完全消滅。再生反応……ありません！

エイミイからの連絡で、全員が歓声をあげる。

……とりあえず、これで、ひと段落かな？

そこで、僕の意識は途切れた。

【END】

第四十七話 夜天の魔道書 (前書き)

明日、投稿するお話が、奏でる世界の最終話です。

第四十七話　夜天の魔道書

【INなのは】

奏とはやてちゃんが、倒れてから、数時間が経った。

奏がナイト君だったことが、守護騎士の皆やリンディさんたちにも伝わり、奏とはやてちゃん、私たちはアースラに行くことになりました。

アースラの方が、医療施設が充実してるから。

・・・でも、あの梨桜とか言う女が頑なに奏の体を見よつとする医療スタッフさんたちを拒んで、未だに、何も、治療できていません。

それに、奏がナイト君だと分かった瞬間、シャルさんが、奏に色目を使ったような気がするの！！

そう言えば、フェイトちゃんも、奏に告白していたような・・・。

アリサちゃんも、すずかちゃんも好きだから・・・。

ライバルがいつぱいなのだ!!

スターライトブレイカー使っていていいかな？

でも、そんなことしたら、奏に怒られるし……。

うう~~~~。

恋はたいへんなのだ~~~~。

そして、今、リインフォースさんのお願いで、皆、会議室に呼ばれているのだ。

「やはり、破損は致命的な部分まで、いたっている。防御プログラムは停止したが……私、闇の書本体は、近い将来、新たな防御プログラムを作りだすだろう。」

「……そんな!!」「」

私、フェイトちゃん、ユーノ君が一斉に叫ぶ。

シヤマルさんが消えれば、確かにライバルは減るけど、この話と、あの話は全く、別の問題なの!!

友達が減るのは寂しいよ……。

「主、はやてが治るのだ。」「これで、良しとしよつ。」

シグナムさんとシヤマルさんも同意する。

ヴィータちゃん、ザフィーラさんも、頷いている。

「いや、違う、守護騎士たちは残ります。」

「どついついことかしら?」

リンディさんが代表して、聞いてくれる。

「守護騎士プログラムは、防御プログラムと共に、本体から、切り離された。だから、行くのは私一人だけだ。」

「「「「そんなー!!」「」」」」

今度は、私、フェイトちゃん、ユーノ君にヴィータちゃんまで、加わる。

「おまえ、一人だけ行くなんて・・・そんな悲しい話があるかよ!」

「鉄槌の騎士・・・しかし、おまえたちも私と共に行けば、主が悲しむ。」

「・・・そうだけだよ。」

ヴィータちゃんは、自分の唇をかんで、涙を流します。

ファイトちゃんも、今にも、泣きだしそうだ。

フェイトちゃんはプレシアさん共、お別れしたから、プレシアさんとリンフォースさんが重なって見えるところも、あるのかもしれない。

他の皆も、泣きそうではないけれど、苦しそうな顔をしている。

・・・また、皆が幸せになれる終わり方じゃないのかな。

「それで、小さな勇者の二人に、頼みがある。私が行くのを手伝ってもらいたい。」

【END】

【インフォース】

あの会議室から、数時間たった。

私は、会議室から、海鳴市が見渡せる丘の上に来ていた。

後は・・・小さな勇者が来るのを待つだけか。

「ああ、来てくれたか。」

「インフォースさん・・・。」

ああ。

「その名で呼んでくれるのだな。」

主から頂いたかけがえのない名前。

祝福の風。

長い歴史の中で、名前をくれた主は、主はやてが、初めてだった。

私はもう、これで、呪われた闇の書と呼ばれることはない。

「あなたを空に帰すの、私たちでいいの？」

なんだ、そんなことを気にしていたのか。

「ああ、おまえたちのおかげで、私は主はやての声を聞いた。主はやてを喰い殺さないですんだ。それして、守護騎士たちを生かすことができた。感謝している。だから、最後はおまえたちに私の最後を閉じて欲しい。」

ああ、なんて、喜ばしいことなんだろう。

「はやてちゃんとお別れしないでいいんですか？」

「主はやてを悲しませたくないからな。」

あの優しい主のことだ、きつと、悲しんでしまう。

私は主に笑っていて欲しい。

「でも、そんなの、悲しいよ！！」

ああ、二人共、そんな泣きそうな顔をするな。

「おまえたちにも、いつか分かる、海より深く愛し、その幸福を守りたいと思ったなら。」

そこで、守護騎士たちが、私の最後を見届けにやって来てくれる。

ありがたいことだな。

「さあ、そろそろ、初めようか。」

私を中心に中心で、魔法陣を展開し、その両脇で、小さな勇者たちが、魔法陣を展開する。

「Ready to set.」用意できました。」

「stand by.」

小さな勇者のデバイスが準備が終わったことを教えてくれる。

「ああ、短い間だったが、おまえたちにも、世話になった。」

「Don't worry.」

「Take a good journey.」(良い旅を)」

「ああ。」

その時だった。

「リインフォース、皆！！」

主が、小さな手で、一生懸命に、車椅子のタイヤを回して、こちらに近づいて来る。

守護騎士たちが動こうとする。

「動くな！！動かないでくれ、儀式が、止まる。」

「破壊なんてせんで、ええ！！私が抑える！！こんなんでええ！！！」

・・・主。

「主はやて、よいのですよ。」

「あかん！！いいこと何て何もあらへん！！！」

「ずいぶんと長いこと生きてきましたが、私は最後の最後にあなただから、綺麗な心と綺麗な名前をいただきました。騎士たちもあなたの傍にいます、何も心配することはありません。」

「心配とか、そんなん。」

「ですから、私は笑っていきます。」

「駄々っ子は嫌いや！！私がマスターや！！私の話を聞いて！！暴走なんてさせへん、約束したやんか！！」

「その約束はもう、立派に果たしてただけました。主の危険をばらい、主を守るのが、魔道の器の務め、あなたを守るための最も、優れたやり方を私に選ばせてください。」

「けど、ずっと、苦しくて、やっと解放されたんやないか！！」

「私の意思是、あなたの魔道と騎士たちに残ります。」

「そんなんちゃう！！そんなんちゃうやる！！リンフォース！！」

「駄々っ子はご友人に嫌われます。聞きわけを我が主。」

「リインフォース!!」

そう言って、さらに車椅子のタイヤを回す主。

しかし、主は魔法陣のすぐ傍で、車椅子ごと、倒れてしまう。

「なんでや、なんでや、これから、もっと幸せにしたらなあかんのに。」

・・・主。

私は、主に近づき、

「大丈夫です、主、私は世界で一番幸福な魔道書です。」

顔を撫でながら、そう言う。

「・・・リインフォース。」

「主、一つお願いが、私は、これから、小さな、欠片に変わります。もし良ければ、私の名前は、その欠片につけるのではなく、貴方が将来手にするであろう、魔道の器につけてあげてください。きっと、私の意思はその器に宿るでしょう。」

私は、主から離れて、魔法陣の中央に立つ。

「主はやて、守護騎士たち、それから、小さな勇者たち、ありがとう、そして、さようなら。」

そう言って消えようとした時だった。

「そんなことさせてたまるか!!！」

一人の少年が現れた。

【END】

【IN奏】

「じじは？」

「あなたの心の中よ」

何度も聞いたことのある声が聞こえてきた。

「防御プログラムは破壊できましたよね。」

「ええ、あなたのおかげで、なのはちゃんの負担はかなり、抑えられたわ」

「そうですか。」

良かった。

「……闇の書の中で、転生前に世界と繋がったのよね。」

アテネは、僕が一番、気にしていることを口にした。

「遙が僕に言ったことは……。」

「ええ、あなたの世界の遙ちゃんが思っていることよ。」

「……そうですか。」

いつか、きっと、必ず。

「その話はまた今度にしましょう、今は早く、起きないと、間に合
わないわ。」

「そうか、リインフォースさんの消滅のこと!?!」

「そつよ、急がないと、間に合わないわ。」

「今すぐ、僕を起こして!?!」

「分かったわ、頑張ってる」

そう言って、僕の意識は、現実世界に戻って行った。

「奏!？」

眼が覚めた途端に、梨桜が抱きついて来た。

「り、梨桜!？」

「もう、奏はいつも、無茶をするんですから。」

「ごめん、それよりも、今は。」

「はい、転移魔法陣は、もう完成しています。」

「行くよ。」

「はい。」

そう言って、転移魔法陣を発動させてもらった。

「主はやて、守護騎士たち、それから、小さな勇者たち、ありがとう、そして、さようなら。」

そこでは、ちょうど、リインフォースが消える場面だった。

「そんなことさせてたまるか!!」

「……貴様は。」

「「「奏!?」「」」

「リインフォースが消える必要はないんだ。MOP発動。マスター・オブ・プログラム術式確定。梨桜、サポートを。」

僕は、何も無い、所に、ディスプレイを作って、それを操作し始める。

「了解しました。」

梨桜の所にも、ディスプレイを作って手伝ってもらおう。

「ファイル固定、干渉レベルをSSSに設定、干渉対象、闇の書、正式名称『夜天の魔道書』。」

「奏、儀式破壊プログラム確定、そっちに送ります。」

「儀式破壊魔法プログラム発動を承認。」

その瞬間、リインフォース、お姉ちゃん、フェイトの足元に発生していた、魔法陣が消滅する。

「『『『『え？』』』』」

「さらに、保存ファイル起動、梨桜、そちらに、プログラムを送る、解凍を。夜天の魔道書にアクセス、コントロールを……」
奪取完了。」

「奏、解凍完了。」

「儀式魔法R発動。夜天の魔道書のプログラムを削除その後、追加項目、千二百五十六項目を上書き保存。」

「儀式魔法、発動を確認。夜天の書のプログラム、削除開始を確認、削除完了までの推定時間、十二分。さらに、追加項目、千二百五十六の上書きが可能なを確認。推定完了時間は、今夜の正午。」

「……梨桜、後を頼む。」

そう言い残して、また、僕は倒れた。

【END】

第四十八話 終焉そして、初まり

「それで、これは、どういふことかしら？」

僕の目の前で、リンディさんがニコニコ笑顔で、座っている。

お姉ちゃん、フェイト、はやて、リンフォース、守護騎士、クロノ、ユーノも、顔はニコニコしているが、目は笑っていない。

「どうって言われましても、最初の計画の通り、夜天の書の改変を行っただけですよ。」

「お姉ちゃん、フェイトには話してましたし。」

「「え!?!」」

その瞬間、二人の笑顔が引きつった。

「僕が、リンフォースと戦い始める前に、そんな風なこと言ったよね？」

「・・・確かに。」

「「「「おい!」「「「「

周りから、一斉にツッコミがいく、皆、仲いいね。

「それで、リインフォース、プログラムの調子はどう?」

「あ、ああ、好調だ。」

「良かった。」

僕が、PT事件終わってから、相当な時間をかけて作ったプログラムだ。

少しは自信あったんだよ

もちろん、アテネも、手伝ってくれたし。

「それで、あなたのその力は・・・。」

リンディさんが聞いてくる。

「黙秘します。」

「「「「「え？」「」「」」」」」

また、皆、声を揃えて驚く。

そんなに驚くことかな？

「闇の書の事件を解決するにあたっての約束は覚えていますよね。」

ニコニコしながら、そう言う。

リンディさんの場合、覚えてるのに聞いてきてるんだらうけど。

「あら、そうだったわね。」

なお、ニコニコ顔を崩さないリンディさん、大人だから、余裕があ

るね。

「あんな約束で君のその威容な力が隠せると思っているのか!! 答えろ!!」

クロノが、すごい怒ってで言ってくる、僕、クロノに何かしたかな？

けど、これって……。

「クロノ、やめ。。。」

「クロノ君、奏を怒鳴るなんて、後でOHANASINAなの。」

「クロノは約束守らないんだ、最低。」

「執務官って、嘘をつく職業なんですね。」

「ほんまや、なんちゅう、非道なんやろう。」

「私のマスターを侮辱するなクス!!」

リンディさんが、制止をかける前に、お姉ちゃん、フェイト、シャル、はやて、梨桜がクロノを批判する。

・・・梨桜、それただの悪口だから。

クロノは、席を立ち、部屋の隅っこで、泣き始めた。

リンディさんは苦笑してるし。

・・・なんか、ごめん、僕、何も悪くないけど。

「あ、あの少しいいでしょうか？」

そう言って、手を挙げたのは、リンフォースだった。

「あら、どうしたのリンフォースさん。」

「それが、私の中のプログラムは完璧なのですけど・・・その・・・完璧すぎて、私の中の色々なモノが変化して、たぶん、主はやてとユニゾンできなくなってしまうみたいです。」

「『『『『え!?!?!?!』』』』」

そんなバカな、僕とアテネのプログラムは完璧なはず。

「・・・それで、たぶん、奏との相性が最高になってしまっている
ようです。」

え!?!?

僕!?!?

「な、奏には、私がおもうのです!! 奏にはもう、私以外のユニ
ゾンデバイスは必要ありません!!」

リインフォースの言葉に激怒する、梨桜。

・・・なんで、怒っているんだろう?

「すみません、主はやて。」

「ええよ、相手は奏君なんやろ？幸せにしてもらい。」

「え！？はやてちゃん、いいのですか!？」

梨桜がはやてに凄いい勢いで聞く。

「うん、奏君やったら、リインフォースを幸せにしてくれると思うから。もちろん、私も、手伝うけどな 二人でリインフォースを幸せにしよう」

「うん、分かったよ、はやて、僕のミスだ、僕が責任を持って、リインフォースを幸せにするよ。」

「そ、そんな〜。」

頂垂れる、梨桜。

「それで、お願いなんですけど・・・。」

リインフォースが気まずそうに言うてくる。

「なに？」

「はい、私の後輩にあたる、魔道の器にリインフォースという名前をつけていたかったので、私には別の名前をつけていただけないでしょうか、主奏。」

名前つけるフラグまた来た！！

僕にそんな才能ないのに！！

「わ、分かった。考えるよ。」

「ありがとうございます、主。これからどうぞよろしくお願いします。」

「うん、よろしく。」

そして、一人の精神的障害者は出したものの、闇の書事件は、静かに終わりを告げたのだった。

THE END 魔法少女リリカルなのは〜奏る世界〜

ありがとうございました

【INアテネの教えて、神様!】

翼「読んでくださった皆様、今まで本当にありがとうございました。この魔法少女リリカルなのは奏でる世界を完結できたのも、皆様のおかげです。」

アテネ「もう、登場してしまってますけど、今回のゲストは、作者である天童翼です。」

翼「うん、紹介ありがとうございます。」

ア「どういたしまして。それで、皆様にお礼を言って、この後、どうするの?」

翼「アテネ、実はね、続編を書こうと思ってるんだ。もう、書き始めてるんだけどね。」

ア「なら、このまま、奏でる世界で、書き足していけばよかったじゃない」

翼「それが、とある事情によってダメだったんだよ。」

ア「とある事情って?」

翼「私はね、この少ない夏休みで、少しだけ、勉強したんだよ。」

ア「あ、そう、それと何の関係があるの?」

翼「勉強と言っても、学校のじゃないよ。」

ア「え？違うの？」

翼「もちろん、学校のもしたけど、少し文章の書き方をネットを使って勉強したんだ。」

ア「それで？」

翼「この〜奏でる世界〜の続編は普通のライトノベルのようにした感じで書こうと思ったんだ。」

ア「ふ〜ん。」

翼「アテネは驚かないんだ。」

ア「別にただ、興味がなかっただけ。」

翼「さいですか。そういうことで、これにて、〜奏でる世界〜は、完結です。残した多数の複線と教えていただいた聖剣は続編の方で回収、使用させていただきます。」

ア「では、〜奏でる世界〜の続編である、〜集う光〜でお会いいたしましょう。詳しい情報は、活動報告に書かせていただきます。」

翼「最後になりましたが、感想を書いてくださった皆様、誤字脱字を教えてくださいました皆様、聖剣を教えてくださいました皆様、本当にありがとうございます。この後には、リクエストをいただいた、番外編を書かせていただきますので、そちらも、よろしく願いしま

५
८

番外編・第一話『炎の魔剣』(前書き)

さて、50万PVの感謝の気持ちを込めた、番外編の第一話。

少し戦闘描写は、少ないですけど、ご容赦を。

番外編・第一話 炎の魔剣

時間は、あの闇の書事件から数日後。

場所は、はやての家である。

今日は、はやての退院祝いパーティーをすることになっているのである。

僕、守護騎士、リンフォース、梨桜、なのはお姉ちゃん、ファイトがいるのは、言うまでもなく、この場には、アリサとすずかまでいる。

あ、もちろん、アルフ、ユーノ、ザフィーラは動物形態でここにいるよ。

「今日は、皆、来てくれてありがとうな。」

「うんうん、気にしないで、僕達も、パーティーをするのは、好きだし。」

皆も、うんうんと頷いている。

「それにしても、皆、こんなに、たくさん料理持って来てくれて、ありがとうな。私が、作れたら良かったんやけど・・・。」

「そんなことしたら、先生にまた怒られるでしょ、はやて。」

アリサがヤレヤレと言った風に、言った。

本当は、翠屋でやろうと計画していたのだが、はやてが断固拒否したんだ。

『退院した日は、家の方が楽やから。』

そう言って断ったのだが、遠慮したのは、目に見えている。

このあたりのことは、後々、お母さんにも相談すれば、大丈夫だろっ。

「それでは、はやての退院を記念してえ〜〜〜かんぱ〜〜〜い!!」

そう言ったのは、もちろん、アリサ、こういうのを仕切るのはアリの正確上仕方ない。

まあ、皆分かっているからいいけど。

「それにしても、この料理は美味しいですね！！！！」

梨桜が遠慮もなしに、豪華な料理を食べだした。

………普段、食べさせてない子みたいに見えるからやめて！！

「むう、負けないの！！！」

なのはお姉ちゃんが、梨桜に対抗して、料理をドンドン食べだした。

………対抗する所、間違ってる気がするけど。

「な、なのはちゃん、やりますね！！！」

「梨桜さんもね!」

なんか違う意味の友情まで、できてるし。

それにしても、他の人も勝つてに楽しんでいる様子だ、

まあ、ここにいる人達、全員、良い人だから、まったく問題ないんだけど。

はやてが、シグナムに抱っこされながら、僕のところに来て来る。

「奏君、シグナム達の弁護まで、ありがとうな。」

「あ、そのことなら、僕というより、グレアムさんがきちんとしてくれてるからね。」

そう、あの人にも、しっかり働いてもってるよ。

「でも、それでも・・・」

はやてが何か言おうとした時に、

「奏くん、楽しんでる!?!」

シヤマルが、僕に抱きついて来た。

「「「「「!?!?!?!」」」」」

なぜか、一瞬、大量の殺気があったような……気のせいかな？

「シヤマルさん、どうしたの?」

「それはね……はい、あ〜ん」

そう言って、お箸を僕の口に近づけてくる。

もちろん、お箸の先には、おかずが掴まれている。

「ど、どうしたの!?!」

「私は、個人的にも、ナイトくん、うんうん、奏君には、お世話に

なったから、今日、お返ししようと思って」

「そうなんだ……………」

これは……………でも、お礼って言われたから、断るのも……………

「分かった。あ〜ん。」

そう言って、おかずを食べる僕。

あ、さすが、お母さんが作った料理。

美味しい。

「主奏！！私もします！！」

そう言って、リンフォースもお箸を奏の口に近づかせてきた。

「みんな、抜け駆けはダメだよ」

目からハイライトが消えた、すずかも、参戦。

この事態に、魔王様が黙っているはずもなく。

「奏にあぐんするのは、私の特権なの!!」

さらに、フェイト、アリサを加えての混戦になった。

ちなみに、梨桜は、無我夢中で食べている。

でも……僕は誰かに食べさせてもらわなくても、一人で食べれるんだけどな……。

「はは、奏君は、大変やな。」

「まったくです。」

はやてとシグナムが、そう言っているけど、意味が分からない……
どっという意味だろう？

「そういえば、さつき、病院で聞かせてもらった、奏君の能力で神話の聖剣が使えるんじゃない？」

「うん、知っているのなら、ある程度使えるよ。」

このパーティが始まる前、つまり、病院にはやてを迎えに行ったのは、僕とシグナムとシヤマルだ。

もちろん、他の皆は、部屋の飾り付け。

そして、退院の手続きに少し時間がかかってしまった時に、はやてに僕の希少技能について少しだけ、話した。

「それでな、ちょっと疑問なんやけど、魔剣って使えるん？」

「え？どついう意味？」

「あのな、魔剣と呼ばれる剣も、元を辿れば、聖剣だったりするんですよ、使う人によって、聖剣になったり、魔剣になったりするんですよ。」

「……………そうなんだ、はやてはよく知ってるね。」

魔剣が使えるかなんて、考えもしなかった。

「それは、図書館が友達やったからな。」

「はは、でも、今は、図書館の他に友達や家族が一杯いるけどね。」

「うん!!--」

そう、元気よく返事をする、はやて。

「それにしても、主。それがどうしたのですか?」

シグナムがはやてに質問する。

後ろの戦いが激化しているような気が………。

「あんな、シグナムのデバイスの名前ってレーヴァテインやる?」

「はい。」

「この世界の神話の中にも、同じ名前の剣があるんよ。それでな、その魔剣を奏君が、使えるのかなって疑問に思っただけや。」

「……なんか嫌な予感が。」

「そ、それは本当か!?!」

シグナムが、目をキラキラさせながら、僕を見ている。

「………やろうと思えば、たぶんできる」

「模擬戦するぞ!?!」

シグナムに体を抱えられて、連行させそうになる。

「シ、シグナム!?!今日は、はやての退院祝いのパーティーなんだよ!?!」

「ええよ。そっちの方が面白そうやし。」

なんでも、ここが一番、周りに被害がないらしい。

ちなみに、シグナムは、すでにバリアジャケットを展開してやる気満々だ。

………はやては、なんかニコニコしてるじ。

もう、どうにでもなれだ!!

「 魔剣解放

レーヴァテイン 「

僕の右手を炎が覆う。

そこから、一本の炎を纏った剣が現れる。

「これが、レーヴァテイン………。」

持った感じ聖剣と何も変わらない。

やっぱり、聖剣も魔剣も元を辿れば、どこかで繋がってるからかな？

「高町、準備はいいか？」

シグナムが一応聞いてくれる。

……その目を見ると、キラキラ輝かせている。

本当に戦闘マニアなんだ。

「うん、いつでもいいよ。」

「では、始めよう。いざ尋常に。」

「勝負！！」「」

二人言った瞬間、僕とシグナムは、同時に走り出した。

先手を取った方がこの決闘をかなり有利に進められる。

そう確信しているからだ。

なぜなら、魔力は僕の方がシグナムより上。

しかし、シグナムは僕より、剣術が上。

後は、お互いの得物だけど、たぶん、ほとんど能力に関して差はない。

「「はああああああ！」「」

お互いのレーヴァテインが激突する。

お互い炎を纏わせているせいで、僕達の周りの温度が急上昇しているのが分かる。

拮抗する二人のレーヴァテイン。

「やるな、高町。」

「シグナムさんこそ。」

それから、幾度となく、炎を纏わせたレーヴァテインで斬り合うが、まったくの互角。

「はあはあはあ、楽しいぞ、こんなに楽しい決闘は久方ぶりだ。」

シグナムさんが、かなり怖い。

決闘中なのに、満面の笑みだよ。

「しかし、私も、高町も限界だろう。だから、次で決めるぞ。」

「分かりました。」

お互い睨み合う。

「紫電」

「レーヴァ（世界を焼き尽くす）」

「一閃！！」

「ティン（武器）！！」

アースラの訓練室内に、部屋全体を覆い尽くすほどの炎が発生する。

その炎によって、たぶん、外からは、今、どうなったか見えなかったはずだ。

「・・・・・・・・」

立ち尽くす、僕とシグナム。

「ドサッ」

二人同時に倒れた。

お互いの技が、お互いの体に当たったために、お互いが、かなりのダメージを受けてしまった。

完全に引き分けだ。

はあ、もう、当分は模擬戦は、こりこりだよ。

シグナムも、満足そうな顔してるし。

「シグナムさん、奏に何したの？」

絶対零度を思わせるほどの冷たい声。

……倒れた状態で、その声が見ると、そこには、お姉ちゃん、ファイト、アリサ、すずか、リンフォース、シヤマルが立っていた。

「シグナムさん、O H A N A S Iなの!!」

【IN 梨桜】

「モグモグモグ、あれ？皆さんどこに行ったんでしょ？」

【END】

番外編・第二話『プリクラ』(前書き)

番外編の第二話です。

今回はフェイトとのイチャイチャの話を書いたつもりだったので
が・・・正直微妙でした・・・。

次話で番外編は最終回になります。

番外編・第二話『プリクラ』

【INフェイト】

「ただいまです。」

「フェイトさん、『です』は、いらないわ、やり直しなさい。」

今、私には、新しく帰る『家』ができました。

私は、リンディさんの家の養子になりました。

「どうしたの？フェイトさん。」

「た、ただいま、リンディ母さん／＼／」

「はい、よく言えましたフェイトさん。」

「あ、あの……。」

「なあに？」

「『さん』はいらないです／＼」

「あら、私ったら、ごめんなさいね、フエイト。」

「はい／＼」

帰って来た時、毎回ある会話をリンディ母さんと交わした後に、制服から私服に着替えるために自室を訪れた。

私はポケットに入れておいた、携帯を机の上においた。

その時、たまたま、携帯を裏向きに置いてしまった。

携帯の裏に張られていた『プリクラ』が見えた。

そこに写っていたのは、私と……／＼

私の親友の弟で、私の大好きな人でした。

「懐かしいな。」

懐かしいと言っても、つい最近、闇の書事件が解決してから二週間くらいたったある日でした。

そう、私が養子の件で悩んでいた、ある日の放課後のことでした。

「フェイト、明日、開いてる？」

「え？どうしたの、奏？」

「うん、ちょっと、フェイトと出掛けたいんだ。」

「でも、二人で出掛けたりなんかしたら……」

なのはに、スターライトブレイカーを……。

「大丈夫だから。安心して。」

「そうなの？」

「うん、それで、明日の朝10時に、駅前。」

「分かった。」

明日は日曜日だから、基本的に休み。

管理局の仕事も、ちょうど、昨日終わったところなので、明日は予定がなかった。

「それにしても、よく、皆、納得したね。」

「うん、ちょっとだけね。」

そこで、私は見てしまった………すずかが、死んだ目をして、姿勢正しく、椅子に座っているのを。

まるで、何かに生気を吸いとられたみたいだ。

よく見ると、他にも、二人いる………なのはとアリサだ。

奏が二人に何かしたのかな？

でも、奏は基本的に女の子に優しいし………。

「それじゃあ、また明日。僕は今日、行く所があるから、先に帰るね。」

「あ、うん。」

奏が帰ったのを見送ってしまった。

ここで私は自分の愚かさに気づいた。

奏がいなくなるのだ。

奏がいなくなったことにより、奏と明日二人で出掛けることについて、三人から制裁を受けるかもしれない……。

「『ガタツ』」

私は自分の命が今日まで、だと確信した。

しかし、現実には、違った。

「……フイトちゃん、明日、奏と楽しんで来てね。」

「……そうだよ、絶対だよ。」

「……羨ましくなんかないんだからね。」

死んだ目をしたまま、なのは、さすが、アリサは、順番にそう言うて来た。

．．．．．なんか、怖いよ（泣）

後日知ったことなんだけど、奏は、この日『明日、フェイトと出掛けるの邪魔したら、その人とは、一カ月、喋らないよ。』と、なのは、さすが、アリサに行ったらしい。

．．．．．なんか、さすがだ。

次の日の朝には、すぐになった。

なぜか、夜の10時から、明日着て行く服を選んでいたら、朝になつていた。

なんでだろ？

ちなみに、今日の私の服は結局私では、選べなかつたから、リン
デイさんに選んでもらった。

黒いドレスみたいな服だった。

リンデイさんは、この服のことを、ゴスロリメイド服って呼んでた
けど、珍しい服なのかな？

町を歩いていると、なぜか、皆、私を見てるみたいだし……

720

なんか、恥ずかしいな。

それから、約10分、私は、駅に向かって無言で歩き続けた。

「あ、フェイト。」

「おはよう、奏、待った？」

「うんうん、今、来たところ。」

「そうなんだ、良かった。」

「その子、三十分前から、待ってたよ。」

駅の方から、女の人の声が聞こえたので見てみると、女の駅員さんがいた。

奏が、顔を真っ赤にする。

クスツ、奏、可愛い。

「そ、それじゃあ、行こうか／＼／」

「うん」

私は、奏の隣を歩いた。

奏、今日はどこに連れて行ってくれるんだろう？

奏は、私に電車に乗るための切符を渡してくれた。

本当にどこに行くんだろう？

それから、電車に乗ること、三十分。

奏と私は、とある大きな建物についた。

「奏、この建物は何？」

「水族館って言って、海に住んでいる魚とかを飼育している所なんだ。」

「そうなんだ。」

魚って……さしみ？とかサバの塩焼き？とかのことかな？

全部おしいけど……あれを飼育してる所に行って何が楽しいんだろう？

奏は、そういうの見るの好きなのかな？

・・・

・・・

・・・

「すず〜〜い！〜！」

何て言っていていいんだろう？

色んな色の魚がいて、とつても、綺麗！！

すごい、こんなの見たことない。

「あ、フェイト、そんなに水槽に近づいてると・・・。。。」

「きゅあー!？」

おつきくて黒いのが私の傍を通った。

「それ、マグロだよ。」

「え？あのお刺身でおいしいの？」

「え、あ、うん。」

「そうなんだ〜。奏は色んなこと知ってるね。」

あれが、あの美味しい、まぐろなんだ。

「ほら、次いこうよ。」

「うん！〜！」

自然に奏の手と手をつないでいた。

「あ、フェイト、イルカのショーをするみたい。行ってみよっよ。」

「うんー!!」

イルカって、なんだろう？

「わあ、すごいー!!」

最前列で、いるか？シヨーを見ることができた私は、ただ、ただ、驚かされた。

すごい、あんな高い所にあるフラフープを、くぐるなんて。

「それでは、ここで、恒例のイルカくんに餌をあげてくれる人を、探したいと思います。餌をあげたい子~~~~。」

それを聞いた瞬間に、私は、手を真っ直ぐ、挙げていた。

「あ、じゃあ、その最前列にいる、金髪の女の子お~~~~、ステージに上がってきてください~~~~。」

「か、奏、どうしようー!?!」

あげたかったけど……まさか本当に、あげれるなんて……

「行ってきなよ、僕はここで見てるから。こんなことめったにないから、絶対楽しいよ。」

「う、うん!!」

私は、スタッフさんに促されるまま、ステージに上がった。

いるか？さんは可愛かったです／＼／

私と奏は、いるかさんショーが終わってから、もう一度、水族館の中を見て回りました。

本当に綺麗な魚がいて、可愛い子供がいて……ものすごく楽しかったです。

そして、今、私と奏は、水族館の外にあったベンチで休憩しています。

「奏、今日は、楽しかった、ありがとう。」

「どういたしまして。」

ニコッと微笑んでくれる奏……可愛かった／＼

「それでね、フェイト、この頃、何か悩んでるでしょ？」

「えっ？」

私は、今、リンディさんの養子になるか、どっかで、悩んでるんだけど……。

なんで、奏は分かったのかな？

「なんで、分かったの？」

「溜息の数が増えたことと、ポーとすることが多くなったから。」

「……奏には、敵わないな。実はね、リンディさんに養子にならないかって誘われてるの。」

「……そうなんだ。」

「うん、それで、悩んでたんだ。」

「……フェイト、きっと、プレシアさんは生きている。」

「え？」

「僕が、必ず会わせてあげる。でもね、きっと、プレシアさんも、フェイトの幸せを望んでると思うんだ。だから、リンディさんの養子の件を受けるべきだと思う。」

「なんで？なんで？母さんが生きているって、分かるの？それに、なんで生きているのに。私は養子になった方がいいの？」

「……………なんで生きているかは、いえない。でも、必ず、会わせてあげる。でも、あの人も、きっとフェイトが幸せな家庭で過ごすことを望ん
」

「なんで!!」

「え？」

「だって、母さんは、一人だけなの!!」

「……………実はね、僕にも、お母さんは、二人いるんだよ。」

「え？」

「育ての親の桃子お母さんと、僕を生んでくれた母さん。でも、僕は二人共好きだよ。」

「二人のお母さん？」

「うん、別にお母さんが、二人いてもいいじゃないか。プレシアさんに、また会える、その日まで、リンディさんに、プレシアさんが

嫉妬するくらい、甘えたらいいじゃないか。」

「……………」

「きっとプレシアさんも、それを望んでるよ。」

「……………もう、少し考えてみる。」

「うん。そうだ、二人で、初めて出かけた記念に何かできればいいんだけど……………あれだ!!」

「え？」

奏が指差したのは、ゲームセンターの中にある機械だった。

「あれ、なに？」

「プリクラ、写真が撮れるんだよ。」

「そうなんだ。」

その時に取ったプリクラ、私の母さんは一人だけって考えを変えてくれた大切な日に、撮ったプリクラ。

私が、奏のことを好きだと再認識した時の、記念のプリクラ。

いつの日か、プレシア母さんに会ったら、リンディ母さんと三人で出かけたいな。

番外編・第三話〈やさしい魔王との出会い〉（前書き）

今回は想像屋様の魔法少女リリカルなのは やさしい魔王の奇跡と
のクロスのお話です。

番外編・第三話くやさしい魔王との出会い

「アテネ、今日もよろしくね。」

「うん」

僕は今、クリエーターの能力を使いこなすための修行をアテネとしている。

ちなみに、アテネもどうすれば、使いこなせるようになるかは、分からないらしく、ただ、力が暴走した時に抑えてくれるだけだけど。

「誰が、ただの抑えよ!!」

アテネが僕の頬っぺたをつねる。

「いひゃいよ、あへね。」

「奏の頬っぺたって女の子よりも、柔らかいのね」

「~~~~~」

「それじゃあ、気を取り直して、始めましょうか？」

「……………うん。」

「さあ、詠唱を、はじめて。」

「うん。」

僕は、精神を集中させる。

「I a m t h e w o r l d . (私は世界) 」

それは、言葉を覚えたての子供の声のようで、

「The world always make mistake .
(世界はいつも、間違っ)」

それは、歳を老いた、老人の声のように。

「But I always choose . (しかし、私は選ぶ)
」

大人の男性の声で。

「Because I expect . (なぜなら、わたしは期待
する)」

大人の女性のような声で。

「We expect our fate.」運命に期待する。」

そこで、いつもと何か違う感じがした。

あ、あれ!?

「やばいわ、奏、力を抑えて私もできる限り」

アテネが全て言い終わる前に白い光に包まれた。

「うっ~~~~。」

頭が痛い。

なんだろう？

.....あ!?

確か、アテネとクリエーターの力をコントロールするための修行をしている最中になぜか、力が暴走して.....。

僕は、おそろおそろ、瞳を開ける。

.....どこ、どこ？

僕の瞳には、まったく知らない光景が広がっていた。

.....たぶん、クリエーターの力が暴走した影響で知らない世界に飛ばされてしまったのかな？

そこで、気づいた、背後に殺気を放つ誰かがいることを。

これは!?

僕は、

「
聖剣解放

エクスカリバー
」

エクスカリバーを創りだし、背後の殺気を放ってくる人物の方を向く。

……そこには、全身黒づくめで仮面をかぶった、大きな男がいた。

この人、強い……。

たぶん、僕よりも。

「!？」

なぜか、僕の顔を見た瞬間に男に動揺がはしった。

ん？

どうしたんだろう？

「貴様は何者だ？」

男が問いかけてくる。

「……………高町奏。」

「な!？」

さらに男に動揺する。

そこで、男が仮面をとった。

今度は、僕が驚く番だった。

そこにいたのは、『なのはお姉ちゃん』だった。

……でも、殺気の放ち方とかで男だと思ったんだけど。

まさか、なのはお姉ちゃん（大人バージョン）だなんて。

成長している所を見ると、並行世界か未来の世界にいることになるだろうけど、未来なら、なのはお姉ちゃんが、そこまで動揺することもないだろうから、きっと、並行世界だな。

「なのはさんですか？」

たぶん、初対面だから、一応聞いてみる。

「………違う。」

え？

どこから、どう見ても、なのはお姉ちゃんにしか見えない。

「俺は、高町直……シユラウド・レインだ。」

「今、高町って言ったよね、どっいづこと？」

「おまえが知る必要はない。」

「そうなんだ。」

「で、おまえは本当は何者だ？高町家に、おまえのような人間はいない。」

「シユラウド・レインさんは、転生って信じますか？」

「！？」

あれ？

ここ、動揺する所なのかな？

「……………貴様、何を知っている？」

「え？」

瞬間、僕の後ろにシユラウドさんは、周り込んでいた。

……………ほとんど、まったく、見えなかった。

どうやったんだろう？

たぶん、レアスキル希少技能か何かだろうけど。

僕は咄嗟に前に飛び、シユラウドさんに対抗するための聖剣を創りだす。

「
聖剣解放

おまのむらぐものしん
天叢雲剣

この聖剣なら、相手がどんな、能力を持っている相手とでも渡りあえる。

相手の力の源である魔力を奪うのだから。

「……………ほづ。」

シユラウドさんは、驚いているというより、感心しているようだった。

この人の力は、底がしれない……………。

「喰らえ、天叢雲剣！！」

周囲の魔力とシユラウドさんの魔力を吸い始める。

これで、普通の人間なら、立っているのが、やっとになるはず……
……梨桜なんかの高レベルの人には、今の段階では、あまり効果
がないけど、それでも、希少技能の効果を弱らせられるはず。

そうならば、僕でも知覚できるはず。

「さらに、魔力を吸収するのか。なかなかだな。もし俺が『普通の
魔導師』なら、負けていたかもしれないが、あいにく、『普通の魔

『導師』では、ないのでな。」

「な!？」

天叢雲剣で、魔力を吸収できなくなった!？

「……いや、吸収する速度よりも遙かに大きな魔力をシュラウドさんが放出しているのか。」

すごいな。

もし、僕が同じことをされたら、ろくに戦闘できなくなると思うのに。」

でも、僕もここで、死ぬわけにはいかない。

まだまだ、したいことがたくさんあるから。

殺気を最大限に、放つ。

そこで、シュラウドさんは、殺気を消した。

「もういい。だいたい分かった。お前の殺気は澄みきっている。まだ、『やった』ことのない者が放つ殺気だ。」

「え?」

「まあ、気にするな。で?おまえは、本当に何者だ?」

「……………まあ、信用してもらえたなら、いいよ。たぶん、僕は君とは違う並行世界で生きていた人間なんだ。僕の希少能力の制御の練習の最中に、希少技能が、暴走して、この世界に飛ばされたんだと思う。」

「……………俺も、人のことを言えたりではないからな。それで、帰るめどはあるのか?」

「一応、僕より遥かに魔法に詳しい人（人間じゃないような気もするけど）が傍にいたから、なんとかかして僕を連れ戻しに来てくれると思うんだけど、それまでは……………」

「行く宛がないんだな。分かった。着いて来い、今、俺がいる所に連れて行ってやる。」

「……………いいの？」

「九歳くらいに行く宛のないガキを、ほったらかしにして、明日もし、死んでいたら、目覚めが悪い。」

「それでも、ありがとう。」

こうして、僕は、元の世界に帰れるまで、シユラウドさんの所に住まわせてもらうことになった。

「なんや、シユラウドはん、子供増えたんか？」

……………シユラウドさんに連れられて来たのは、な、なんと機動六課だった。

まさか、まだ九歳なのに、機動六課に来ることになるとは……。

皆さん、忘れてるかもしれないけど、僕は一応、原作の知識があるんだよ。

そして、今、シュラウドさんに、話しかけたのは、何を隠そう、八神はやて（大人バージョン）だった。

ちなみに、今は六課のロビー？にいる。

受付とかあるから、たぶん、合ってるだろう。

「いや、少し訳があつて、預かることになったんだ。」

「そうなんや〜〜。君、名前なんて言うん？」

「高町奏です。」

・・・

.....

.....

失敗した!!

この世界では、僕は、高町家の子じゃないんだ!?

「.....な!?!.....まさか、この顔、なのはちゃんに、なんとなく似てる.....うんうん、どちらかと言うと、土郎さんに.....それも、高町.....ま、まさか、シユラウドはんと、なのはちゃんの子供!?!」

すると、少し離れた所で、書類が落ちた時にする、バサっという音が聞こえた。

そこにいたのは

「な、なのはの、こ、子供!?!?!.....そ、そんな.....私に何も相談もせずに.....な、なんで.....いや、でも.....ユーノもそんなこと言ってなかったし.....でもでも、なのはも、働いてるから、そういうこととしても、子供をきちんと、育てられるわけだし.....でも.....もし、男の人が育児放棄な

んかをしたら・・・でも・・・私はなのを見捨てないから・・・
・・・そうだ！！私となのは育てよう！！うん、それ
がいい。もし子供が、お父さんを恋しがったら、私がお父さんの代
わりになってあげれば、大丈夫、それに、エリオとキツヤ口共、上
手くできてるし、家族が増えると思えば！！大丈夫！！その子は、
私となのは育てます！！」

・・・

・・・

・・・

「「「なんでやねん！！」「」」

その場にいた三人、全員が、フェイトにツッコミをいれた。

「ふう、分かってくれたか。」

それから、約三十分、僕達、三人は必死にフェイトの誤解を解いて
いた。

事情を理解したフェイトは、顔を真っ赤にして俯いてしまった。

「ごめんさい、私ったら早とちりしちゃって、次元漂流者なら、なのはとシユラウドさんの子供のはずないもんね。」

「はい。なのはさんは、僕の母親ではありません（姉です）。」

「そうなんだ。」

「それにしても、フェイトちゃん、妄想しすぎやで。」

「ごめん、はやて、ちょっと混乱しちゃって。」

どう混乱したら、『その子は、私となのはで育てます!』っていう発言が出てくるんだろう？

まあ、そこは深く突っ込んだら、負けのような気がするのでシツコミはいれない。

「ほえ？みんな集まってどうしたの？」

そこに現れたのは、なにを隠そう、勘違いされた張本人だった。

「な、なのは、何でもないよ、私は信じてるから。」

「ほえ？」

首を傾げた、なのはお姉ちゃん（大人バージョン）は、頭の上に？マークが浮かんでいたような気がした。

「そ、それじゃあ、私は仕事があるから！！」

そう言って、早足でこの場から立ち去るフェイト。

ちなみに、床に落ちた書類は、そのままだった。

それなしで仕事できるのフェイト？

「へんなフェイトちゃん。」

「「「ははははは。」「」」

事情を知る僕達は、苦笑するしかできない。

「あれ？その子どうしたの？」

「あ、次元漂流をってしまったって困っていた所をシユクラウドさんに助けていただいた、高町奏です。」

「そうなんだ、始めまして、奏君、私は高町なのは、私と名字一緒だね。」

「………はい。」

「うっん、シユクラウドさん。」

「なんだ？」

「この子の面倒は私が見ます。」

「「「え？」「」」

「この子、名字も一緒だし、なんか、他人の気がしないんです。もしかしたら、私の知らない親戚の子かもしれませんし。」

「……………奏は、どうしたいんだ？」

……………どうしよう、せっかく言ってくれてるし。

でも、もし、この世界のなのお姉ちゃんに世話をしてもらったら、間違いなく、大変なことが起こると思うし……………。

「……………嫌かな？」

しゃがんで、僕のことを涙目で見てくる、なのはお姉ちゃん（大人バージョン）。

「分かりました。よろしくお願いします。」

一瞬で承諾してしまいました。

基本、涙に弱いです。

「一応、シユラウドさんに確認するために、シユラウドさんの方を見るよ。」

「好きにしる。」

そう言ってくれた。

ありがたいな。

「じゃあ、私の部屋に行こうか？」

「はい。」

僕は、そう言って、この世界のお姉ちゃんの後に着いて行った。

ちなみに、仕事を終えて、お姉ちゃんと相部屋のフェイトが部屋に帰って来た時、

『やっぱり、なのはの子供で、育児放棄!!』

とか、夜遅いのに叫んだのはなかったことにしたいです。

次の日の朝に、お姉ちゃんとフェイトに連れられて、食堂に案内された。

そこにいたのは、

「グッドモーニング、奏、私が恋しかった？」

黒髪で赤い瞳の赤い瞳の超絶美人のアテネだった。

「ア、アテネ!？」

「うん、アテネだよ」

「奏君、君の知り合い？」

フェイトが、そう聞いてくる。

「はい、僕の」

「保護者です！！」

「そ、そうなんすか。」

あまりのアテネのテンションの高さに若干、フェイトが混乱している様子だ。

「……………」

よく見ると、アテネの横の席で、シュラウドさんが、疲れ切った様子で何もせずに座っていた。

「どうしたんですか！？シュラウドさん！？」

「どうしたか？じゃないぜ、この女をなんとかしろ、朝から、こん

なテンションの女の相手をしていたら、体がいくつあってもたりない！！」

「……アテネの相手は真面目な人がしたら、相当負担になるからな。」

「もう、レディーの相手もできない男の子はモテないわよ。」

「……」

そのアテネの言葉を無視するシユラウドさん。

「……返事するのも、しんどいくらい、疲れたんだな。」

「じゃあ、帰ろうか奏。」

「うん。」

すると、少しだけ、お姉ちゃんが寂しそうな顔をした。

「もう、帰っちゃうんだね、本当は喜ぶ所なんだけど、私は少し寂

しいな。
「

「また、会えますよ。」

「え？」

「俺もそう思う。」

シユラウドさんも同意してくれる。

きつと、またいつか。

「じゃあ、奏、帰るわよ。」

「うん。本当にありがとうございました。」

「また会おうね。」

「奏、元気でね。」

「アテネ、もう来るなよ。」

お姉ちゃん、フェイト、シュラウドさんの順に、見送りの言葉を言
つてくれる。

でも、シュラウドさんだけ、疲れ切った声だった。

こうして、僕の初めての並行世界での一日が本当に終わった。

番外編・第三話くやさしい魔王との出会いく（後書き）

私は今まで、誰かの作品とのクロスはしたことがなかったので、不安だらけで書いたのですが・・・きちんと書けていたでしょうか？

かなり不安です・・・。

後、少しだけフェイトさんが変なことを言ってしまった気がします
が・・・気にしない方向でお願いします。

ご意見、ご感想、お待ちしております。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8846m/>

魔法少女リリカルなのは～奏でる世界～

2010年12月30日07時58分発行